飯山市埋蔵文化財調査報告書　第32集

国営飯山農地開発関係遺跡発掘調査報告Ⅱ

鳴沢頭Ⅰ・鳴沢頭Ⅱ・カササギ野池
休場・下境大原遺跡

1992

飯山市教育委員会

飯山市埋蔵文化財調査報告書　第32集

国営飯山農地開発関係遺跡発掘調査報告II

鳴沢頭I・鳴沢頭II・カササギ野池
休場・下境大原遺跡

1992

飯山市教育委員会

調査地遠景　対岸奥志賀スーパー林道より　1999.8.27

鳴沢頭Ⅰ遺跡　土坑並列状態（西から）
（人が入っているのが土坑）

鳴沢頭Ⅰ遺跡　SK28（北から）

休場遺跡調査風景（南から）

鳴沢頭II遺跡調査風景

鳴沢頭II遺跡 出土土器・石器

カササギ野池遺跡 出土土器・石器

下境大原遺跡 出土土器・石器

序

飯山市教育委員会
教育長　岩　崎　　彌

飯山市は、長野県の北端に位置し、市の中央を千曲川がゆったりと流れています。この千曲川によって形成された肥沃な平地を中心として発展してきた飯山は奥信濃の産業・経済の中心地であり、古くは上杉謙信方に属し、信濃の北の要衝としての役割を果たしてきました。

また、この地域は、原始～古代、中世にいたる埋蔵文化財の宝庫であり、特に飯山市には原始～古代の遺跡が多いことでも知られています。これまでに、埋蔵文化財包蔵地として400を超える遺跡が確認されており、最近の開発ラッシュにより、多くの遺跡の発掘調査が実施され、後世に伝えるための記録としての報告書もその都度発刊しています。

今回の発掘調査は、国営飯山農地開発事業の一環として施工された二工区の農地造成工事に伴うもので、関田山麓の千曲川左岸の山地段丘に広大な優良農地を開拓しようとする事業により失われる埋蔵文化財を記録として保存するため、事前に緊急発掘調査を実施したもので、昨年度に引き続き行われました。

本調査によって、縄文、平安の各期にわたる遺構・遺物が多数出土しました。特に約1万年以上前という飯山市最古の、また県内でも極めてめずらしい縄文時代草創期の土器の出土がみられた点は、当時の奥信濃文化を知るうえで大きな手がかりとなりました。

飯山市教育委員会は、この貴重な文化財を大切にし、永く後世に遺していきたいと考えています。

この報告書が学術報告書として活用されるとともに、市民の方々に広く親しまれ、飯山市の埋蔵文化財に対する関心と愛着の念が一層深められるよう念願いたします。

最後になりましたが、この緊急発掘調査に協力してくださった関東農政局飯山開拓建設事業所及び地元関係者など多くの市民の方々の御厚意に対し心から御礼申し上げるとともに、調査にあたり御指導をいただいた文化庁、長野県文化課をはじめ関係各位に厚く御礼申し上げます。

例　言

1　本書は、長野県飯山市大字一山字鳴沢頭3585-2ほかに所在する鳴沢頭Ⅰ遺跡、同大字照岡字鳴沢頭976-11Bほかに所在する鳴沢頭Ⅱ遺跡、同大字照岡字大谷地1001-3ほかに所在するカササギ野池遺跡、同大字照岡字長塚984-エほかに所在する休場遺跡、同大字一山字引桜3611-イ（B）ほかに所在する下境大原遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　本書で報告する遺跡は、縄文時代草創期から前期、および平安時代の遺跡である。

3　調査は国営飯山農地開発事業に伴うもので、関東農政局飯山開拓事業所より依頼を受けた飯山市教育委員会が国庫補助を受けて実施したものである。調査費の割合は、関東農政局飯山開拓事業所委託金91％、文化財保護行政個負担金９％（国庫補助金50％・県補助金15％・市負担金35％）である。

4　発掘調査は飯山市教育委員会が下記に掲げる調査会を設立し、調査団を組織して実施した。

飯山市遺跡調査会（平成3年度）

顧　問	小山　邦武	市　長
会　長	佐藤　春夫	市教育委員会委員長
副会長	長谷川元一	市社会教育委員長
委　員	滝沢藤三郎	市文化財保護審議会会長
	丸山　豊雄	市議会総務文教委員長
	中村　敏	市公民館長
	高橋　桂	日本考古学協会会員
	山崎美都枝	市教育委員会委員長職務代理（平成3年10月7日退任）
	福沢　裕文	市教育委員会委員長職務代理（平成3年10月8日就任）
	岩崎　彌	市教育委員会教育長
事務局長	佐藤　清	市教育委員会教育次長
事務局次長	渡辺　博	市教育委員会社会教育係長
事務局員	望月　静雄	市教育委員会社会教育係
	樋山二二子	

調査団

団　長	高橋　桂	飯山北高等学校教諭
担　当	望月　静雄	
調査員	常盤井智行	
	田村　況城	
	桃井伊都子	
	中島　英子	（整理）

作業参加者（順不同）

米持元志・村山亨・樋口幸正・樋口栄・高橋ちよゑ・米持なつゑ・斉藤小雪・斉藤セツ子・村山くま・江口武雄・江口正二（以上温井）　市村重子・宮沢志づ江（以上上境）　渡辺貞子・渡辺節子（以上桑名川）　山崎満枝（大深）　高橋陸子（今井）　樋口巌・上原みつ枝（戸狩）

整理参加者（調査員等除く）

小林みさを（柏尾）　北山けさえ（市ノロ）　樋山二二子（戸狩）

5　発掘調査は調査員常盤井・田村・桃井が中心となって行った。

本書の執筆は分担して行い、高橋団長が統括した。文責は目次に明記した。

6　発掘調査から本書の作成に至るまで下記の諸氏・諸機関からご指導・ご協力を得た。記して感謝申し上げる。（順不同・敬称略）

永峯光一・谷口康浩・柏谷崇（國學院大學）　児玉卓文・小池幸夫（県文化課）　広瀬昭弘・黒岩隆（県埋蔵文化財センター）　早津賢二（妙高火山研究所）　中島庄一（中野市教育委員会）　パリノ・サーヴェイ　吉川建設　飯山験送　広田建設　農用地建設協業組合　大島重機　岡山地区区長会　温井老人クラブ　関東農政局飯山開拓事業所　市農地開発室　市岡山出張所

凡　例

1　挿図中に示す方位は磁北である。

2　遺物実測図は、縄文土器は⅓、土師器¼、石器⅔を原則としている。

3　土器断面に四角の表示があるものは繊維土器である。

4　石器のスクリーントーン部は磨面を示す。

5　各編の遺物の項の参考・引用文献は第6編のあとにまとめた。

目　　次

巻頭図版　1．2．3．4．5．6．7．8
序
例言・凡例

第1編　序　　説

第1章　調査経過 …… 3
　1　調査に至る経過 …… 望月 …… 3
　2　調査と整理 …… 桃井 …… 4
　　A　発掘調査 …… 桃井 …… 4
　　B　整理作業と報告書の作成 …… 桃井 …… 4
　　C　発掘調査日誌抄 …… 桃井 …… 5
第2章　遺跡群の位置と環境 …… 10
　1　遺跡群の地理的位置と自然環境 …… 常盤井 …… 10
　2　遺跡群の歴史的環境 …… 常盤井 …… 10

第2編　鳴沢頭Ⅰ遺跡

第1章　遺跡の概要 …… 25
　1　遺跡の概要 …… 常盤井 …… 25
　2　調査方法 …… 常盤井 …… 25
　　(1)　調査地点　(2)　調査区の設定　(3)　調査方法
　3　層　　序 …… 常盤井 …… 27
第2章　遺　　構 …… 31
　1　土　　坑 …… 常盤井 …… 31
　　(1)　各　　説　　(2)　小　　結
　2　斜めピット …… 常盤井 …… 34
　3　焼　　土 …… 常盤井 …… 34
第3章　遺　　物 …… 40
　1　遺物出土状況 …… 常盤井 …… 40
　2　土　　器 …… 中島 …… 40
　3　石　　器 …… 中島 …… 42
　4　鉄 製 品 …… 常盤井 …… 43
第4章　結　　語 …… 高橋 …… 49

第3編　鳴沢頭Ⅱ遺跡

第1章　遺跡の概要 …… 53
　1　遺跡の概要 …… 常盤井 …… 53
　2　調査方法 …… 常盤井 …… 54

(1) 調査地点　(2) 調査区の設定　(3) 調査方法
3 層　序 …… 常盤井 …… 55
第2章 遺　物 …… 56
1 遺物出土状況 …… 常盤井 …… 56
2 土　器 …… 中島 …… 56
3 石　器 …… 中島 …… 63
第3章 結　語 …… 高橋 …… 76

第4編　カササギ野池遺跡

第1章 遺跡の概要 …… 79
1 遺跡の概要 …… 常盤井 …… 79
2 調査方法 …… 常盤井 …… 79
(1) 調査地点　(2) 調査区の設定　(3) 調査方法
3 層　序 …… 常盤井 …… 81
第2章 遺　物 …… 82
1 遺物出土状況 …… 常盤井 …… 82
(1) 縄文時代　(2) 平安時代
2 縄文時代の土器 …… 中島 …… 83
3 縄文時代の石器 …… 中島 …… 87
4 平安時代の土器 …… 常盤井 …… 88
第3章 結　語 …… 高橋 …… 93

第5編　休場遺跡

第1章 遺跡の概要 …… 97
1 遺跡の概要 …… 常盤井 …… 97
2 調査方法 …… 常盤井 …… 98
(1) 調査地点　(2) 調査区の設定　(3) 調査方法
3 層　序 …… 常盤井 …… 98
第2章 遺構と遺物 …… 99
1 遺　構 …… 常盤井 …… 99
2 遺　物 …… 常盤井 …… 99
A 出土状況 …… 常盤井 …… 99
B 土　器 …… 中島 …… 100
C 石　器 …… 中島 …… 100
第3章 結　語 …… 高橋 …… 102

第6編　下境大原遺跡

第1章 遺跡の概要 …… 高橋 …… 105
1 遺跡の概要 …… 常盤井 …… 105
2 調査方法 …… 常盤井 …… 105

(1) 調査地点　(2) 調査区の設定　(3) 調査方法
3 層　序 …… 常盤井 …… 105
第2章 遺　構 …… 常盤井 …… 107
A Ⅰ類土坑 …… 常盤井 …… 107
B Ⅱ類土坑 …… 常盤井 …… 108
C Ⅲ類土坑 …… 常盤井 …… 109
D Ⅳ類土坑 …… 常盤井 …… 109
E Ⅴ類土坑 …… 常盤井 …… 109
F Ⅵ類土坑 …… 常盤井 …… 109
G 小　括 …… 常盤井 …… 109
第3章 遺　物 …… 116
1 遺物出土状況 …… 常盤井 …… 116
2 土　器 …… 中島 …… 116
3 石　器 …… 中島 …… 119
第4章 結　語 …… 高橋 …… 127

あとがき …… 高橋・常盤井 …… 129

挿　図　目　次

第1編 序　説

図1 国営飯山農地開発事業計画平面図 …… 3
図2 遺跡の位置 …… 11
図3 発掘調査地周辺の地形 …… 12
図4 周辺の遺跡 …… 13
図5 ヤスミバ出土遺物 …… 14
図6 新堤遺跡出土旧石器 …… 15
図7 トトノ池南遺跡出土旧石器 …… 16
図8 新堤遺跡出土縄文土器1 …… 17
図9 新堤遺跡出土縄文土器2 …… 18
図10 新堤遺跡出土縄文時代の石器 …… 19
図11 トトノ池南遺跡出土縄文土器1 …… 20
図12 トトノ池南遺跡出土縄文土器2 …… 21
図13 トトノ池南遺跡出土縄文時代の石器 …… 22

第2編 鳴沢頭Ⅰ遺跡

図1 調査地周辺地形 …… 26
図2 調査地全体図1 …… 28
図3 調査地全体図3 …… 29
図4 土層図 …… 30
図5 土坑実測図1 …… 35
図6 土坑実測図2 …… 36
図7 土坑実測図3 …… 37
図8 土坑実測図4 …… 38
図9 土坑実測図5・斜めピット …… 39
図10 D10区ロームマウンド遺物分布図 …… 40
図11 B地区遺物分布図 …… 44
図12 縄文時代土器実測図1 …… 45
図13 縄文時代土器実測図2 …… 46
図14 縄文時代石器実測図1 …… 47
図15 縄文時代石器実測図2 …… 48
図16 鉄製品実測図 …… 48

第3編 鳴沢頭Ⅱ遺跡

図1 調査地周辺地形 …… 53
図2 調査地全体図 …… 54
図3 遺物分布図 …… 57
図4 縄文時代土器実測図1 …… 61
図5 縄文時代土器実測図2 …… 62
図6 縄文時代土器実測図3 …… 63
図7 縄文時代石器実測図1 …… 68

図8　縄文時代石器実測図2 …… 69
図9　縄文時代石器実測図3 …… 70
図10　縄文時代石器実測図4 …… 71
図11　縄文時代石器実測図5 …… 72
図12　縄文時代石器実測図6 …… 73
図13　縄文時代石器実測図7 …… 74
図14　縄文時代石器実測図8 …… 75

第4編　カササギ野池遺跡

図1　調査地周辺地形 …… 79
図2　調査地全体図 …… 80
図3　ＳＫ1遺物分布図 …… 82
図4　主要部遺物分布図 …… 84
図5　縄文時代土器実測図1 …… 86
図6　縄文時代土器実測図2 …… 87
図7　縄文時代石器実測図1 …… 90
図8　縄文時代石器実測図2 …… 91
図9　平安時代土器分布図 …… 92
図10　平安時代土器実測図 …… 92

第5編　休場遺跡

図1　調査地周辺地形 …… 97
図2　調査地全体図 …… 98
図3　土坑実測図 …… 99
図4　縄文時代土器実測図 …… 101
図5　縄文時代石器実測図 …… 101

第6編　下境大原遺跡

図1　調査地周辺地形 …… 106
図2　調査地全体図 …… 107
図3　土坑実測図1 …… 111
図4　土坑実測図2 …… 112
図5　土坑実測図3 …… 113
図6　土坑実測図4 …… 114
図7　土坑実測図5 …… 115
図8　遺物分布図 …… 117
図9　主要部遺物分布図 …… 118
図10　縄文時代土器実測図 …… 120
図11　縄文時代石器実測図1 …… 122
図12　縄文時代石器実測図2 …… 123
図13　縄文時代石器実測図3 …… 124
図14　縄文時代石器実測図4 …… 125
図15　安山岩の母岩分布 …… 126

表　目　次

第2編　鳴沢頭Ⅰ遺跡

表1　石器計測表 …… 43

第3編　鳴沢頭Ⅱ遺跡

表1　石器計測表 …… 66

第4編　カササギ野池遺跡

表1　石器計測表 …… 89

第5編　休場遺跡

表1　石器計測表 …… 100

第6編　下境大原遺跡

表1　石器計測表 …… 125

PLATE 目 次

ＰＬ1　遺跡航空写真
〈鳴沢頭Ⅰ遺跡〉
ＰＬ2　Ａ区重機による表土除去
ＰＬ3　Ａ区調査作業風景
　　Ａ区完掘状態（ＣＤＥ17～6）
ＰＬ4　Ａ区完掘状態（Ｆ15～Ｑ15）
　　Ａ区完掘状態（Ｐ15～Ｓ11）
ＰＬ5　Ａ区おとし穴配列状態（Ｒ10～Ｎ17）
　　Ａ区完掘状態（Ｗ14～Ｔ19）
ＰＬ6　Ａ区遺構上面（ＣＤＥ13～17）

ＰＬ６　Ｂ区完掘状態（ＤＥＦ27～24）
ＰＬ７　Ｂ区完掘状態（Ｈ17～14）
　　Ａ区土層
ＰＬ８　鳴沢頭Ⅱ遺跡より鳴沢頭Ⅰ遺跡を望む
　　発掘開始式
ＰＬ９　Ｄ10ロームマウンド土器出土状態
　　Ｄ10ロームマウンド土器出土状態
　　Ｄ10ロームマウンド土器出土状態
ＰＬ10　Ｂ区調査風景（ＤＥＦ24～27）
　　Ｂ区調査風景
　　Ｂ区縄文土器出土状態
ＰＬ11　Ｂ区遺物分布状態
　　Ｂ区土器出土状態
　　Ｂ区土器出土状態
ＰＬ12　Ａ区測量風景
　　土層調査（Ｃ12東側）
　　Ｂ区地山断ち割り旧石器調査
ＰＬ13　Ｂ区石鏃出土状態
　　Ｂ区石器出土状態
　　Ｂ区石匙出土状態
ＰＬ14　土坑写真
ＰＬ15　土坑写真
ＰＬ16　土坑写真
ＰＬ17　斜めピット
ＰＬ18　縄文時代の土器
ＰＬ19　縄文時代の土器
ＰＬ20　縄文時代の石器
〈鳴沢頭Ⅱ遺跡〉
ＰＬ21　鳴沢頭Ⅰ遺跡より鳴沢頭Ⅱ遺跡を望む
ＰＬ22　調査風景
　　遺物出土状態
ＰＬ23　遺物出土状態
ＰＬ24　遺物出土状態
　　下層の調査
　　測量風景
ＰＬ25　縄文時代の土器
ＰＬ26　縄文時代の土器
ＰＬ27　縄文時代の石器
ＰＬ28　縄文時代の石器
ＰＬ29　縄文時代の石器
ＰＬ30　縄文時代の石器
ＰＬ31　縄文時代の石器
〈カササギ野池遺跡〉
ＰＬ32　重機による表土除去
　　ＤＥＦ1～8　完掘状態
ＰＬ33　遺物出土により調査地拡張
　　調査風景
　　縄文土器出土状態
ＰＬ34　地山掘り下げ旧石器調査
　　地山掘り下げ旧石器調査
　　測量風景
ＰＬ35　縄文土器出土分布状態
　　縄文土器出土分布状態
　　縄文土器出土状態
ＰＬ36　遺物出土状態
ＰＬ37　縄文時代の土器
ＰＬ38　縄文時代の土器
　　平安時代の土器
ＰＬ39　縄文時代の石器
〈休場遺跡〉
ＰＬ40　重機による表土除去
　　完掘状態
ＰＬ41　調査作業風景
　　ロームマウンド（ＳＫ4）
　　ＳＫ２
ＰＬ42　縄文時代の土器
　　石　器
〈下境大原遺跡〉
ＰＬ43　重機による表土除去
　　調査作業風景
ＰＬ44　遺構上面
　　土坑並列状態
ＰＬ45　遺物出土状態
ＰＬ46　土坑写真
ＰＬ47　土坑写真
ＰＬ48　土坑写真
ＰＬ49　土坑写真
　　縄文時代の土器
ＰＬ50　縄文時代の石器

第1編　序　　説

第1章　調査経過

1　調査に至る経過

農林省関東農政局が進める『国営飯山地区農地開発事業』は、昭和58年より10年の計画で進められている。そして、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査は６か所が該当し、平成２年度より開始された。このことの経緯については、『国営農地開発関係遺跡発掘調査報告Ⅰ』（飯山市教育委員会　1991）で詳細に触れているので省略する。以下に、平成３年度の経過について触れる。

平成３年度は、鳴沢頭・カササギ野池・休場・大原の４か所の埋蔵文化財包蔵地が対象となった。このうちカササギ野池・休場の両遺跡については、従来より範囲が不明確であった。また、農地開発地域の端部にあたり、開発区域の変動も加わって遺跡の範囲に開発が及ぶのであるかどうかはっきりしないのが実情であった。このため、平成２年８月30日の県文化課・関東農政局との現地協議においても事前の試掘調査の必要性が話合われた。しかしながら、山林の伐採については発掘調査及び工事施工直前に実施する予定であり、２年度においての試掘は不可能であるとの結論となった。そのため、前記二遺跡については試掘程度の調査を実施することとし、他の二遺跡については対象地を全面調査することとした。なお、工事は土盛する区域と削平する区域とがほぼ明確に設計されていたが、盛土する区域においても表土の移動が行われるとのことであり、包含層が失われる危険があったために工事区域の全面を対象とすることとした。

なお、本開拓事業は９％の農家負担があるために、発掘事業においても91％の国庫委託金のほか、９％を国庫補助事業として実施した。

発掘事務の実際については、平成３年５月より着手した。関東農政局飯山開拓事業所と協議を進め、調査日程等の細部について検討し、６月１日付けで調査委託契約書を取り交わした。また、57条・98条による発掘通知・調査団委嘱などの事務処理を進めるとともに、国庫補助金申請書についても６月１日付けで提出した。

図１　国営農地開発事業計画平面図　1:50000　〈関東農政局資料〉

2　調査と整理

A　発掘調査

今回対象となった遺跡は、鳴沢頭Ⅰ・Ⅱ遺跡・カササギ野池遺跡・休場遺跡・下境大原遺跡である。発掘総面積5,600㎡、調査期間は6月中旬から9月中旬の約4か月間を予定した。そして縄文時代草創期の遺物の発見等多くの成果をもって発掘調査を終了した。以下発掘調査の概要を示す。

鳴沢頭Ⅰ遺跡

所 在 地　飯山市大字一山字鳴沢頭3585－2ほか
調査期日　1991(平成3)年6月17日～7月8日、8月12日～9月17日
調査面積　3,300㎡
調査結果　縄文時代：おとし穴・斜めピット、早期・前期の土器、石鏃・石匙・凹石・磨石等の石器

鳴沢頭Ⅱ遺跡

所 在 地　飯山市大字照岡字鳴沢頭976－11Bほか
調査期日　1991(平成3)年8月2日～9日
調査面積　300㎡
調査結果　縄文時代：草創期多縄文系土器、早期・前期の土器、石斧・石匙・磨石・凹石・石皿等の石器

カササギ野池遺跡

所 在 地　飯山市大字照岡字大谷地1001－3ほか
調査期日　1991(平成3)年7月8日～8月1日
調査面積　700㎡
調査結果　縄文時代：前期土器だまり、爪形文土器、前期土器、有舌尖頭器、石斧・石匙・凹石・石皿等の石器　　平安時代：土　器

休場遺跡

所 在 地　飯山市大字照岡字長塚984－エほか
調査期日　1991(平成3)年7月26日～31日
調査面積　300㎡
調査結果　縄文時代：おとし穴、早期・前期の土器、磨石・剝片

下境大原遺跡

所在地地　飯山市大字一山字引桜3611－イ(B)ほか
調査期日　1991(平成3)年9月10日～10月2日
調査面積　1,000㎡
調査結果　縄文時代：おとし穴等土坑、表裏縄文土器・早期土器、草創期？の円形掻器等の石器群

B　整理作業と報告書の作成

整理作業は10月より旧第三中学校寄宿舎で行った。整理手順は遺物洗浄・図面整理・遺物ネーミング・

接合・実測・トレース・写真撮影であるが、洗浄・ネーミング・接合については主として作業員の方々におねがいした。

本書の作成については、遺物の接合・復元は主として田村があたり、実測・拓本・トレースについては主として中島・桃井が担当した。遺構図の作成は主として常盤井があたり写真撮影は田村が担当した。

本書の編集は高橋団長指導のもと常盤井が行い調査員全員が協力した。執筆分担については目次に掲げた。

C　発掘調査日誌抄

1991(平成3)年　鳴沢頭Ⅰ・Ⅱ遺跡・カササギ野遺跡・休場遺跡・下境大原遺跡

5月15日(水)　各遺跡調査の日程・地点確認等について調査団と市農林課による打ち合わせ。鳴沢頭Ⅰ遺跡の発掘開始予定は6月中旬。

5月23日(木)　関東農政局岡山農地開発担当者と発掘打ち合わせ・現地協議。鳴沢頭にて工事用道路工事が開始されていたが中断し道路部分も含めての発掘を行うこととする。遺跡対象地の礫率調査については、鳴沢頭Ⅱは発掘終了後とし、休場・カササギ野池は発掘に先行して行い、立ち合い調査をすることとする。

6月3日(月)～6月11日(火)　コンテナハウス設置場所の下見、発掘器材の点検、作業員の募集等の発掘準備を行う。

6月7日(金)　休場・カササギ野池遺跡、農政局による礫率調査の立ち合い。いずれの個所も遺構・遺物は検出されず。

6月10日(月)　鳴沢頭にコンテナハウス設置。農政局と表土の排土置き場についての打ち合わせ。

6月11日(火)　鳴沢頭Ⅰ、重機による表土除去を行う(～13日)。ハウス近くの道路部分を重機によって試掘するが遺構・遺物は検出されず。

6月12日(水)　器材搬入。

6月13日(木)　鳴沢頭Ⅰ、調査地の地区割り杭打ち(～14日)、便宜的に地区内上段をA地区、下段をB地区と呼び分けることにする。

6月17日(月)　遺跡発掘調査開始式を現地で行う。引き続き便所設置・テント設営・ジョレンがけ精査等の作業を開始。

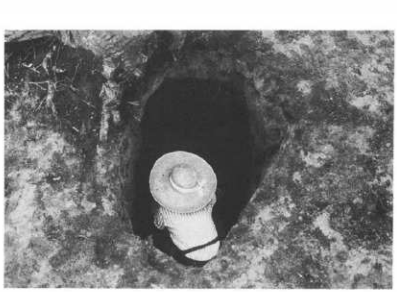
6月18日(火)　C～F－6～17区ジョレンがけ精査。

6月19日(水)　同上区ジョレンがけ精査続行。

6月20日(木)　雨のため現地作業中止。地元向けの発掘だより『かわら版岡山』No.8を発行。発掘関係者・見学者に配布。

6月21日(金)　同上区ジョレンがけ精査を続行。

6月24日(月)　C～F－9～17区ジョレンがけ精査・遺構掘り下げ。斜め穴ピット数か所。D－10区ロー



土坑の掘り下げ　鳴沢頭Ⅰ

ムマウンドより土器出土。鳴沢頭Ⅱ農政局による礫率調査の立ち合い。

6月25日(火)～26日(水)　雨のため現地作業中止。

6月27日(木)～7月1日(月)　C～F－14～17区ジョレンがけ精査、遺構掘り下げ等続行。C－15区で押型文土器出土。SK1～9、落とし穴か。

7月2日(火)　北部下段B地区ジョレンがけ精査開始。縄文前期の土器少量出土。

7月3日(水)　C～F－6～17区全体写真撮影。B地区ジョレンがけ精査。石匙出土。今後の発掘日程について関東農政局と現地協議。鳴沢頭を一時中断してカササギ野池・休場の調査を先行することとする(7月末をめどに)。

7月4日(木)～5日(金)　B地区および、A地区G～K－13～16区ジョレンがけ精査。C～F－5～11平板測量(～8日)。B地区より黒曜石製の石鏃出土。

7月8日(月)　鳴沢頭Ⅰからカササギ野池へテント・発掘器材を移動し、調査開始。

7月9日(火)～11日(木)　調査地の地区割り杭打ち。東部・北部ジョレンがけ精査、黄色粘質土層断ち割り精査。北部黄色土層中より石斧他出土。東部・北部全体写真撮影、平板測量。西部より縄文土器、石器、平安土器等出土のため重機による拡張を行う。

7月12日(金)　雨のため現地作業中止。

7月15日(月)　西拡張部ジョレンがけ精査、黒色土下面から平安時代の土器片が出土。大応寺住職他1名見学。

7月16日(火)　雨のため現地作業中止。

7月17日(水)～19日(金)　開発境界杭より基準杭の座標を出す。西部平安土器分布状態の写真撮影、平板測量。西部ジョレンがけ精査。新たに鏃2点等出土。関東農政局1名見学(17日)。

7月22日(月)　雨のため現地作業中止。

7月23日(火)～25日(木)　平安土器分布の平板測量続行。西部ジョレンがけ精査、黄色粘質土層断ち割りによる精査、遺物検出なし。SK1土器群検出、適宜写真撮影、実測等を行う。『かわら版岡山』No.9発行(25日)。

7月26日(金)　西部平板測量、遺物取り上げ。休場拡張部ジョレンが

土坑実測　鳴沢頭Ⅰ

土坑半割調査　鳴沢頭Ⅰ

け精査開始。

7月29日(月)～31日(水)　工事現場の重機によりカササギ野池西部、暗黄灰色土を黄色粘質土層まで除去し引き続き断ち割り調査を行う。休場ジョレンがけ精査、遺構掘り下げ、道路部地層確認のための重機による表土除去、西側黄色土断ち割り精査、平板測量、全体写真撮影を経て現地調査を終了する。鳴沢頭ⅠのB地区、重機による調査地拡張。

8月1日(木)　カササギ野池黄色粘質土面の平板測量終了により現地調査を完了、テント・器材等を移動する。鳴沢頭ⅠのA地区、重機による調査地拡張、B地区ジョレンがけ精査再開。

8月2日(金)～5日(月)　鳴沢頭Ⅱジョレンがけ精査南部より開始。黄色粘質土直上～10cmより縄文早期と思われる土器と石器が検出される。

8月6日(火)　調査地の地区割り杭打ち。南部全体写真撮影。北部ジョレンがけ精査へと移行。

8月8日(木)　午前雨のため現地作業中止。午後より北部ジョレンがけ続行、遺物出土少ない。南部平板測量にとりかかる。関東農政局2名見学。

8月9日(金)　東部一部拡張、頁岩製石匙出土。北部黄色土断ち割りによる地層観察。北部全体写真撮影後、遺物を取り上げ、現地調査を終了する。

8月12日(月)　鳴沢頭Ⅰ、B地区にもどり重機拡張部のジョレンがけ精査をすすめる。盆休みに向けて発掘器材を洗い収納整理する。PM 4:30～コンテナハウスにて中間反省会。

8月13日(火)～18日(日)　盆休み。

8月19日(月)～20日(火)　鳴沢頭Ⅰ、A・B両地区道路部分の断ち割り調査、写真撮影。B地区重機拡張部のジョレンがけ精査、調査地の地区割り杭打ち。『かわら版岡山』No.10発行(20日)。

8月21日(水)　B地区拡張部のジョレンがけ精査続行。A・B地区道路部の平板測量。

調　査　参　加　者

8月22日(木)～26日(月)　B地区ジョレンがけ精査、遺構掘り下げ、東側断ち割り調査等終了により全体写真撮影、遺物取り上げ。並行してA地区重機拡張部ジョレンがけ精査を開始する。近世陶磁、鉄釘出土。

8月27日(火)　G－I－14～17区ジョレンがけ精査続行。おとし穴を含む遺構数基。千曲川対岸のスーパー林道より遺跡遠景写真撮影。

8月28日(水)　I～L－14～17区ジョレンがけ精査、遺構掘り下げ、落とし穴半割調査続行。農政局・吉川建設と現地協議。下境大原遺跡の表土除去は9月2日からとする。鳴沢頭発掘調査地区割り基準杭の座標の測定を吉川建設に依頼する。

8月29日(木)　同上区ジョレンがけ精査及遺構掘り下げ等続行。午後雨のため現地作業中止。

8月30日(金)～9月3日(火)　H～M区遺構掘り下げ、落とし穴の半割調査続行。M～R区ジョレンがけ精査へとすすむ。石斧等数点出土。下境大原遺跡重機による表土除去(2日)。

9月4日(水)～6日(木)　O～T－10～16区遺構掘り下げ、落とし穴半割調査続行。G～N－14～17区完掘全体写真撮影。農用地建設協業組合根岸氏来訪、鳴沢頭東道路の工事が来週より始まるとの連絡を受ける。

9月9日(月)　O～T－10～15区遺構掘り下げ、落とし穴半割調査続行。道路部分の杭抜き。PM3:30～市役所にて調査会。

9月10日(火)　O～T－10～15区・T～W－14～17区遺構掘り下げ完了による全体写真撮影。鳴沢頭Iから下境大原へテント・発掘器材を移動しジョレンがけ精査を開始する。

9月11日(水)　鳴沢頭I平板測量。下境大原調査地の地区割り杭打ち、ジョレンがけ精査、縄文土器、石器出土し始める。

9月12日(木)　ジョレンがけ精査続行。

9月13日(金)　台風による雨のため現地作業中止。

9月17日(火)　鳴沢頭I平板測量終了をもって現地作業を完了する。下境大原ジョレンがけ精査続行、遺構数ヶ所。C－4～6区で縄文草創期と推定される石器群が出土する。関東農政局1名見学。

9月18日(水)　1～8区ジョレンがけ精査、遺構掘り下げへ。午後雨のため現地作業中止。『かわら版

ジョレンがけ精査
休場遺跡
この頃が一番暑かった

岡山』№11発行。

9月19日(木)　台風による雨のため現地作業中止。

9月20日(金)　1～8区遺構掘り下げ続行、大方は落とし穴。ＳＫ2から磨り石と貝殻腹縁文土器出土。長野県埋蔵文化財センター広瀬氏視察。

9月21日(土)～24日(火)　1～9区落とし穴半割、土層図、写真、完掘の手順で掘り下げる。

9月25日(水)　1～9区完掘全景写真撮影。10～13区ジョレンがけ精査、遺構掘り下げへ。

9月26日(木)　午前台風による雨のため現地作業中止。午後12～15区ジョレンがけ精査。

9月27日(金)～30日(月)　12～15区遺構掘り下げ。1～10区平板測量。4～7区内旧石器の有無確認のため黄色粘質土層の断ち割り開始。PM4:00～温井地区公民館にて調査終了式を行う(27日)。

10月1日(火)　雨のため現地作業中止。

10月2日(水)　雨の中遺構掘り下げ、断ち割り調査、平板測量、全景写真撮影等の作業に併行して発掘器材の撤収を行いすべての現地作業を終了する。『かわら版岡山』№12発行。

地元向け発掘だより「かわら版岡山」

第2章　遺跡群の位置と環境

1　遺跡の地理的位置と自然環境

この項は「報文Ⅰ」に詳説しているので、ここではそれに従って簡単に記すこととする。

遺跡は長野県飯山市大字一山に所在する。飯山市北部にあって新潟県との境を画する関田山脈は、標高約1000m程の低山脈である。この山脈の東側には比較的緩やかな斜面が発達し、その麓に広大な段丘面を形成している。この段丘面は「岡山上段」と通称される。岡山上段は標高約500m、東端は比高約200mの急崖をもって千曲川に接している。かつてこの段丘面は一連の地形面であったが、東流して千曲川に注ぐ河川によって浸食され、急峻な谷でいくつかに分断されている。

遺跡群はこの一番南の段丘面にあって、ここは温井台地と通称されている。温井台地は以北の他の段丘面とちがって、小丘や小谷が複雑に入りくんだ起伏のはげしい地形を呈している。これらの小谷にはたいがい湧水があって、遺跡はこの湧水のそばに点々と散在している。

温井台地は交通の要衝である。千曲川に沿って新潟県十日町方面へ通ずる道は市川谷道と呼ばれており、当地方の幹線道路である。市川谷道は、県道谷街道（現国道117号線）の開通（明治24年）以前は、戸狩から温井を通って桑名川へぬけていた。またこの市川谷道から分かれて関田峠（1111m）を越え新潟県板倉へ通じる道がある。この道は上杉謙信が信濃への軍用路として開いたものといわれ、信越を結ぶ重要な道路である。

当地の気候は日本海型で、全国一の多雪地帯として有名である。温井の積雪は少ない年でも2m以上になり、多い年は5～6mに達する。この雪は先に述べた豊富な湧水の重要な資源である。

夏は飯山盆地に比べると2～3℃程気温が低く、すごしやすい。しかし水稲にはさしつかえがない。

関田山脈第2の高峰鍋倉山（1288m）は、全国でも数少ないブナの原生林地である。中には胸高幹囲584cmの「森太郎」や「コブブナ」などと愛称されている巨木がある。春の芽吹き時季は新緑が素晴らしい。

参考引用文献

『国営飯山農地開発関係遺跡発掘調査報告』Ⅰ 飯山市教育委員会　1991
『飯山市誌』自然環境編　1991

2　遺跡群の歴史的環境

この項も「報文Ⅰ」に詳しい。

温井台地には湧水に近接して点々と遺跡が分布し「一山遺跡群」を形成している。これらの遺跡の多くは地元温井の北条幸作氏が発見されたものである。

遺跡群の遺跡の主体的な年代は旧石器・縄文・平安・中世であり、この時代以外の遺跡は少ない。

温井の台地は旧石器時代遺跡の宝庫である。昨年の発掘調査で、新堤遺跡で2か所、トトノ池南遺跡で5か所の石器群が検出されている。いずれもナイフ形石器を主体とする。両遺跡ともに当初予想しなかった所からの出土である。温井台地を初め岡山上段地域には相当数の旧石器時代遺跡があったにちがいない。オリハンザからは尖頭器・細石器が採集されている。

縄文時代草創期の遺跡が今回の調査で検出された。カササギ野池遺跡では有舌尖頭器と爪形文土器が出土した。爪形文土器については草創期に遡らせて良いものか疑問視する意見もある。鳴沢頭Ⅱ遺跡では新潟県室谷洞穴出土土器に類似した回転縄文土器が出土している。下境大原遺跡では表裏縄文土器が出土

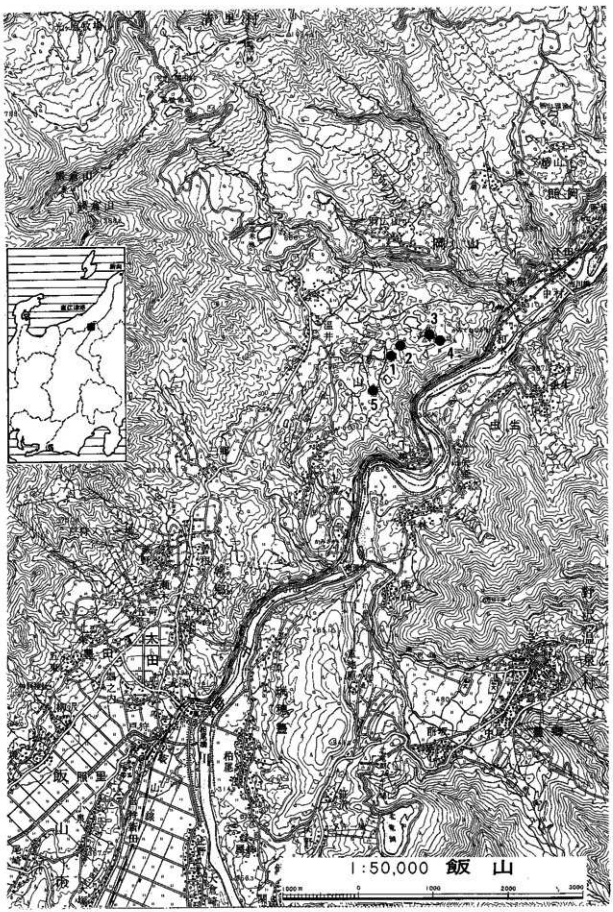


図2　遺跡の位置　　1:50000

1 鳴沢頭Ⅰ　2 鳴沢頭Ⅱ　3 カササギ野池　4 休場　5 下境大原

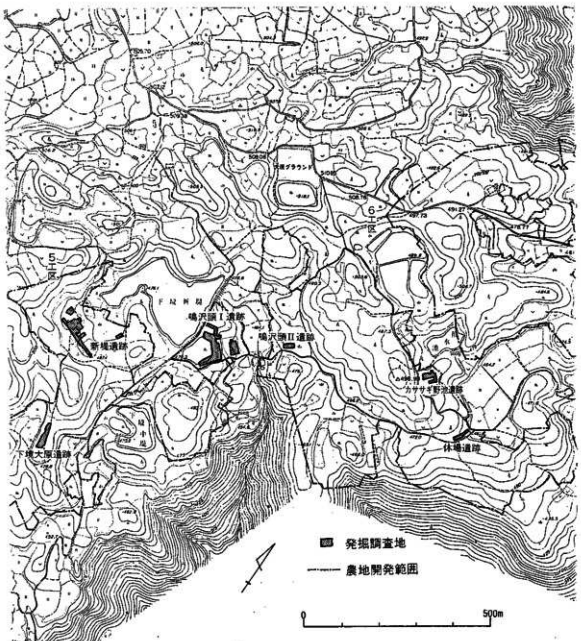


図3　発掘調査地周辺の地形　1:10000　　新堤遺跡は1990年発掘，他は1991年発掘

している。これらはいずれも出土数が少ない。しかし、岡山上段は飯山で最も早く縄文文化を受け入れたことを示す重要な資料である。

縄文時代早期の遺跡も昨年と今年の調査で数を増した。トトノ池南遺跡では押型文土器が当地では珍らしくまとまって出土している。撚糸文土器も少量ある。新堤遺跡では押型文土器が数点と貝殻腹縁文土器が出土している。今回の調査でも鳴沢頭Ⅰ、鳴沢頭Ⅱ、下境大原で押型文、貝殻腹縁文土器・条痕文土器などが出土している。これらはいずれも出土量は少ない。

縄文時代前期は鳴沢頭・向原(むこうはら)・新堤・トトノ池南などがある。これら前期の遺跡も遺物量が少なく大規模なものではない。

縄文時代中期の遺跡として対岸の下高井郡野沢温泉村平林(しもたかいぐんのざわおんせんむらひらばやし)A遺跡がある。中期後半の土器・土偶・石皿など豊富な遺物が出土している。作業員渡辺節子氏が同家の畑で採集した土器（図5右）は中期中葉のも

図4 周 辺 の 遺 跡

1 田茂木平(縄・弥) 2 温井城 3 オリハンザ(旧・縄) 4 水の沢(旧・縄) 5 長者清水(平・中)
6 藤屋の堤(縄) 7 雨池(縄) **8 カササギ野池(縄・平)** **9 休 場(縄)** 10 カツボ池上(平) **11 鳴沢頭(縄・平)**
12 新境(旧・縄・平) **13 下境大原(縄)** 14 カツボ池(縄・平) 15 下境(平) 16 中塚谷地(旧・平)
17 上境(旧) 18 温井(仮称、旧) 19 トトノ池(先・平) 20 トトノ池南(旧・縄・平) 21 西外峰(旧・縄)
22 中外(旧・縄) 23 上境城 24 雨池グランド(旧) 25 平林A(縄) 26 平林B(平) 27 虫生(旧)
28 渡辺氏遺物採集地(縄)

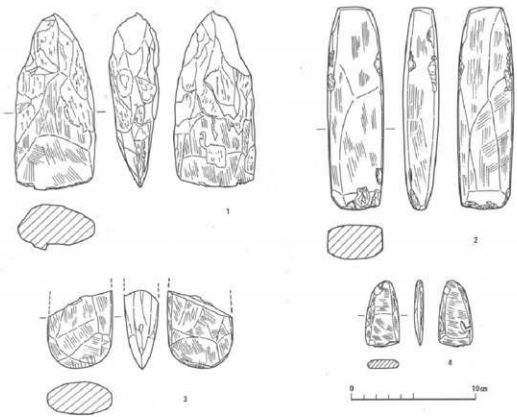


図5　ヤスミバ出土遺物
桑名川渡辺節子氏採集品

ので、新潟県に類例がある。磨製石斧はいずれも優品で、小型の4はヒスイ製品かもしれない。この採集地点は藤屋の堤から温井桑名川線を少し下った所の平坦地で、古くから「ヤスミバ」と呼ばれている。

縄文時代後期の遺跡として新堤・鳴沢頭がある。いずれも少量の土器が検出されている。

弥生時代・古墳時代の遺跡は今のところ岡山上段では確認されていない。

平安時代の遺跡として長者清水・トトノ池南がある。土師器・黒色土器・灰釉陶器の椀皿類、土師器甕、須恵器大甕・四耳壺など出土している。墨書土器・転用硯もある。平野部の遺跡の出土品と変化はない。平安時代の農村開発が山間地まで及んだことを示している。

中世以降、当地は交通の要衝になる。長者清水遺跡は濠を「コ」の字形にめぐらす中世の館跡で、谷街道に接している。珠洲焼などが出土している。温井城は関田峠へ通ずる道の南の尾根線上にあり、道から堀切りなどがよく見える。上境城は上境渡船場を眼下に見おろす丘頂にある。

参考引用文献

『岡山村誌』飯山市公民館岡山支館　1961
北条幸作『考古学上から見たわが郷土』岡山公民館　1954
『国営飯山農地開発関係遺跡発掘調査報告』Ⅰ 飯山市教育委員会　1991

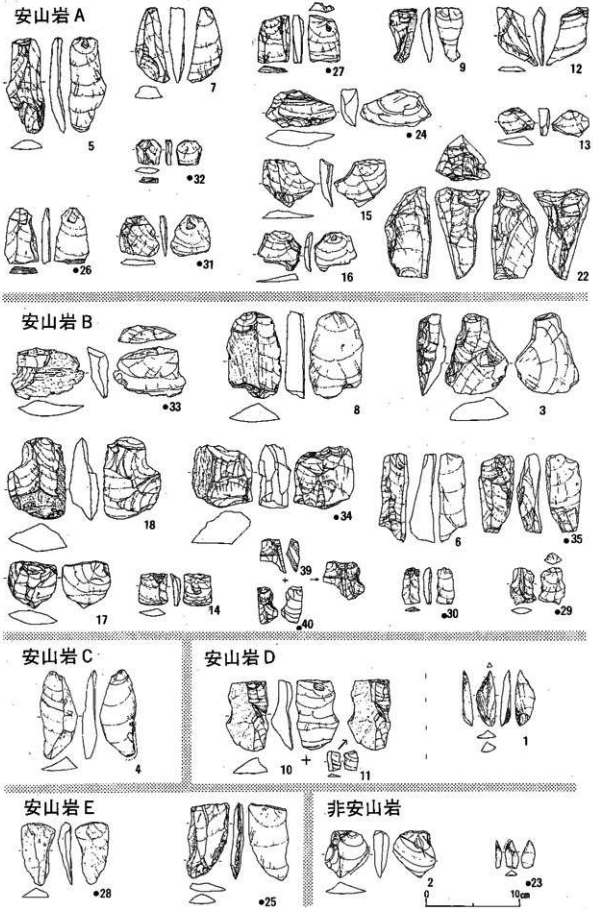


図6　新堤遺跡出土旧石器　1：4

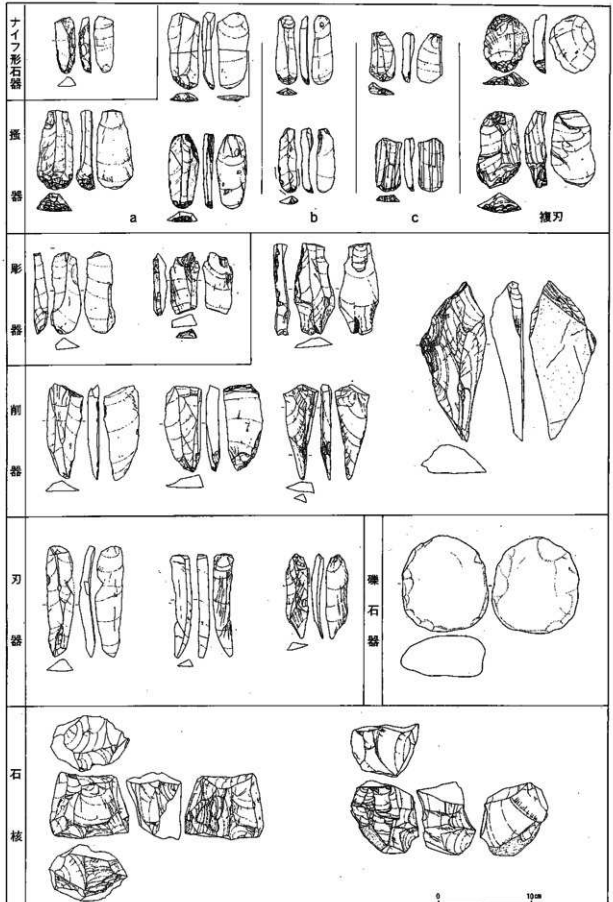


図7　トトノ池南遺跡出土旧石器　1：4

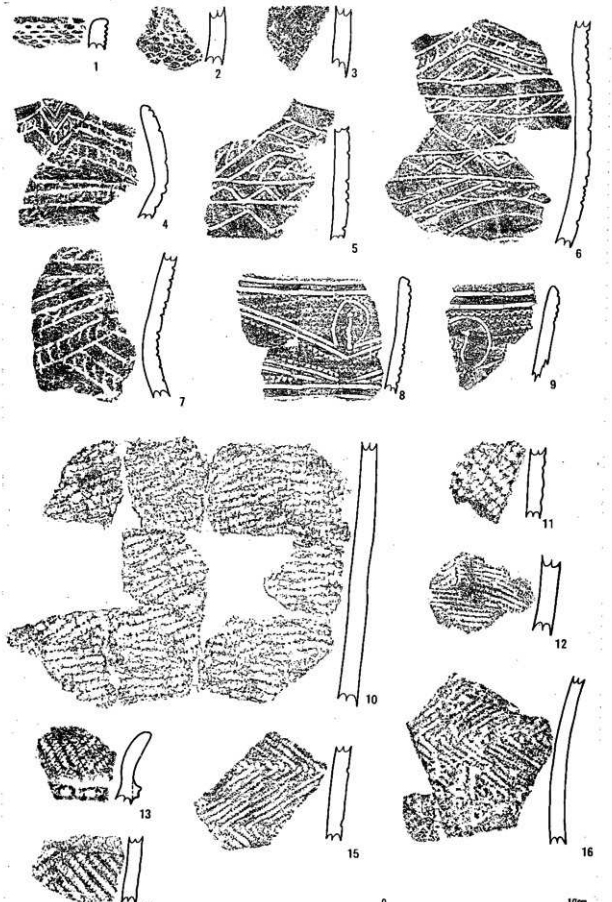


図8　新堤遺跡出土縄文土器1　1：2

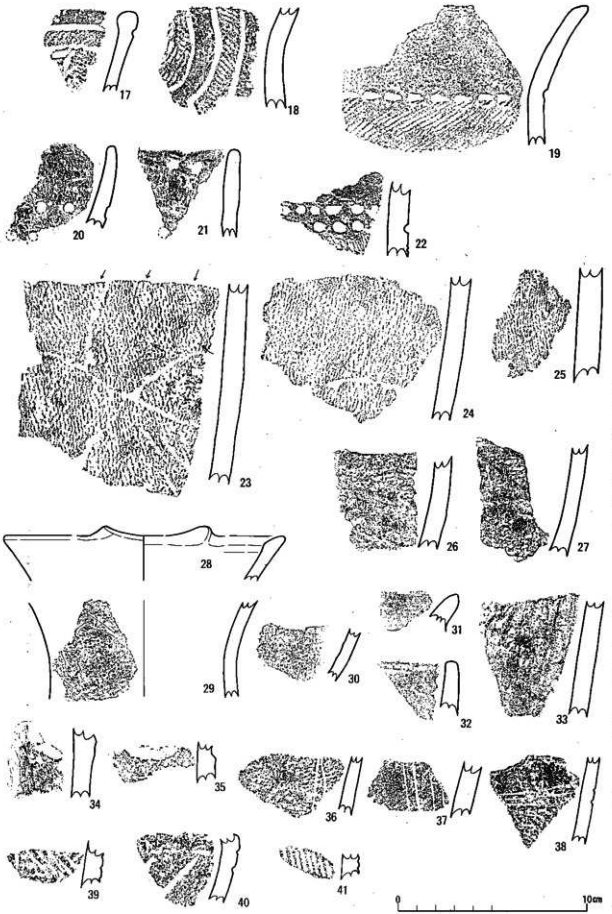


図9　新堀遺跡出土縄文土器2　1：2

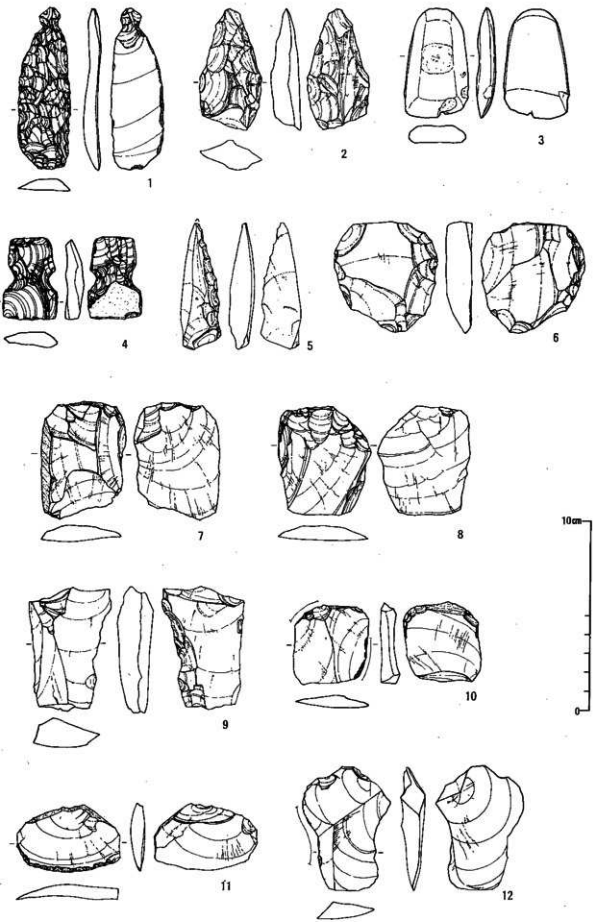


図10　新堤遺跡出土縄文時代の石器　1：2

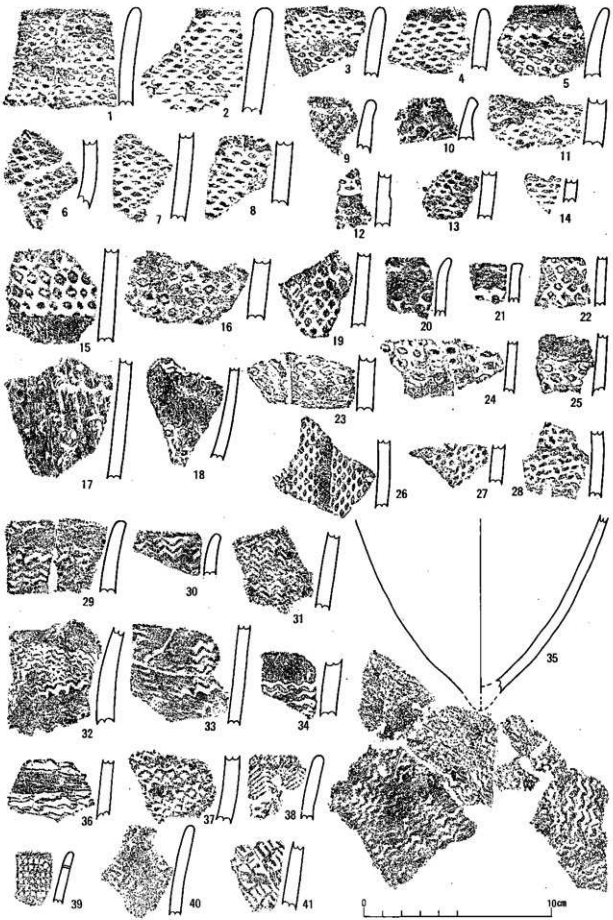


図11　トトノ池南遺跡出土縄文土器1　1：2

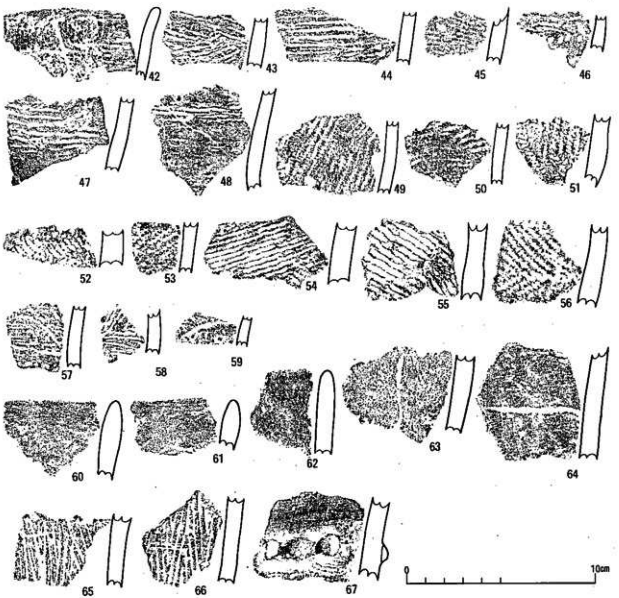


図12　トトノ池南遺跡出土縄文土器２　１：２

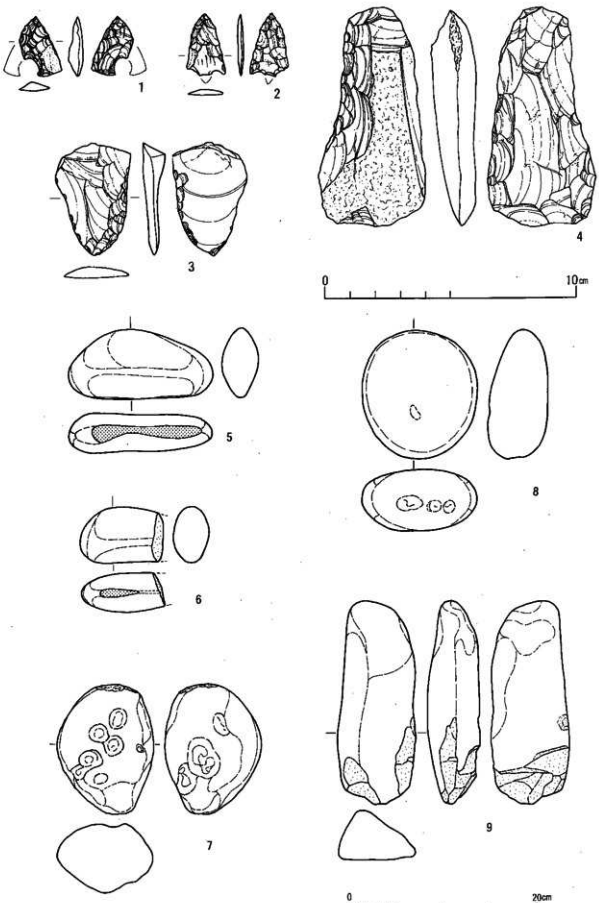


図13　トトノ池南遺跡出土縄文時代の石器　1~4　1:1.5　5~9　1:4（アミ目は磨部）

第２編　鳴沢頭Ⅰ遺跡

第1章　遺跡の概要

1　遺跡の概要

鳴沢頭(ひるさわかしら)遺跡は下境地籍と桑名川地籍を分ける鳴沢の沢奥にあって、沢の両岸に広がる遺跡とされている。

この遺跡はかつて桑名川の医師渡辺喜平次氏が当地を歩かれて採集した資料を、藤森栄一氏が「信濃下水内郡鳴沢頭の土器及び石鏃」と題して『史前学雑誌』に紹介している。その後温井の北条幸作氏も多くの資料を採集している。採集品は、縄文時代早期押型文土器、前期後半の南大原式・下島式土器、中期勝坂式、後期加曽利E式・掘ノ内式、石鏃・石匙・磨製石斧、土師器・須恵器などがあり、温井台地を代表する遺跡と考えられていた。

遺跡の中心は北条氏の『考古学上から見たわが郷土』23ページの図によれば、鳴沢の南岸（下境側）で、新堤と中堤の間の畑地とされている。

今回の調査地は鳴沢の両岸２地点である。前述したように鳴沢頭遺跡は両岸にかけて広がるので当初同じ遺跡として扱おうと考えた。しかし、発掘の結果、両岸の遺跡の様相が異なっているので、別遺跡とし、西南岸（下境側）を鳴沢頭Ⅰ、東北岸を鳴沢頭Ⅱ遺跡とした。

2　調査方法

(1)　調査地点

鳴沢頭Ⅰ遺跡の調査対象地は、下境新堤の東の山林および畑地である。南東に小丘があって、小丘から北東に緩やかに傾斜する。斜面は途中で段をもち、上下２か所のテラス面をなす。調査地点は小丘の囲りの第１のテラス面と、その下のテラス面に分かれ、上段の調査地をＡ地区、下段の調査地をＢ地区とした。

Ａ地区は遺構・遺物ともに散在的である。遺構は動物の落とし穴と考えられている方形土坑が19基、斜めピット17基などがある。遺物は縄文時代早期から前期の土器・石器が少量ある。

Ｂ地区は動物の落とし穴と考えられている方形土坑が３基、焼土３か所、縄文時代早・前期の土器がある。前期の土器は比較的まとまって出土しているが、住居跡等からの出土とするには根拠がとぼしい。

(2)　調査区の設定

調査区内の地区割りについては、５ｍのグリット法とし、表土除去後に、調査区に合わせて任意に基準線を設定し、それを基準に５ｍ方眼を組み、南西から１・２・３……、北東からＡ・Ｂ・Ｃ……と呼称した。設定の後、基準となる杭を決め、５工区農地開発工事用メッシュの座標を測定していただいた(注1)。その数値は以下のとおりである。

基準１　13，14区間ラインとＣＤ区間ラインとの交点

11＋7.750　　－51＋14.215

基準２　24，25区間ラインとＣＤ区間ラインとの交点

10＋8.505　　－54＋5.557

基準３　15，16区間ラインとＯＰ区間ラインとの交点

14＋0.364　　－53＋4.590

レベルは工事用ベンチマーク交点１（Ｌ＝478.835ｍ）を基準とした。

注１　座標の測定は鯛吉川建設平田氏に行っていただいた。

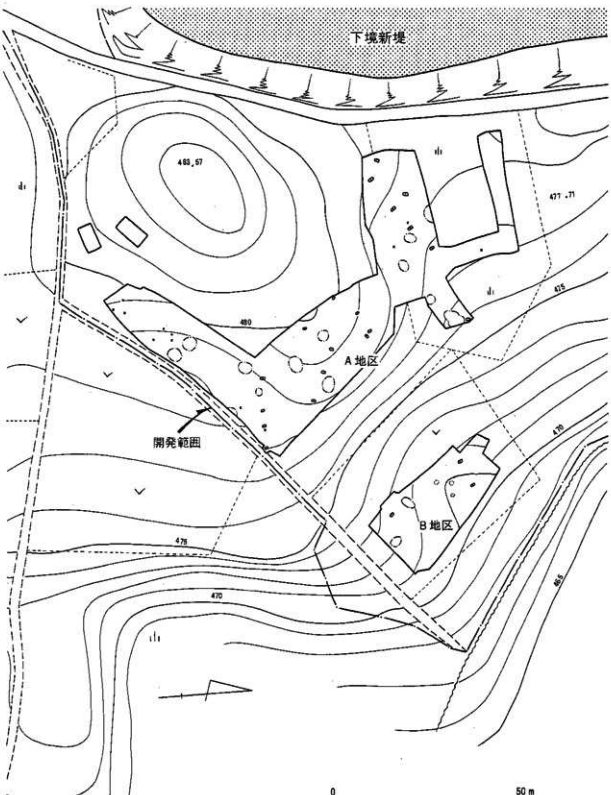


図1　調査地周辺地形　1:1000

(3) 調査方法

調査方法は、樹木の伐採の後、まず重機によって表土（耕作土）を除去した。表土除去にあたっては地下の遺構をいためないように大木の株は残すようにした。また、あらかじめいくつかの地点で重機による試掘を行い、遺構の遺存する可能性が高い所を重点的に拡張して調査することとした。所によっては表土だけでなく黒色土も土器出土面まで重機で除去した。表土除去の後、ジョレン・移植ゴテ等で慎重に遺構・遺物の検出を行い、黄色粘質土面まで掘り下げた。そして部分的に黄色粘質土に幅1.0m深さ0.3～0.5mの試掘坑を掘り旧石器の有無を確かめた。

遺物のとり上げは、原則として1点づつ、グリット毎あるいは遺構毎に番号をつけて、地点と高さを測ってとり上げた。写真撮影は白黒とカラースライドを35㎜フィルムで適宜撮影した。遺跡遠景は、天候の良い日をねらって対岸奥志賀スーパー林道から何度か撮影した。

遺構全体図は60分の1ないし40分の1平板図を作成、個々の遺構については20分の1実測図を適宜作成した。

3 層 序（図4）

調査区内の層序は基本的に上層から灰褐色土（表土・耕作土）・黒色土・漸移層・黄色粘質土（地山）である。ただし稜線部は表土直下が黄色粘質土である。表土から黄色粘質土までの厚さは、谷状部で約1.2m、稜線部で0.2～0.3mである。谷状部では黒色土が約0.5mの厚さであり、中間にやや赤味をおびた厚さ約0.1～0.2mの黒色土があり、この土はロームマウンドにもレンズ状に堆積している。また黒色土層中にはかたく締まった層が部分的に認められ、ある時期の生活面であったことがわかる。黄色粘質土(地山)は、上の0.2m程がソフトで、その下0.2m程がややかたく締まっており、その下は所々礫状となる黄褐色土である。

B地点での縄文時代前期の土器は、黒色土の下層から漸移層にかけての層位で出土している。

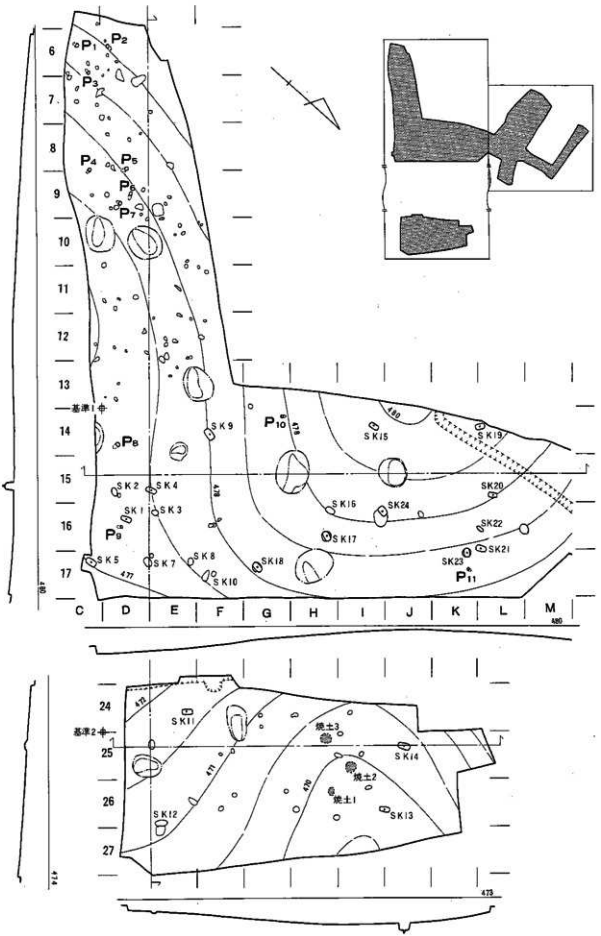


図2　調査全体図1　1:400

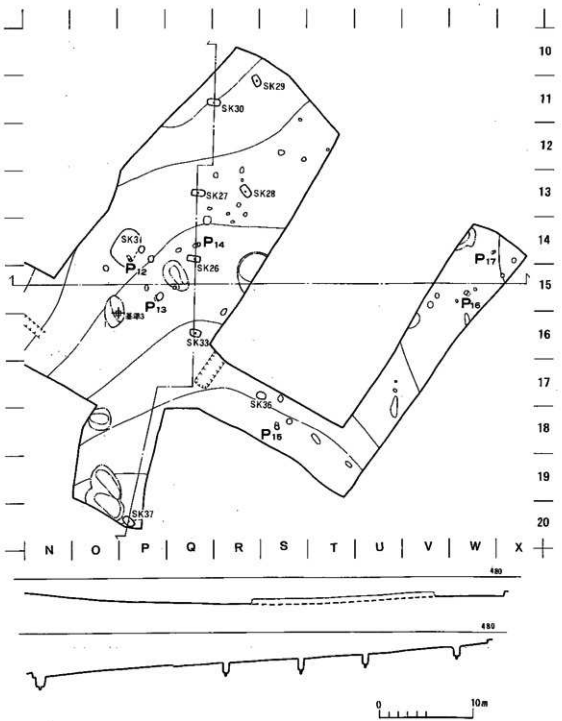


図3　調査地全体図2　1:400

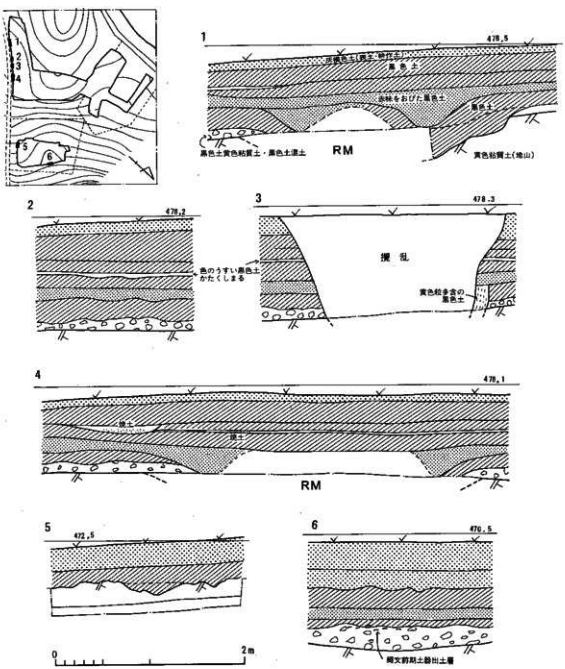

1
2
3
4
5
6
478.5
黒色土
赤味を帯びた黒色土
黒色土
黒色土黄色粘質土・黒色土混土
RM
黄色粘質土(地山)
2
478.2
色のうすい黒色土
かたくしまる
3
478.3
撹乱
黄色粘土含の
黒色土
4
478.1
RM
5
472.5
0
2m
6
476.5
縄文前期土器出土層

図4 土 層 図 1:40

第2章　遺　構

1　土　坑（図5～図9）

(1) 各　説

動物のおとし穴と考えられている方形土坑(注1)が22基、A・B両地点から検出されているほかに、数基の人為的に掘り込まれたと考えられる土坑がある。

SK1　D16区にある。長径1.1m、短径0.5mの隅丸長方形プランで、深さ1.1m。上端の壁はやや摺り鉢状である。坑底中央に1か所小穴がある。この小穴については各地(注2)で逆さ杭やその痕跡が確認されているが、当遺跡では充分な断ち割り調査を行っていないこともあって、検出されていない。埋土は自然堆積の様相を呈している。出土遺物はない。

SK4　E15区にある。長径1.1m、短径0.5mの隅丸長方形プランで、深さ1.2m。壁は直線的に落ち込んでいる。坑底中央に1か所小穴がある。埋土は下層が水平堆積、上層がレンズ状に堆積し自然堆積の様相である。出土遺物はない。

SK5　C17区にある。長径1.25m、短径0.6mの隅丸長方プランで、深さ1.1m。壁は2段に落ち込んでおり、断面形は中ぶくれしている。坑底中央に1か所小穴がある。出土遺物はない。

SK9　F14区にある。長径1.3m、短径0.8mの隅丸長方形プランで当遺跡ではやや大形の部類である。深さ1.3m。坑底中央に1か所小穴があり深さ0.45mと当遺跡では深い方である。断面形はやや中ぶくれである。埋土はレンズ状に堆積しており、自然堆積の様相である。出土遺物はない。

SK11　B地区E24区にある。上端は長径1.2m、短径0.7mの楕円形プランであるが、中段は長径0.9m、短径0.4mの隅丸長方形プランである。深さ1.3m。坑底に1か所小穴がある。埋土は一旦中程まで黒色土が堆積した後に両側が崩落して黒色土と黄色粘質土混土が端にたまり、さらに中央に黒色土が堆積したようである。出土遺物はない。

SK13　B地区J26区にある。長径1.1m、短径0.5mの隅丸長方形プランで、深さ1.0m。坑底中央に1か所小穴がある。出土遺物はない。

SK14　B地区J25区にある。長径1.2m、短径0.6mの隅丸長方形プランで、深さ1.1m。坑底に1か所小穴があるが、他の土坑例に比べてやや大きい。出土遺物はない。

SK15　I14区にある。北側が2段に掘り込まれている。長径1.1m、短径0.5mの隅丸長方形プランで、深さ1.0m。坑底に1か所小穴があるが、他に比べて浅い。埋土は自然堆積の様相を呈している。出土遺物はない。

SK17　H16区にある。漏斗状に2段に掘り込まれている。上段は長径1.2m、短径0.9mの楕円形プランで、下段は長径0.9m、短径0.5mの隅丸長方形プランである。深さ1.1m。下段北壁には地山の石が突き出ている。坑底に1か所小穴があるが、他と比べて浅い。埋土は自然堆積の様相を呈している。出土遺物はない。

SK18　G17区にある。漏斗状に2段に掘り込まれている。上段は長径1.1m、短径0.9～1.0mのやや変形した隅丸長方形プランで、下段は長径0.9m、短径0.5mの隅丸長方形プランである。深さ1.0m。下段南壁には地山の石が突き出ている。坑底中央に1か所小穴があるが、他と比べて浅い。埋土は下層が水平に近く堆積し、上層は中央が深く凹む。自然堆積の様相を呈している。出土遺物はない。

SK19　L14区にある。漏斗状に2段に掘り込まれている。上段は長径1.1m、短径0.8mの楕円形プラ

ンで、下段は長径0.9m、短径0.4mの長方形プランである。深さ 0.8m。坑底中央に1か所小穴があるが、ごく浅くわずかにへこんでいる程度である。埋土は下層が水平、上層がレンズ状に堆積し自然堆積の様相を呈している。出土遺物はない。

SK20 L15区にある。長径1.05m、短径0.5mの隅丸長方形プランで、深さ1.1m。坑底中央に1か所小穴がある。出土遺物はない。

SK21 L17区にある。長径1.2m、短径0.6mの楕円形プランで、深さ1.25m。坑底はやや中央が狭い鼓形をしている。坑底中央に1か所小穴があるが、他と比べて浅い。埋土は自然堆積の様相を呈している。出土遺物はない。

SK23 K17区にありSK21と近接している。漏斗状に2段に掘り込まれている。上段は直径 1.1mの略円形プランで、下段は長径0.8m、短径0.6mの隅丸長方形プランである。坑底中央に1か所小穴があるが、他と比べて浅い。埋土は自然堆積の様相を呈している。出土遺物はない。

SK24 I16区にある。浅く広い大形土坑と重複しているような形状であり、上面輪郭検出時にはロームマウンドと判断した。土層観察から下段埋没後に上段が埋没したことが判るが、異なる土坑かどうか判断できない。注意されるのは上段最上層に赤味をおびた黒色土が堆積していることだ。この土は黒色土の中間層で、縄文時代前期の土器出土層より約10cm上の層である。これらの土坑の構築年代を知る一つの手がかりとなる。土坑は上段は直径約1.7mの不整円形プランで、下段は長径0.9m、短径0.6mの普通の隅丸方形プランである。下段は西から東へ斜めに掘り込まれている。深さは 1.0m。坑底中央に1か所小穴があるが、他と比べて浅い。出土遺物はない。

SK26 Q14区にある。漏斗状に2段に掘り込まれている。上段は長径1.1m、短径0.8mの楕円形プランで、下段は長径0.9m、短径0.4mの長方形プランで、几帳面に四角く掘り込まれている。深さ1.25m。下段東壁に横穴がある。坑底中央に1か所小穴があるが、他と比べて深い。本土坑で注意されるのは下段中位層から植物遺体らしき繊維質の炭化物が、約3cm厚の層をなして出土したことだ。出土状態を感覚でいえば、ワラやヨシなどが水平に折り重なったような状態であった。その他の埋土の堆積状態は、他の土坑同様自然堆積の様相を呈している。

SK27 Q13区にあり、SK26とよく似ている。上段は長径1.05m、短径 0.6mの隅丸長方形プランで、下段は長径0.9m、短径0.4mの長方形プランで、几帳面に四角く掘り込まれている。深さ 1.2m。坑底中央に1か所小穴があるが他と比べて深い。埋土は自然堆積の様相を呈しており、最上層に赤味をおびた黒色土がある。出土遺物はない。

SK28 R13区にある。漏斗状に2段に掘り込まれている。上段は長径1.2m、短径0.8mの隅丸長方形プランで、下段は長径1.0m、短径0.6mの隅丸長方形プランである。深さ 1.0m。坑底はやや鼓形に近い。坑底中央に1か所小穴があるが、細く深い。埋土は自然堆積の様相を呈している。出土遺物はない。

SK29 R11区にある。東辺だけが2段になっている。長径1.0m、短径0.7mの隅丸長方形プランで、深さ 0.8m。坑底に1か所小穴があるが、細く深い。埋土は自然堆積の様相を呈し、最上層に赤味をおびた黒色土がある。出土遺物はない。

SK30 Q11区にある。やや漏斗状に掘り込まれている。上段は長径1.3m、短径0.7mの長楕円形プランで、下段は長径1.1m、短径0.5mの隅丸長方形プランである。深さ 1.0m。坑底中央に1か所小穴があるが、細く深い。埋土は自然堆積の様相を呈している。出土遺物はない。

SK33 Q16区にあり、SK26・27とよく似ている。上段は長径1.25m、短径 1.1mの楕円形プランで、下段は長径0.95m、短径 0.4mの長方形プランで、几帳面に四角く掘り込まれている。深さ 1.2m。坑底中央に1か所小穴があるが他と比べて深い。埋土は自然堆積の様相を呈している。出土遺物はない。

ＳＫ37　Ｐ20区にある。漏斗状に掘り込まれており、上段は長径1.4ｍ、短径0.8ｍの長楕円形プランで、下段は長径1.0ｍ、短径0.5ｍの隅丸長方形プランで、深さ1.15ｍ。坑底に小穴はない。出土遺物はない。

ＳＫ２　Ｄ15区にある浅い楕円形プランの土坑で、人為的なものかも疑問がある。長径1.0ｍ、短径0.65ｍ、深さ0.2ｍ。出土遺物はない。

ＳＫ３　Ｅ16区にある。0.8ｍ×0.6ｍの楕円形プランで、坑底は一部分が深い。深さ0.9ｍ。出土遺物はない。

ＳＫ７　Ｄ17区にある。２段に落ち込んでいる1.1ｍ×0.7ｍの隅丸長方形プランの土坑で深さ0.3ｍ。出土遺物はない。

ＳＫ８　Ｅ17区にある。浅い隅丸長方形の土坑で、長径0.8ｍ、短径0.6ｍ、深さ0.1ｍ。赤味が強い黒色土が入っていた。出土遺物はない。

ＳＫ10　Ｆ17区にある２段の土坑で、長径1.1ｍ、短径0.7ｍ、深さ0.3ｍ。出土遺物はない。

ＳＫ16　Ｈ16区にある。長径1.1ｍ、短径0.65ｍの隅丸長方形プランで、深さ0.4ｍ。下面に地山の石が突き出ている。わりとしっかり掘り込まれた土坑である。埋土は黒色土。出土遺物はない。

ＳＫ22　Ｌ16区にある。ＳＫ16によく似ている。長径0.85ｍ、短径0.4ｍの隅丸長方形プランで、深さ0.4ｍ。出土遺物はない。

ＳＫ32　Ｒ16区にある。黒色土の中に赤味をおびた黒色土が目玉焼き状にあるもので人為的なものかどうか疑わしい。出土遺物はない。

ＳＫ36　Ｓ17区にある。1.0ｍ×0.8ｍの楕円形プランの土坑で、レンズ状に落ち込んでいる。深さ0.3ｍ。出土遺物はない。

(2)　小　結

動物のおとし穴と考えられている長方形土坑は、当遺跡で22基検出されているが、いくつかの特長を指摘することができる。

ひとつは、当遺跡例は基本的に隅丸長方形プランで、規模も長径で1.0ｍ～1.3ｍ、短径で0.4～0.8ｍ、深さで0.9～1.3ｍの中におさまり、坑底の小穴も21基が中央に１か所であるというように均一性があることである。

二つには、一つ目と矛盾するようだが、大枠の中では均一性をもつが、より細かく見ると形態に特色があり、同じ特色をもつものが並列していることである。例をあげれば、ＳＫ５・１・４・９は並列するが、いずれも当遺跡例の中ではプランが楕円形に近く、規模もやや大きい部類である。ＳＫ17・18・24も並列し、いずれも漏斗状に掘り込まれ、長径が短く短径が長いし、坑底の小穴が浅い。ＳＫ26・27・33も並列し、いずれも几帳面に四角く掘られており、深い部類で、規模がほぼ等しい。同じように並列するＳＫ13・14、ＳＫ19・20・21もそれぞれ形態・規模がよく似ている。

以上指摘した特長のうち１つ目の、遺跡内での均一性は、同系の集団が比較的短時間のうちに構築したことを示していようか。２つ目の、並列するものが同じ特色をもつことは、並列するものは同一集団によって同時に構築された可能性を示していよう。

三つ目は、ＳＫ24・27・29で、最上層に赤味をおびた黒色土が認められたことである。この土は述べたように黒色土層の中間にあり、縄文時代前期土器出土層の少し上にあたる。また、地点は異なるが、昨年調査した新堀遺跡のテフラ分析で、早津・小島両氏は、「最上位の黒色腐植土中にはさまれる赤褐色味をおびた部分の土壌層は、斜方輝石・角閃石・カンラン石などの鉱物とデイサイト質の岩片を含むことから、妙高火山中央火口丘期の火山灰（大田切川火山灰？、ＯＴ－ａ、約4000―4500年前、早津・小島、1985）[注3]が混入している可能性がある。これらは今後の検討を待ちたい。」と指摘されている。

もし大田切川火山灰であれば、当遺跡の土坑はそれ以前に埋没したということになる。出土遺物がなく年代特定のむずかしいこの種の土坑の年代を知る一つの手がかりとなろう。

注1 この種の土坑の性格については、動物のおとし穴とする説（今村啓爾「霧ヶ丘遺跡の土坑群に関する考察」『霧ヶ丘』1973、同「縄文時代の陥穴と民族誌上，事例の比較」『物質文化』27 1976など）が一般的だが、おとし穴説に疑問を呈する意見もある（石岡憲雄「所謂「Tピット」について」『土曜考古』2 1980、同「「Tピット」について（再論）」『埼玉考古学論集』㈱埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991）。ここではおとし穴とする意見に従っておく。

注2 長野県茅野市上見遺跡（『上見遺跡』茅野市教育委員会 1991）、東京都多摩ニュータウンNo.740遺跡（『多摩ニュータウン遺跡―昭和54年度―第5分冊』㈱東京都埋蔵文化財センター 1983.3 など。

注3 早津賢二・小島正巳「飯山市新堤遺跡のテフラ分析」『国営飯山農地関係遺跡発掘調査報告Ⅰ』飯山市教育委員会 1991。

2 斜めピット（図9）

斜めに掘り込まれたピットが17基検出されている。分布状態をみると群在していることがわかる。P1～3はD6・7区にあり、P4～7はD8・9区にある。P8・9はD14～16区、P12～14はP・Q14・15区、P16・17はW・X14・15区にある。P11は単独であるが調査地端なので、調査地外につれ合いがあるかもしれない。

規模は直径は0.2～0.7mで、0.3～0.4mが平均的なものである。深さはP8が1.8mと深く、他は0.3～0.9mである。地表面からの掘り込みの角度は垂直に近いもので70°、水平に近いもので40°、平均して50°～60°である。開口方向は不規則で、群の中でも規則性はない。

類例は新堤遺跡、トトノ池南遺跡にある。新堤遺跡例は帯状にあり、トトノ池南遺跡例は群在する。開口方向、深さ、掘り込みの角度に規則性がないことは共通する。

このピットの性格については今のところよくわからない。中には木根跡を人為的なピットと誤認して掘ったものも含まれているかもしれない。しかし埋土や形態から木根跡とはとうてい考えられないものが多くを占めていることも事実である。今後の検討課題である。

3 焼 土

B地点から近接して3か所焼土が検出されている。ここは縄文時代前期の土器・石器が分布していた所である。

焼土1 0.8m×0.6mの範囲に焼土が分布している。焼土の層位は黄色粘質土の直上で、黄色粘質土をレンズ状にやや掘りくぼめた様な所に黒色土が入ったその上に焼土が拳大程の塊りで混在していた。

焼土2 1.0×1.2mの範囲に焼土が分布している。焼土の層位は黄色粘質土の約10cm上で黒色土中である。焼土は指頭大から拳大で、焼土1より分布密度はうすい。

焼土3 1.0×1.0mの範囲に焼土が分布している。畑作時の塩ビパイプで中央が壊されている。ここだけは深さ約20cm程掘りくぼめられた中に、最も密度が高く焼土があった。また坑底や壁も焼けた痕跡がある。近接して石匙が出土している。

小結 これらの焼土は検出層位が縄文前期土器出土層位と等しく、両者は密接な関係があろう。住居跡内の焼土とも考えたが、他に住居跡の痕跡はなくその可能性は少ないと思われる。

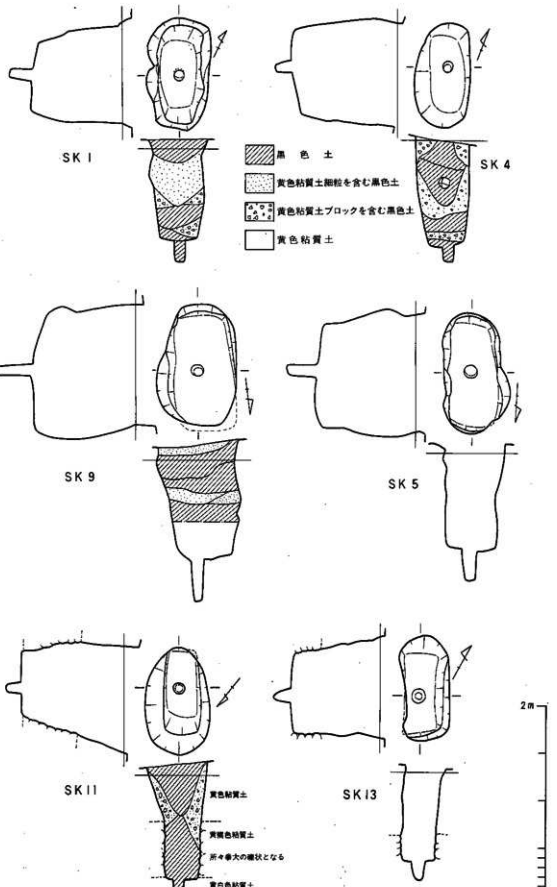


図5　土坑実測図1　1:40

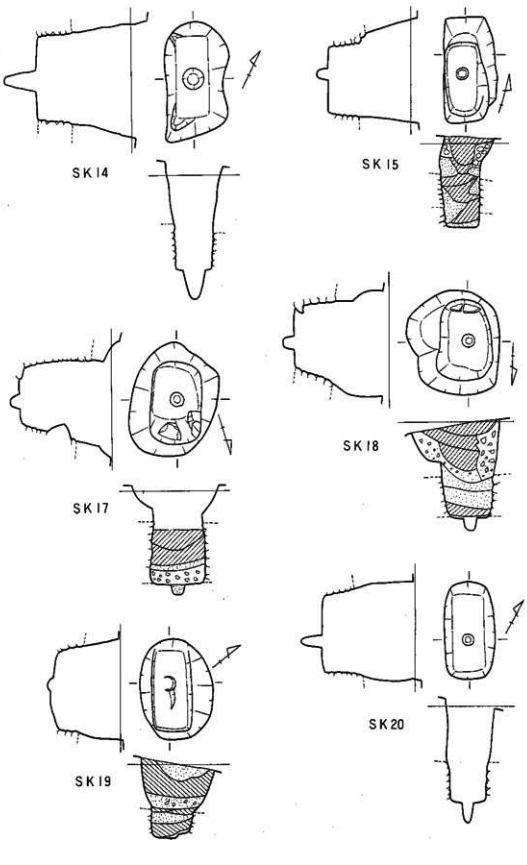


図6　土坑実測図2　1:40

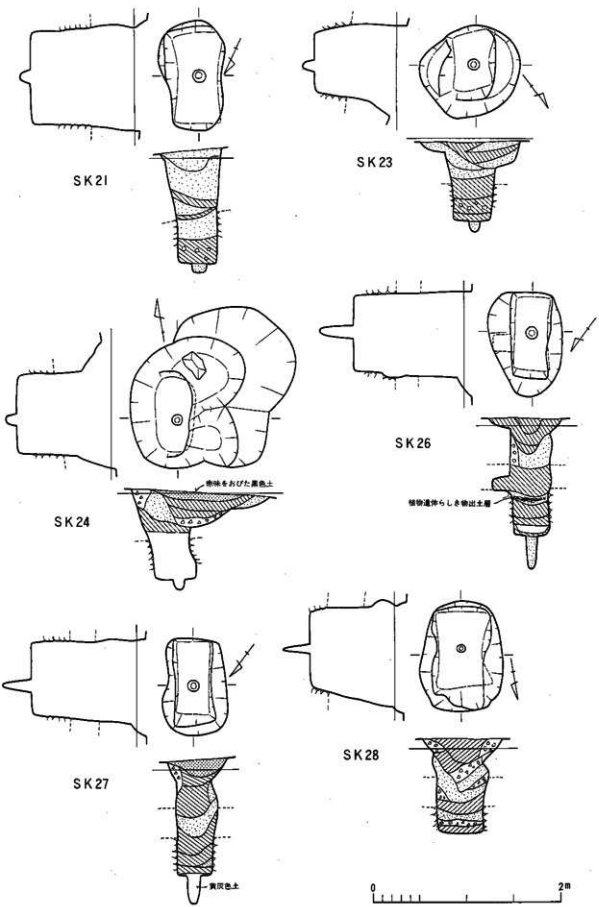


図7　土坑実測図3　1:40

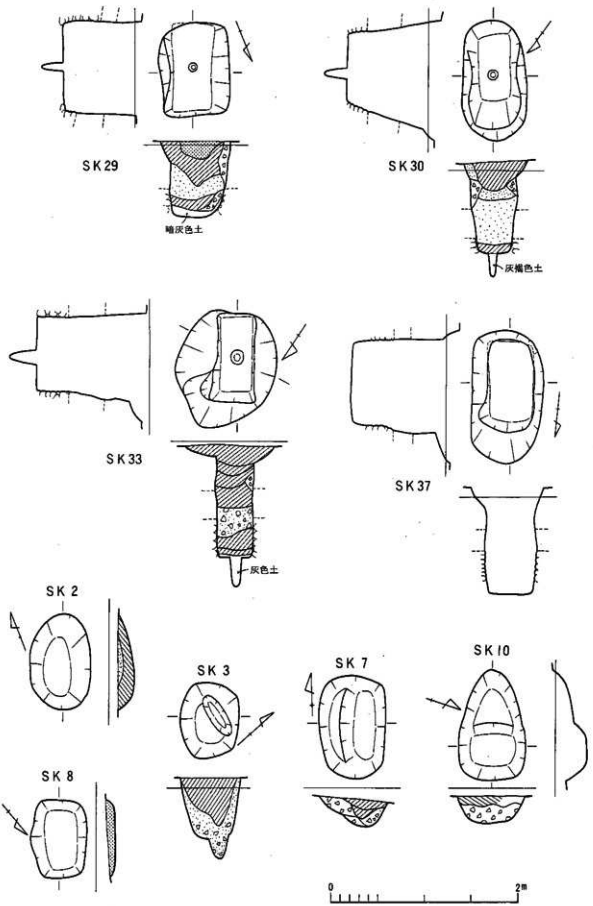


図8　土坑実測図4　1:40

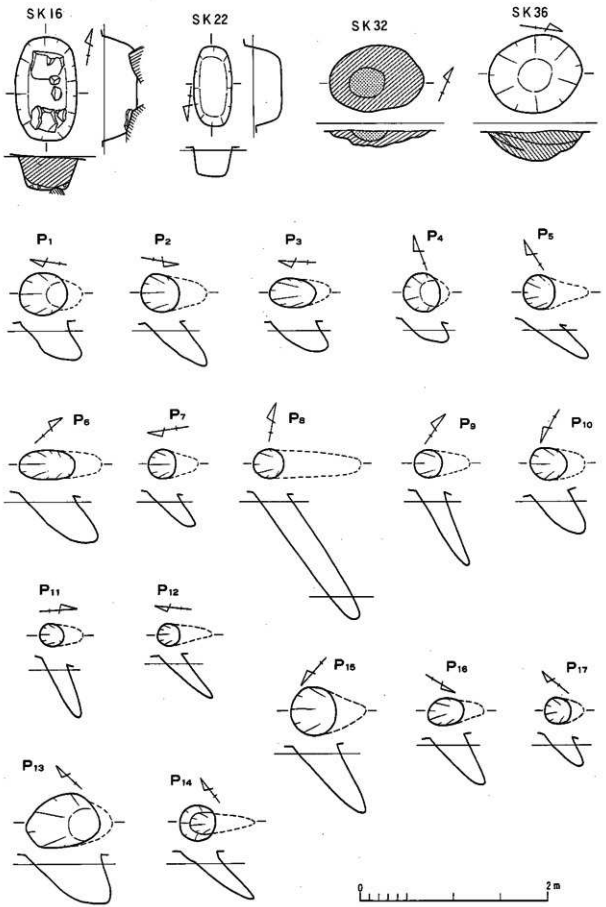


図9　土坑実測図5 斜めピット　1:40

第3章　遺　物

1　遺物出土状況（図10・11）

遺物は縄文時代の土器と石器が大半で、ほかには鉄器と近世～近代と思われる陶磁器片が1点ある。遺物量は全体でコンテナ2箱分とごく少ない。

縄文時代の遺物の分布状況は、A地区ではA10区ローム マウンド中からまとまって前期の土器が出土している（図10）のをのぞけば、押型文土器・前期縄文土器の小片・石器などが1ないし数片ずつきわめて粗に散在しているにすぎない。B地区は、調査地東部の尾根部では、A地区同様早・前期の遺物が十数片散在し、調査地中央の谷部で、前期の土器と石器がまとまって出土している（図11）。

B地区の前期の土器の出土層位は黒色土の下層から漸移層にかけての層位である。A地区の押型文土器は漸移層の上端で出土している。

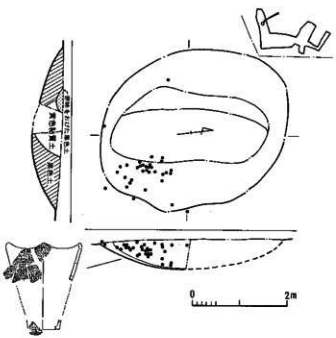


図10　D－10区ローム マウンド遺物分布図　1:80

2　土　器

第1類から第8類まで縄文時代の土器である。

第1類　回転押型文（図12－1～3）

1　楕円押型文土器である。小粒の楕円文で、砂粒子を多く含む。色調は茶褐色で脆い。楕円の大きさ3×4㎜。

2　山形押型文である。山形は横位回転。胎土色調等1と類似しており、同一個体と思われる。原体長は小片で不明。

3　太い平行沈線文のようにみえる回転押型文である。原体は棒状のものに太い平行な刻み目をいれたものである。凸面部幅は約3㎜。凹面部幅約2㎜。同様の手法の回転押型文は、新潟県小千谷市下蟹沢遺跡（新潟県　1983）と津南町卯ノ木遺跡（新潟県　1983）の回転押型文の一部にみられ、楕円文の下に押捺されている。3の土器片は2.4㎝と小破片でありはっきりしないが、この手法の押型文の上に楕円文が押捺されていた可能性もある。色調茶褐色。胎土は砂粒子を含む1・2より雲母が少ない。

第1類の回転押型文は、山形文と楕円文等を同一個体に横位帯状文が密接施文されており、細久保期のものと同手法と思われる。

第2類　沈線文（図12－4～11）

4　沈線幅2㎜、施文間隔の5㎜の平行沈線文である。色調は赤褐色。胎土に金雲母と石英が多量に含まれている。

5～11　同一個体である。色調は5の口縁部が二次焼成が加わり灰黒色であるが、6－11は茶褐色である。胎土は長石と思われる粒子が多量にみられ、小石が少量混入している。沈線は5㎜幅の半截竹管で無造作に施文されている。内面は丁寧に整形されている。器厚は6㎜と薄い。焼きは堅い。小片ばかりであり、文様の全体は不明である。5を除き浅いピット内出土である。

第2類は早期沈線文系の土器群のものではないかと思われる。

第3類　無　　文（図12－12～16）

12　色調は黄褐色。胎土は長石のような粒子が多い。器面は内外とも整形されている。器厚は8㎜で薄い。

13・14　同一個体である。色調は赤褐色。器厚は7㎜で薄い。内面は繊維束で整形されており、外面は篦状工具で整形されている。13は僅かに屈曲した部分であり、胴下半部と思われる。

15　色調は白灰褐色。胎土は砂粒子が多量に含まれており、大変脆い。器厚は11㎜と厚めである。外面は良く整形されている。

16　色調黄茶褐色。器厚12㎜で厚い。指頭痕が内外面に残っている。胎土は小石を多く含み脆い。

第3類は時期不詳の無文である。

第4類　ループ(側面環付き)文（図12－17～19・53）

17　側面環付き文（ループ文）で、足の長い環付き文である。胎土は繊維混入していて大変脆い。色調は黄褐色で断面黒色である。内面は丁寧に整形されている。

18・19　同一個体である。色調は外面灰黒色、内面茶褐色である。胎土は繊維が混入しているが焼成は良好で堅い。文様は足の短いループ文が密に施文してある。

第4類は前期前半の関山式併行の土器である。

第5類　縄文＋半截竹管による平行沈線文（図12－20～27・32、図13－54）

a種　20～27

20～26　同一個体である。色調は黒褐色～黄茶褐色でススが付着している部分がある。胎土は砂粒子や、軽石粒子や赤色の粒子が含まれており脆い。20にはＲＬ単節縄文を地文にし、その上に半截竹管で横一条の平行沈線文が施文されている。

27　浅鉢の屈折部の破片と思われる。屈曲上部は無文、下部は縄文が施文されている。

b種　54

54　屈曲部を設け、口縁部文様帯と胴部を屈曲部で分けた浅鉢である。口径約20.2㎝、高さ14.0㎝、張り出し部径27.7㎝、器厚約0.6㎝、底径約7.0㎝。色調は赤茶褐色で胎土は金雲母を多量に混入しており、砂粒子も多く混入しており脆い。口縁は内湾し、口唇直下に一条の太い凹状の凹みを設けている。その下は底部まで地文に縄文を施し、口縁部文様帯は縄文を磨消し、半截竹管による結節沈線文で木の葉状文、入り組み文などを施している。

c種　32

32　色調は外面黒褐色、内面赤黄褐色。焼成は良好で、堅い。胎土は石英粒が多い。内面は丁寧に整形され、外面は半截竹管で山形に施文されている。

第4類の土器は前期後半の諸磯期に比定されるものと思われる。20～27は諸磯a式。32は諸磯c式の土器と思われる。

第6類　半截竹管による平行条線文（図12－33～45、図13－46～52）

a種　33～42

33～42　同一個体である。色調は茶褐色。胎土は粗い砂粒子を多く混入している。焼成も悪くボロボロ

とした状態である。半截竹管による平行条線文で渦巻文など施文している。口縁は波状で口唇部外面に刻み目を付けている。竹管は4㎜の太さで4本を一単位として条線を用いている。

b種　43～49

43～49　同一個体である。色調も胎土もa種と同じである。施文方法が、a種の原体を用い、半截竹管の施文角度を急にし、結節状の半截管文にして施文している。

50～52　底部である。50の底部径は約9cmである。50･51はやや張り出しのある底部である。50はa種の施文をしており、50・51はボロボロとしており文様がはっきりしない。

第6類はほぼ塊った地点から出土している。a種もb種も色調・胎土が同じであり、原体も同じで施文法が半截竹管の角度を変えただけの施文法である。この様なことから第6類すべて同じ個体と思われる。この第6類は前期最終末の十三菩提様式併行の新潟県鍋屋町式の土器群と類似していると思われる。

第7類　隆帯＋沈線文（図12－31）

31　色調は赤褐色。隆帯部分は表面が剝がれている。文様は二帯の隆帯が縦位にあり、その脇に斜傾の沈線文がみられる。

この土器は中期初頭の深鉢の胴部破片と思われる。

第8類　その他の縄文（図12－28～30）

28　色調黄褐色。胎土は細かな砂粒子を多く混入している。文様は少々摩滅している。原体はＲＬで横位回転している。器厚は8㎜で少々薄手である。

29　色調赤褐色。胎土は雲母と石英粒が多い。焼成は良好で堅い。文様は単節縄文で、条の間隔があいている。

30　色調黄褐色。胎土は砂粒が多く、焼成は良好である。内面は丁寧に整形されている。外面も単節縄文を、無文帯を挟んで、横位帯状に施文している。

第8類の土器は文様構成が解らず、時期不詳である。

3　石　器（図14）

当遺跡に於ける石器はすべて縄文時代の石器である。

1　黒曜石製の石鏃である。基部の抉りの少ない二等辺三角形の石鏃で一方の脚の部分が欠損している。

2　横形石匙の欠損品である。横広剝片を利用している。剝片の縁辺に小剝離を加えて刃部と摘み部を作り出している。刃部は片刃であり、やや凹みをもつ。

3　剝片の周縁に鋸刃の様な調整剝離を表裏に行い、甲ら状の形態に調整している。図の上下の先端に尖った部分がみられ、錐の様な利用をしたと思われる。

4　横広剝片の下端部に小さな剝離が2～3回見られる。使用のための刃こぼれの可能性もある。

5　チャート製の剝片である。側縁に小さな剝離が規則的に行われており、掻器の刃の一部と思われる。

6　弾け飛んだ剝片の側縁部に小剝雑痕の残る黒曜石製の石器である。使用のための小剝離痕と思われる。

7　側縁の一方に礫面を残し、その礫面より調整剝離を行っている。打面の部分は欠失している。剝片の礫面とは反対側の側縁に、裏面より鋸の刃のような剝離を施した掻器状の石器である。

8　礫面を大きく残す大形の肉厚な縦長剝片を用いている。一側縁は折られている。図の上縁部は表裏から、下縁部と折られていない側縁部は裏面から小剝離が所々にみられ、掻器的に使われていたようである。

9　打点部が欠損している横断面がほぼ三角形の大形な縦長剝片である。

10・11　横広の剝片類である。

12　蛇紋岩製の先端部に敲打痕の残る石器である。礫面はかなりツルツルしているので磨石としている

可能性もあるが、はっきりとした痕跡がない。この石材は、磨製石斧の原材として使われるので、素材として持ち込まれた可能性もある。

13　凹石の破片である。凹み面は浅く広がりも小さい。

14　磨石と敲打器を兼ねた石器の欠損品である。横断面三角形の長軸側縁を磨面としている。先端部には敲打痕が残っている。

15　楕円形の礫の一面を磨面として利用した石器である。半分欠損している。

16　砥石のような役目をした磨石と思われる。断面方形の板状の面を利用したものと思われる。

17　石鉾形に変形した磨石である。ほぼ全面を使用している。

石器は大変疎らに出土している。A地点では縄文時代早期・前期、B地点では前期の土器が出土している。B地点での1の石鏃と2の横形石匙、7・8の掻器は縄文時代前期に比定できよう。他の石器は縄文早期から前期にかけて比定できると思われるが土器との伴出関係は不明である。

表1　石　器　計　測　表

図版No.	出土地点	遺物No.	石器名	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
1	B	104	石鏃	黒曜石	2.3	1.5	0.4	1.1	
2	B	102	石匙	安山岩	5.5	5.5	1.2	29.6	1/5欠損
3	A	T18−1	石錐？	安山岩	6.8	4.1	1.8	42.4	
4	A	E17−1	二次調整剥離のある石器	安山岩	7.8	6.9	1.5	69.4	
5	A	−	剥片	チャート	4.0	0.6	0.6	1.1	石器刃部破片
6	B	103	二次調整剥離のある剥片	黒曜石	2.0	2.5	1.1	3.7	
7	B	91	掻器	安山岩	5.2	6.4	2.5	52.4	
8	B	97	掻器	安山岩	10.7	7.3	2.5	196.0	
9	A	G14−1	剥片	安山岩	12.0	5.2	2.7	114.1	
10	A	V16−2	剥片	安山岩	5.0	7.7	1.5	52.6	
11	A	D11−1	剥片	砂岩	6.7	7.4	2.3	86.6	
12	A	X14−1	敲打器	蛇紋岩	10.5	5.6	2.5	155.9	裏面1/10欠損
13	B	46	凹石	砂岩	3.8	7.7	5.5	199.3	約3/4欠損
14	B	SK12	敲・磨石	安山岩	8.0	6.7	5.5	352.0	約1/2欠損
15	A	E10	磨石	安山岩	6.8	6.7	5.0	235.6	約2/3欠損
16	B	118	磨石	安山岩	8.4	8.7	1.7	223.8	約1/2欠損
17	A	D9−1	磨石	安山岩	12.9	7.8	4.4	686.9	石鉾型

4　鉄製品（図16）

鉄製品が2点単独で出土している。1は鉄釘でI15区出土。頭が折りまげられる角釘で、現存長7.7cm。中世の所産であろう。2は板状品で全形なのか一部分なのかも不明。現存長4.2cm。

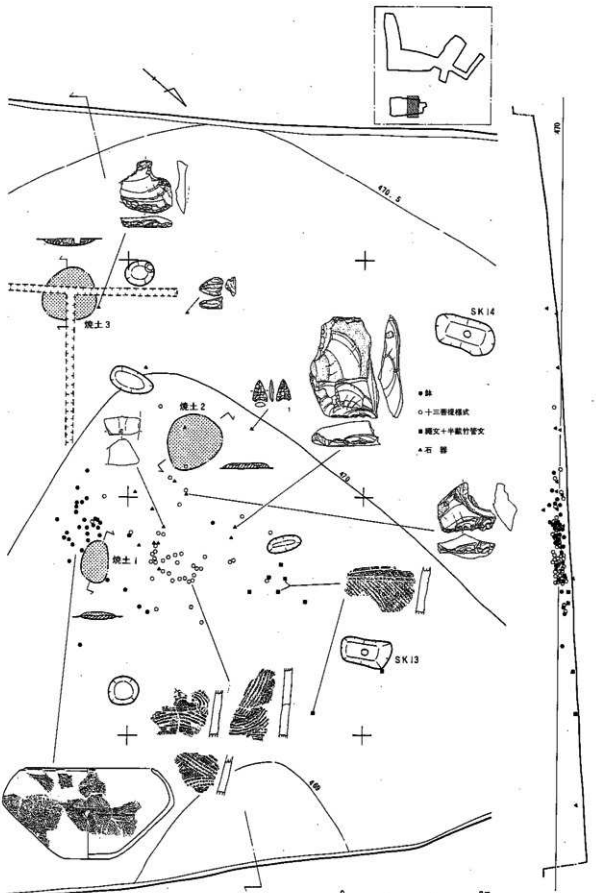


図11　B地区遺物分布図　1:80

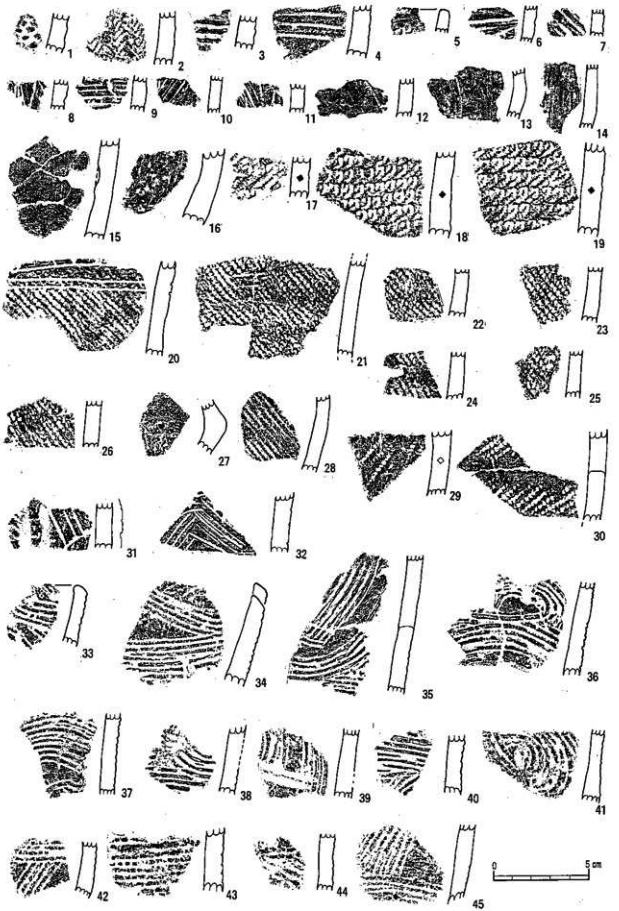


図12　縄文時代土器実測図1　1:2

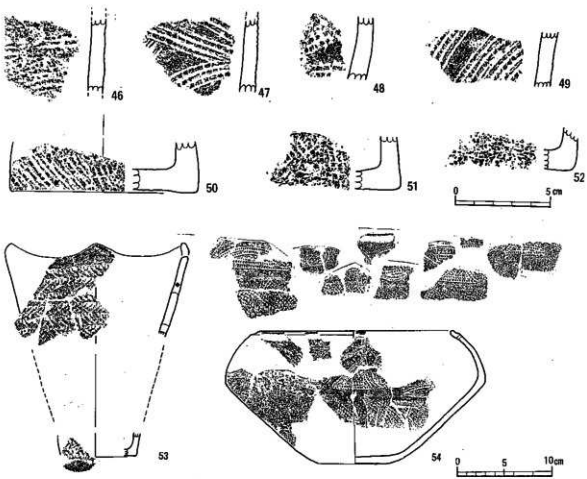


図13　縄文時代土器実測図2　1:2，1:4

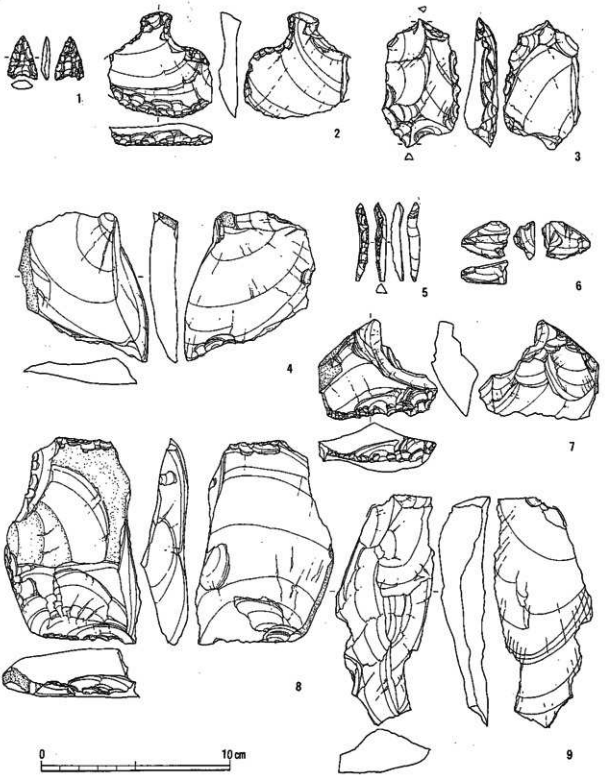


図14　縄文時代石器実測図1　1:2

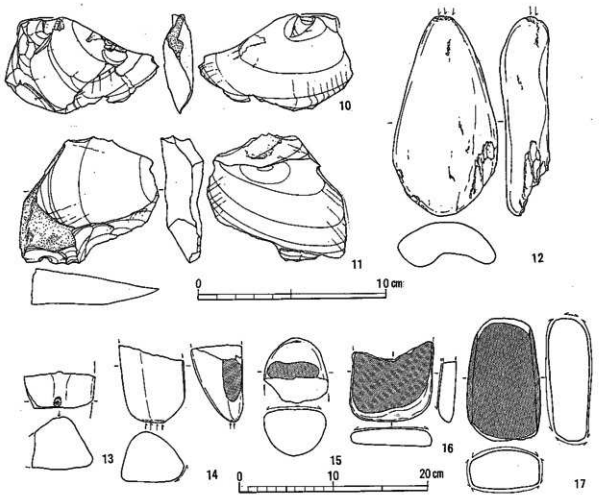


図15　縄文時代石器実測図２　10～12(1:2) 13～16(1:4)

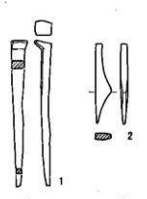


図16　鉄製品実測図　1:2

第4章　結　　語

鳴沢頭遺跡を学界に最初に紹介したのは、藤森栄一氏であった。このことについては、第2章で常盤井がすでに触れているところである。藤森氏は、渡辺喜平次氏採集資料を紹介する中で、踊場式並行土器とともに断面三角形の石器7点を石鏃として報告されている。この石鏃とされた石器は、筆者の誤解でなければ断面三角形の磨石であるとしてもよいものであろう。今回の調査では、本遺跡からこの種の石器は1点しか発見されておらず後述する鳴沢頭II遺跡からは、数点出土しており縄文早期の断面三角形の磨石と理解してよい石器と思われる。

さて、本遺跡の出土土器量は僅少であったが年代的には縄文早期・前期・中期・後期の各期にわたっている。従って、各時期の土器の出土量からみて、長期間にわたる定住的生活は行われなかったとしても縄文時代の各期にわたって利用された場所と考えてよいであろう。その生活状態は、あるシーズンにおける蛋白質源である動物の捕獲と落葉樹林帯に豊富に存在する植物性食品の採集と考えてよいであろう。動物捕獲については、20基以上にわたる長方形土坑が発見されていることである。本遺跡の東北側に谷地が存在し、かつては水田地帯となっていた。この谷地状地形は、上方の中堤深奥部より湧出する水流によって形成されたものであり、水を求めて訪れる動物達の水飲み場であった可能性がつよい。落とし穴と考えられる土坑は東北側に傾斜する斜面に多く設けられていることもこのことを物語っているように思われる。

出土土器が縄文早期より後期の各期にわたっているにもかかわらず、その出土量がきわめて僅少なことは、この地に居を営んだ人びとが長期に滞在するのではなく、一年のある季節における短期間の仮泊的居住の状態を示しているものと考えてよいのではなかろうか。

第３編　鳴沢頭Ⅱ遺跡

第1章　遺跡の概要

1　遺跡の概要

鳴沢頭II遺跡は、鳴沢頭の東北岸の遺跡である。もとは南西岸を含めて鳴沢頭遺跡と総称されていたが、今回の発掘調査で両岸の遺跡の様相が異なっていることが判明したのでIとIIに呼び分けることとした。

当遺跡は、今回の発掘調査で、縄文時代草創期の室谷系回転縄文土器を初め、早・前期の遺物が多量に出土した。これは発掘前の地形観察などからは予想していなかったことである。改めて「遺跡は掘ってみなければわからない」ということを痛感し、予想以上に温井台地上には多くの遺跡が分布していたであろうことを推察させる。

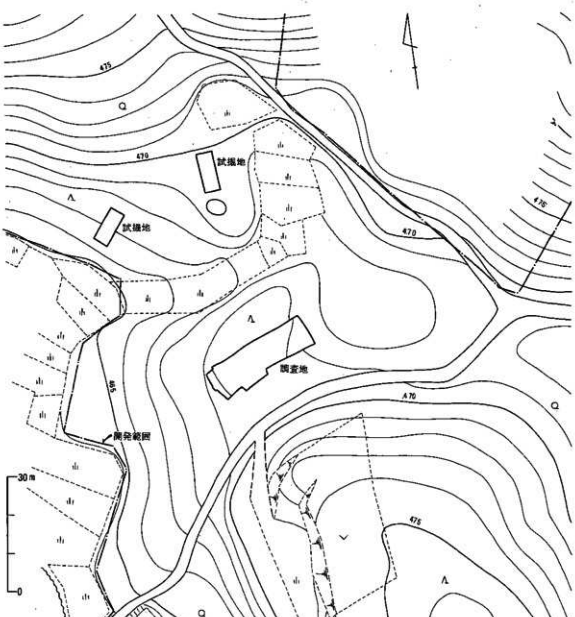


図1　調査地周辺地形　1:1000

2　調査方法

(1)　調査地点　（図1）

鳴沢頭II遺跡の調査対象地は鳴沢頭東北岸の山林である。ここは鳴沢に向かって（西南流）開く「Y」字形の小さな沢を中心とする地形で、沢は水田として利用されており、豊富な湧水こそないものの沢は通年水を涸らさない。

試掘調査はこの沢の両岸で行ったが、北岸の2か所は遺構・遺物とも検出されなかった。発掘調査地は南東小丘陵から舌状に張り出した小テラス上に位置し、平坦面の広さは25m×25mで約625㎡である。調査面積は約300㎡である。

(2)　調査区の設定（図2）

調査区内の地区割りについては、5mのグリッド法とし、表土除去後に農地開発6工区工事用メッシュ杭を基準として5m方眼を組み、西から1・2・3……、南からA・B・C……と呼称した。

基準とした工事用の杭は、基準1がX＝−6160（9ライン）、Y＝106280（12ライン）、基準2がX＝−6160（9ライン）、Y＝106300（13ライン）である。

レベルは工事用遣り方の標高を基準とした。

(3)　調査方法

調査方法は樹木の伐採の後まず重機によって表土を除去した。この際表土は尾根線上のため薄く10～15cmで、しかも表土直下が遺物包含層の黄灰色粘質土層であり、さらに木根等があったので一部遺物包含層まで除去したかもしれない。このことは先にも述べたように「まず出ないだろう」との予測があったことにも原因することは否めない。

表土除去後、ジョレン・移植ゴテ等で慎重に遺構・遺物の検出を行い、必要に応じて人力で調査地を拡張した。

遺物のとり上げは原則として1点ずつ、グリット毎に番号をつけて地点と高さを測ってとり上げたが、地区割りが調査地に斜行していたので、グリットの判定がややこしい面もあった。

図面の作成は、遺構がないこともあって、遺物分布図と全体図をかねて40分の1平板図を作成した。

図2　調査地全体図　1:400

また旧石器の有無を調査地北壁ぞいに断ち割りトレンチを入れて確かめた。
写真撮影は白黒とカラースライドを35㎜フィルムで撮影した。

3 層　序

調査区内の層序は基本的に上層から、暗灰色土(表土10～15㎝)、黄灰色粘質土(15～20㎝)、黄色粘質土(地山)であり、所々地山の礫層が、黄灰色粘質土上面まで顔をのぞかせている。

遺物は黄灰色粘質土から出土しており、縄文時代草創期の遺物も前期の遺物もレベル的に大差がない。この黄灰色粘質土については、今回調査の他の遺跡でいう漸移層にほぼ相当するものと考えている。他の遺跡では黒色土が認められるので黄色粘質土との間に明確な漸移層がみられるが、当遺跡では黒色土がないので明確ではないであろう。

第2章　遺　物

1　遺物出土状況

遺物は縄文時代草創期から中期のものがある。中期の遺物は数点である。特色として板状の石皿と凹・磨石が多いことがあげられる。石皿は5点あり、凹・磨石は25点ある。

遺物の分布は、調査地の西に密度が高い。つまりテラス上面から西斜面にかけて集中している。

土器の分布を細かくみると、室谷系の土器・竹管刺突羽状縄文土器・貝殻腹縁文土器がそれぞれまとまっている。しかし純粋なまとまりでなく年代の異なる遺物が混在している。室谷系の土器はＢ５区東北隅を中心に分布している。すべて同一個体の破片である。石皿と凹石が分布の中心にある。竹管刺突羽状縄文土器はＣ５区東端中央を中心に分布している。すべて同一個体の破片である。ここも分布の中心に石皿がある。貝殻腹縁文土器はＤ６区南端中央を中心に分布している。ここも分布の中心近くに石皿がある。その他の土器については出土点数が少ない割に年代幅がある。分布は散在的だが、押型文土器がＣ・Ｄ５・６区に割とまとまってあり、石英粒を多量に含む絡条体圧痕文土器がＣ７区にあることが指摘できる。

石器の分布は土器に比べて散在的である。凹石・磨石は石皿の近くにある例があるが、多くは単独で散在している。小形磨製石斧は調査地西南端Ｂ５区出土。打製石斧はＤ８区とＣ６区の破片が接合した。縦形の石匙はＢ７区・Ｃ６区から出土している。黒曜石のフレイクが他と離れてＥ８区から出土している。

遺物の出土層位は前に述べたように、表土直下の黄色粘質土層で、草創期の土器も前期の土器もレベル差がない。

2　土　器

第１類から13類まですべて縄文時代の土器である。

第１類　押圧縄文（図４　１～13）

１～13　同一個体である。色調は暗茶褐色から赤茶褐色。口縁部から胴部にかけて黒色の付着物がみられる。胎土は細かい砂粒子混入させ、僅かな繊維も含んでいる。焼成は良好で堅い。器厚は6－8㎜である。内面は丁寧に整形されているが、指頭痕が随所にみられる。外面は文様が少々摩滅している。

１～４は口縁部の破片である。器形は口縁部が少し外反し、口縁部と胴部の境目がくの字状に屈曲しており、胴部はやや膨らみをもち、底部にいたる深鉢である。

文様は、口縁部にＲＬの縄文を器体の下の方から回転させ、その後口縁直下にＲＬの縄文を横方向の回転で施文し、口縁部文様帯は羽状縄文の効果をもたせている。その下部の屈曲部に縄文末端側面を等間隔に押圧している。その押圧縄文を施した屈曲部の下は、同原体の縄文によって、回転方向を変えた羽状縄文や、斜縄文を施文している。

第１類の土器は草創期末期の多縄文系の土器群(注１)と思われる。新潟県室谷洞窟(新潟県　1983)や、山形県日向洞窟(山形県　1969)などにみられる段を設ける一群と類似している。本類の有段の上部の口縁部文様帯に羽状縄文を施し、有段部分に押圧縄文を施文する手法は、特に室谷洞窟下層の土器と類似している。今後の鮭山市の類似例の発見を待ちたい。

第２類　薄手縄文（図４　21－21）

14～21　器厚は5～6㎜である。16は色調が赤褐色。14－21は色調が灰黒色である。胎土は僅かな繊維を含み、胎土粒子は細かい。焼成は良好で、堅い。内面の整形は丁寧である。14は口縁部分であり、口唇部

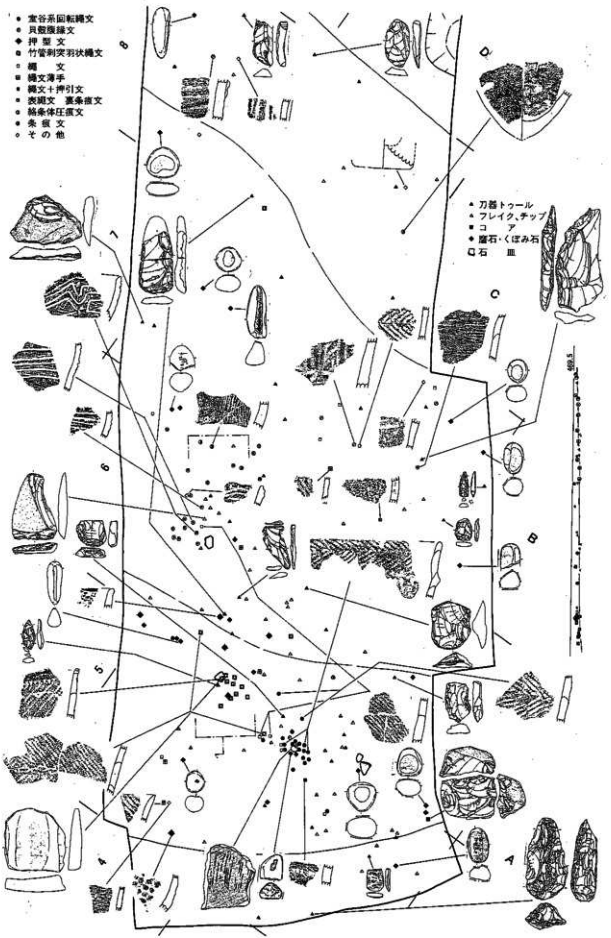


図3　遺物分布図　1:100

が薄くなりやや外反している。17は底部付近のものと思われる。緩やかな円みを持つ平底か丸底かと思われる。原体は単節の縄文と思われる。0段多条であろうか？

第2類の土器は時期不詳である。鳴沢頭II遺跡においては、草創期より中期までの土器片が遺跡の中で混在している。当類の土器には僅かであるが繊維痕跡が残り、前期前半の花積下層式(併行)の土器の可能性が指摘できる。しかし、器厚が5～6㎜と薄く、花積下層式の印象とは異なる。草創期の回転縄文の施文される土器群に相当する可能性も残されている。今後の類例の増加を待ちたい。

第3類　回転押型文土器（図4　22～28）

a種　22～25・27・28

同一個体と思われる。22・23・27は口縁部の破片である。口唇部が丸みを持つ。23は特に肥厚である。胎土中には雲母や石英などの粒子や小石が含まれている。文様の施文や整形は粗い。施文される楕円粒の大きさがまちまちである。何度も重ねて施文したためと思われる。施文方向も一定ではない。27の断面は6.5㎜から8.5㎜と一破片中で厚みがまちまちである。口縁部にススが付着している。

b種　26

色調は黄褐色。内面はススが付着している。胎土は長石のような白色粒子が多く含まれ、少々大粒な粒子の石英も混入している。楕円は6.5×8㎜。底部に近い破片である。

3類はa種b種とも早期押型文の細久保期(宮下健司　1986)にあたるものと思われる。

第4類　沈線＋貝殻腹縁文土器（図4　29～37）

a種　29・33～37

これらは同一個体と思われる。表裏両面に貝殻条痕文が施文してある。色調は白黄褐色。破片断面は灰黒色。胎土は僅かな小石が混入しているが、全体として粒子の細かな胎土である。表面粉っぽいが、堅めの土器である。器厚は5㎜と薄い。

29は波状口縁の部分である。器壁の内外面を貝殻条痕文で整形した後、口縁部の文様帯を施文している。口縁部の文様帯は沈線文を波状口縁のカーブに沿って3本平行に施文し、頂点部分でV字形に施文している。V字の空白部分2カ所を竹管の先端で刺突している。平行沈線の間には貝殻腹縁文を施している。また平行沈線の下に方形の区画を設け、その中に〈状の貝殻腹縁文を施文している。

胴部には貝殻条痕文が〈状に施文しており、整形のためだけではなく文様効果ももたせているようである。

b種　30・31

a種と胎土や色調は同じである。器厚も薄い。平行な沈線文の間に貝殻腹縁文が施文されている。a種との違いは、裏面に貝殻条痕文が施文されていないことである。

第4類は早期中半の貝殻沈線文系の土器群である。飯山市の岡山地区新堤遺跡(飯山市教育委員会　1991)においても同様な破片が出土している。口縁部文様帯の特徴から、関東地方の田戸上層式や東北地方に於ける貝殻沈線文系の土器群との関係を強く感じることができる。胎土色調などから、在地の土器にはない特徴があり、搬入土器と思われる。

第5類　絡条体圧痕文（図5　38～42）

a種　38～40

胎土に繊維が多量に混入している。

38・39　同一個体である。色調は茶褐色。器厚は厚く、焼成は良好である。内面整形も良好である。外面の文様は絡条体圧痕文で変形な菱形状の文様を施文している。

40　色調が灰黒色。文様は38・39と同様な絡条体圧痕文を施文している。

42　色調が黄褐色。胎土は石英結晶粒が多量に含まれている。文様は摩滅して、はっきりしないが、絡

条体圧痕文のような痕跡が外面の一部に残っている。

b種　41

41　薄い隆帯の上と、隆帯と隆帯の間に、絡条体圧痕文を施している。色調は暗茶褐色。胎土に多量の繊維と、石英の結晶粒を多量に混入させることが特徴である。表面は摩耗しているが、焼成は良好。

第5類は早期末から前期初頭まで続く絡条体圧痕文の土器(注4)である。繊維は混入しているが、条痕文を施文しないタイプである。41・42・43の石英結晶粒の多量混入土器は注目すべき点であり、胎土分析による粘土の産地解明を待ちたい。

第6類　条痕文土器（図5　43～46）

43は色調黄褐色。胎土に繊維と石英結晶粒を多量に混入している。文様は摩耗していてはっきりしないが、条痕文のような施文が一部にみられる。

44は色調赤黄褐色。胎土は繊維を混入しており、僅かに石英粒を含んでいる。文様は表裏に条痕文が施文されているが、摩滅していて詳細ははっきりしない。

45は色調暗赤褐色。表面に条痕文を施文している。胎土は石英粒を多く含み、繊維を混入させている。

46は色調黄褐色。胎土は繊維を混入させ、細かな砂粒子を多く含んでいる。表面が摩滅しているが、表裏の文様は貝殻条痕文である。尖底の部分である。

第6類は早期末の条痕文系の土器である。第5類でもみられた石英結晶粒を含む破片がこの類でもみられる。

第7類　無　　文（図5　47～49）

47－49　同一個体である。色調は茶褐色。胎土は金雲母を含み、繊維も含む。内面に指頭痕を残している。

第8類　網目文（図5　50）

胎土は緻密で焼きも堅い。色調は白黄褐色。器厚は5㎜と非常に薄い。内外面はよく整形されている。文様は非常に細い撚糸と細い棒を用い、棒に交叉部を絡ませて、網目状に巻き付けた単軸絡条体（単軸絡条体第6類）の原体（山内清男　1979）を、横位に回転させている。

この様な単軸絡条体の施文具は、東北地方前期の円筒下層式（石岡憲男　1986）や、大木2式に使用例が多い。特に、宮城県や福島県の前期前半（大木2式）に類似する施文具を使用した土器（埼玉県考古学会　1990）があり、器厚も薄手のものがみられ、これらの土器群の搬入品ではないかと思われるが、土器片が小さな破片であるために断定することはできない。今後の類例を待ちたい。

第9類　縄　　文（図5・6　51～78）

a種　51・52・63－76

繊維を胎土に混入させた斜縄文と羽状縄文である。

51　色調暗茶褐色。胎土に石英粒を多く含む少々脆い破片である。内面に指頭痕を残す。外面は単節縄文を施している。

52　色調暗褐色。外面は摩滅しており明確ではないが、単節縄文と思われる。内面に細い条線痕がみられる。

63　色調茶褐色で大変脆い。文様は単節羽状縄文である。原体の撚りの太さが異なる。

64　色調赤褐色。胎土に繊維が多量に含まれており、脆い。外面の文様は単節縄文。内面は黒色の付着物があり、黒褐色で指頭痕がある。

65・66　同一個体。色調は外面赤茶褐色で、断面内黒褐色、内面も暗褐色。文様は単節の羽状縄文。薄手で表面摩滅している。

67　色調灰黄褐色。薄手で焼きがよい。文様は単節羽状縄文。

68　色調が外面赤茶褐色、内面黒色。繊維痕は少量である。薄手の焼成の良好な土器である。文様はＬＲ・ＲＬの結束羽状縄文である。内面は繊維束で整形している。

69　色調茶褐色。内面に指頭痕が残っている。脆くて表面摩滅している。羽状縄文のようであるが、文様の詳細は不明。

70　暗灰褐色。胎土に石英粒混入。文様は単節縄文であるが表面摩滅しており、小片でもあり詳細不明。内面は良く整形してある。

71　色調暗茶褐色。断面黒色。粒子の細かな胎土である。表面摩滅している。縄文の撚りの太さの違う結束単節羽状縄文であるが、文様の詳細不明。内面は良く整備されている。

72　外面暗茶褐色、内面茶褐色、断面黒色。文様は単節縄文である。

73　暗茶褐色。断面黒色。単節縄文の文様である。

74　茶褐色。断面黒色。単節縄文の文様である。

75　赤褐色の色調で、断面は黒色。胎土は雲母が含まれており若干粒子が粗い。０段３条単節縄文土器である。

76　底部近くの破片である。色調は外面赤褐色、内面黒色。内面に指頭痕が残る。器厚は厚いが、大変に脆く、縄文の詳細不明である。

ａ種の縄文の土器は、繊維が混入しており、羽状縄文土器もあり、前期前半の土器と思われる。

ｂ種　53～62

同一個体である。列点文と縄文が施文されている。色調は紫茶褐色。胎土は赤色粒子や長石を含み、繊維も混入しており、脆い土器である。波状口縁の土器で、口唇部に２つの刻みを施し、口唇部直下にＤ形の半截竹管で列点文を施し、その下に羽状縄文を施文している。羽状縄文は、ＲＬとＬＲの違う撚りの結束縄文を横位・縦位に回転させて、菱形状に装飾性をもたせて施文している。前期前半の羽状縄文系の土器である。

ｃ種　77・78

繊維の混入のない縄文である。

77　暗茶褐色の色調で、胎土に多量の石英粒を含んでいて、焼成は良好である。文様は単節縄文を地文とし、その上を［形の押し引き文を横列に施文している。小片であるため詳細は不明。

78　色調が黄褐色で、外面に黒色の付着物がついている。器厚は薄く、焼成は良い方である。文様はＬＲ・ＲＬの縄文による結束羽状縄文である。

ｃ種の土器は時期不詳である。

第10類　繊維混入の底部（図６　79）

79　縄文前期の平底と思われる。底部径5.8cm、底部厚2.5cm。大変脆い胎土である。

第11類　沈線文（図６　80・81）

80　色調暗茶褐色。黒色の付着物が外面に有り。口唇部に刻みがあり、縄文を地文として、その上に楕円形の沈線文を施文している。胎土は石英と金雲母が多く混入している。

81　色調暗黄褐色。胎土は砂粒子と多くの長石が混入している。沈線は乱雑な半截竹管文で引かれている。

第11類は縄文前期の諸磯式の破片と思われる。

第12類　隆帯と沈線文（図６　82）

82　色調暗褐色。縄文中期の深鉢の胴部破片と思われる。

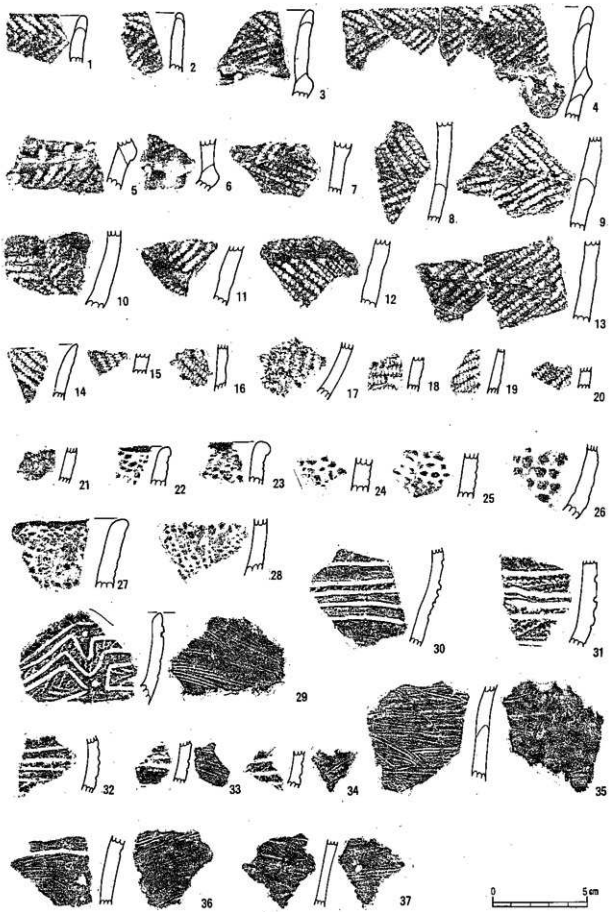


図4　縄文時代土器実測図1　1:2

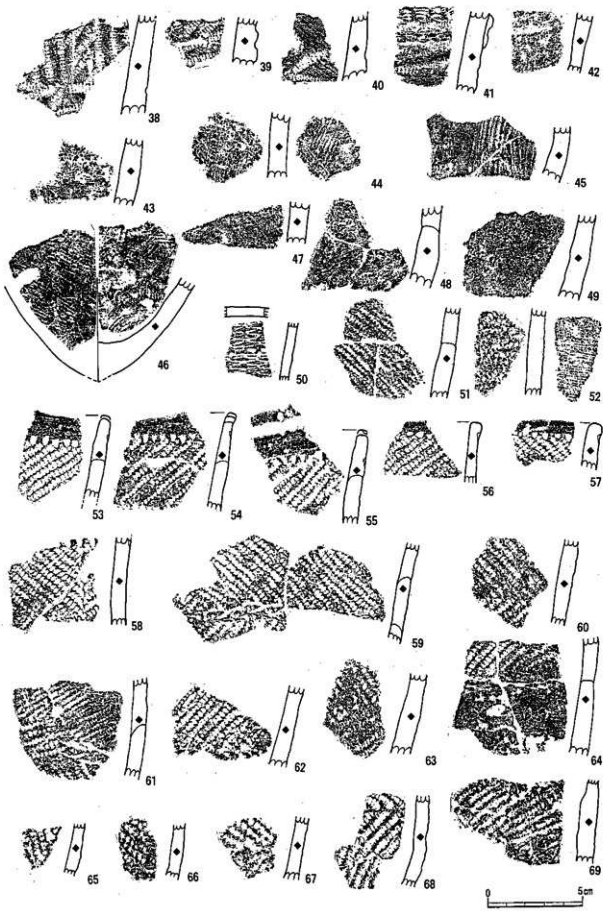


図5　縄文時代土器実測図　1:2

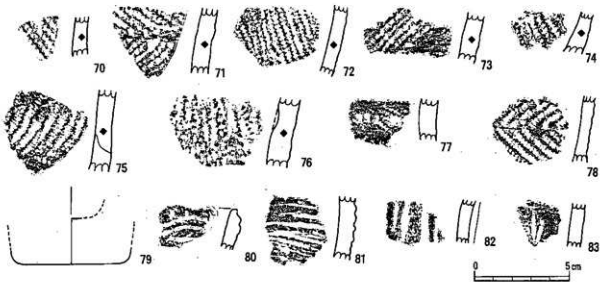


図6　縄文時代土器実測図3　1：2

第13類　その他の沈線文（図6　83）

83　色調灰暗褐色。文様の詳細が明確でない破片である。胎土は細かな粒子である。内面は丁寧に整形されている。時期不詳。

注1　筆者は縄文草創期を多縄文系土器群までと考え、撚糸文土器以降を縄文早期としている。

注2　永峯光一氏、谷口康浩氏、柏谷崇氏に実見していただき室谷下層式に類似する土器とのご意見をいただいた。

注3　群馬県の前中原遺跡（群馬県　1988）に0段多条の花積下層の土器群がみられ、文様は類似するが口縁形態や器厚に相違点がみられる。

注4　宮下健司6　1986「格縄体圧痕文」の項参照。

3　石　器（図7～14）

当遺跡より出土した石器は、縄文時代のものと思われる。

1　片刃の蛇紋岩製の小形磨製石斧である。頭部約1/3が欠損している。全体はよく磨かれており、側縁に陵を持ち、横断面が方形である。小形の丁寧に磨かれた定角形の磨製石斧である。

この様な石斧は早期押型文期と前期前半期にみられる。当遺跡においても、押型文期と前期前半の土器が出土しており、ほぼ押型文期から前期にかけての小形磨製石斧と思われる。

2　小形の縦形石匙である。石材は白色の頁岩である。両側縁と下部に規則的な剝離を行い、平行な両側縁と、下縁部は直線的な刃部に仕上げている。基部は僅かな抉りを付け、小さな細い摘みを作出している。

山形県舟形町大畑山遺跡（山形県　1969）において2の石匙に類似する石器が出土している。大畑山遺跡では縄文時代早期中半～早期後半の土器に伴っている。剝離の整った縦形石匙は、東北地方の早期中半より前期前半に多くみられる。2の石匙は石材の良質な頁岩が使用されており、縄文時代早期あるいは前期における、東北地方からの搬入品の可能性がある。

3　尖頭状の両面剝離のある石器である。基部側縁に僅かな礫面を残す。全体的に粗形であり、尖頭状の石器（石槍？）の未製品と思われる。側縁の細かな調整剝離が正面の一部にしかみられない。

4　粗形の縦形石匙である。縦長の薄い剝片を用いている。打面部を折り取り、ほとんど剝片の形態を生かし、両側縁の上部のみに抉りを付け摘み部を作出している。その下の側縁には、使用した際の刃こぼ

れと思われる小剝離が所々にみられる。

この石匙は、剝片の形態をそのまま生かしており、押型文期の石匙に類似点が多く、ほぼこの期のものと思われる。

5　小形ややや円形の両面石器である。裏面の一部に主要剝離面を残している。縁辺より中心部に向かって荒く剝離をし、その後周縁に小剝離を加えている。図下部に石鏃の中ご部を作り出したような小剝離がみられる。

石鏃の先端部を作り出すのに失敗したような石器にも思われるが、側縁加工がうまくなく横断面がレンズ状になっていない。図下部縁辺を刃部とした小形の掻器と思える。

6　分厚な打製石斧と思われる。全体の形状は丸鑿的である。横断面は菱形である。側縁加工は約90度角で行われているが、剝離端部がヒンジやステップ状になってしまい、中央の陵は取り去ることができなかったようである。正面の中央部の長軸の稜部を、陵面から数回の敲打で取り去ろうとしているが、陵が潰れてしまい失敗している。刃部も製作するために何度か剝離を試みているが、敲打の潰れがみられ、刃部角が90度となっている。

6と同一個体の剝片が数点遺跡内に散在している。接合はしない。中央の陵部や刃部がうまく剝離されなかった打製石斧未製品の可能性が大きい。また、丸鑿の局部磨製石斧の素材である可能性もある。

この石斧は、新潟県（新潟県　1983）卵の木遺跡の打製石斧、下別当遺跡、小瀬ヶ沢遺跡の打製石斧と形状が近似している。また、長野県（長野県史刊行会　1986）唐沢B遺跡や神子柴遺跡の局部磨製石斧とも形状は近似している。先土器時代最終末より続く縄文時代草創期の丸鑿形局部磨製石斧や打製石斧に関係する打製石斧と思われる。

7・8　8の打製石斧が3分割してしまった刃部部分、掻器に再加工して用いたのが7の石器である。

8の打製石斧は頭部が欠損した短冊形の打製石斧である。薄い板状の横広剝片を用い、打面部を側縁部分としている。両側縁と刃部の縁辺だけに規則的な調整剝離をし、打製石斧の形状を作出している。

7は打製石斧の折れた面に調整剝離を加えて、折れた面の陵をなくし、そのまま刃部を掻器として使用したようである。刃部の縁辺は少し摩耗している。

8の打製石斧は、薄い板状の剝片を利用し、周縁部にのみ剝離を加える短冊形の特徴は、直刃式片刃打製石斧に近似しており、早期前半の遺跡にみられる（宮下健司　1986）。同期のものと思われる。

9　打製石斧の素材と思われる。楕円形の転石を半截した横広剝片を用いている。打面部を荒く表裏より調整剝離し、刃部加工する途中で放棄したものと思われる。

10　胴部が少し湾曲した、頭部と刃部が欠損した打製石斧である。

12　石斧の刃部と見られる石器である。板状の剝片を用いている。図右側辺と胴頭部2/3を欠損している。刃部は円みを帯びている。

11　板状の剝片を用い、図上部と両側辺を折りとり方形の形態にした後、一側縁の高まりをとり、下部を刃部に加工した掻器である。

13　横広の大きな剝片を利用し、打面部縁辺の高まりを表裏より取り去っている。その反対側の側縁に小さな調整剝離を規則的に加え、その部分を掻器の刃部として用いたと思われる。

14　靴篦状に成形された石器である。礫面を残す横広剝片を素材としている。打面及び打撃瘤が裏面から取り去られている。横広剝片の先端部に相当する部分に規則的な調整剝離を施し側縁とし、剝片の側縁にあたる部分に刃部加工を施し、箆形の掻器に仕上げている。刃部の断面のなす角は50度を測り、平面形は直線的な形態である。

直刃斧と形態的には近似するが、刃部加工が認められ、素材剝片の縁片をそのまま刃部として利用する

直刃斧とは様相が異なる。篦状石器とも近似するが、篦状石器には小形のものが多く、本例のような大きさのものは認められない。また、撥形の打製石斧にも近似しており、本例はこれら三類の石器の中間的な形状を持っているといえよう。

15　礫面を側縁に残す不定形な剥片を用いている。礫面とは反対側の側縁に搔器の刃部加工をしている。その側縁の一部は、僅かに抉れて、やや摩耗している。

16・17　横広剥片を利用して、その一側縁に刃部加工を施し、直線的な刃部の搔器に仕上げている。16は刃部角55度で規則的な刃部の加工剥離を施している。17は刃部角25度で鋭利な刃部になっている。やや抉りのある刃部である。

19　打面に礫面を残すやや縦長の剥片を用い、剥片端部の裏面に刃部加工を施して、円みを持つ刃部に仕上げた搔器である。刃部角度40度である。

18　板状の剥片を用い、周縁に大きく剥離を加え円みのある素材に仕上げている。その回りに細かめの刃部加工がみられる。周縁全体が搔器の刃部と思われる。刃部の縁辺は使用のためトロトロと摩耗している。

20・21　彫器と思われる石器である。2点とも板状の横広剥片を用いている。20は剥片端部より側縁に樋状剥離を加えている。21は礫面の残る打面部から剥片側縁に樋状剥離を加えている。2点とも樋状剥離に角度はほぼ直角である。

22　小剥離痕のある横広剥片である。剥片端部の縁辺に小剥離痕が裏面にみられる。使用のための小剥離痕であろうか。

23　打面部半分を裏面からの剥離で取り去っている。二次調整のある剥片である。両側縁の一部に使用のためと思われる小剥離がみられる。

24・25　横広剥片の打面部を表裏より取り除いた二次調整剥離のある剥片である。24にはフェザーな剥片端部に使用のためと思われる小剥離痕がみられる。25は側縁に小剥離痕が少しみられる。

27　打面を取り除いた二次調整のある剥片で、裏面に礫面を大きく残している。側縁に小剥離痕がみられる。

26　側面に礫面を残す分厚な縦長の剥片を利用している。図の上部と下部に刃部加工を施した搔器であろう。側縁にも小剥離がみられる。

28　打面と側縁に礫面を残す板状の縦長剥片を利用している。上部は裏面より調整剥離し、フェザーな剥片端部に表裏より小剥離がみられ搔器の刃部として使用している。

29　板状の石核である。三面に礫面を残しており、その礫面を打面としている。裏面は縦長の剥片をとり、正面は打面の位置を90度変えて横広の剥片をとっている。縁辺の一部に使用のための小剥離がみられ、残核を利器として活用したと思われる。

30　石核である。円礫の上面に打面を設ける剥離をし、裏面に礫面の円みを残し、その礫面に向かって打面を90度ずつ変えながら横広剥片を取っている。

31～34　縦長の剥片である。31は黒曜石製である。

35～37　機広の剥片である。

38～41　凹石である。39は表裏に凹みがみられる。

42～45　凹石と磨石を兼た石器である。

42は浅い凹みが2カ所正面部にみられ、右側片部に磨面がみられる。その後半分に折れた面にもスタンプ型の石器のような折れ面の擦り潰れがみられる。

43は横断面が三角形で全面が磨面であり、凹みは浅い。

44は使用のため石鹸形になった磨石で、表裏に凹みが長軸に沿って数カ所みられる。

45は横断面三角形の長細い棒状の礫を利用している。長軸の稜を磨面とし、上下面も磨面として利用し、平らな面も凹石として多目的に使用されている。最終的平面形は台形、断面形は六角形の形の整った形態に変形している。

45～51　棒状の重みのある横断面三角形を呈する大きめの礫を利用した磨石である。長軸の側縁の部分を磨面とする石器である。

縄文早期から前期前半に多くみられる磨石である（小林康男　1986)。ある程度の重みと、横断面三角形になる形態を必要としているようである。平坦な面を持つ石皿とセットになる磨石である。

52　横断面楕円の棒状の形態をしている礫の一部を磨面とした石器である。図正面下部の部分が磨かれて平になっている。

53～55　平坦な礫面の一面を磨面とした磨石である。

56・61　偏平な円礫を利用している。平坦な礫面の表裏を磨面とした磨石である。61は側縁に打痕もみられ敲石としても利用されている。

57～60・62　平坦な部分や側縁も磨面とした敲石である。57・59・62は円形の礫を利用している。58は楕円形の礫を利用しており半分欠損している。

63～67　石皿である。板状の厚みのある破砕礫を使用している。63は細い溝状の線が長軸方向に数十本認められる。図の下部の方に細い溝状の線が認められないのは重機により削られてしまったためである。骨骸器などの加工の際砥石として用いたのであろうか。その後石皿として用いられたらしく、その上が摩耗しており、溝状の線が浅くなっている。石皿のような凹みは認められず板状の石皿である。64は凹みがみられない石皿である。64・65は、46～51のような断面三角形磨石とセットと思われ、縄文時代早期前半に多くみられる板状の石皿と思われる。65～67は僅かに凹みが認められた。

表1　石器計測表

図版No.	遺物No.	石器名	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
1	B5-8	磨製石斧	蛇紋岩	3.5	2.7	0.8	5.0	頭部約1/3欠損
2	C7-27	石匙	白色頁岩	3.8	1.5	0.8	4.1	
3	C5-32	尖頭状石器	安山岩	4.7	2.2	1.1	7.7	基部に礫面を僅か残す
4	C6-15	石匙	安山岩	6.8	4.2	0.9	15.7	
5	C7-29	掻器	安山岩	3.3	2.7	0.7	6.4	
6	B5	打製石斧	安山岩	12.6	6.4	4.1	330.0	暗黄灰色土層出土
7	D8-9	掻器	安山岩	5.6	5.5	1.7	51.6	打製石斧刃部から転用
8	D8-9+C6-14	打製石斧	安山岩	9.7	5.5	1.9	87.7	頭部1/3欠損
9	C6-22	打製石斧未製品？	安山岩	14.3	6.6	4.0	270	
10	B6-8	打製石斧	安山岩	6.2	4.1	1.6	43.7	頭部と刃部2/3欠損
11	C5-2	打製石斧	安山岩	7.3	6.1	1.7	35.1	頭部と胴部2/3欠損
12	B5-31	掻器	安山岩	4.0	4.9	1.5	83.0	
13	C7-8	掻器	安山岩	16.6	7.6	2.2	232.0	
14	D6-12	掻器	安山岩	10.3	7.2	1.6	109.8	箆状石器に類似
15	C6-24	掻器	安山岩	7.2	3.5	1.3	36.3	
16	D7-11	掻器	安山岩	5.8	8.4	1.4	65.3	
17	D7-8	掻器	安山岩	7.8	11.6	2.0	152.4	
18	C6-24	掻器	安山岩	7.5	6.4	2.4	78.0	
19	C6-24	掻器	安山岩	7.6	6.5	1.6	100.6	刃部摩耗
20	C8-1	彫器？	安山岩	7.4	8.9	1.8	86.1	

21	B5-38	彫器	安山岩	6.2	8.6	2.2	102.0	
22	B5-12	二次調整剝離のある石器	安山岩	2.7	7.7	1.3	17.7	
23	B5-30	二次調整剝離のある石器	安山岩	5.6	8.8	1.7	51.1	
24	D7-9	二次調整剝離のある石器	安山岩	9.7	6.4	1.7	77.3	
25	B6-2	二次調整剝離のある石器	安山岩	6.4	9.7	2.2	96.5	
26	C6-30	二次調整剝離のある石器	安山岩	9.2	6.0	3.5	195.6	
27	C7-22	二次調整剝離のある石器	安山岩	7.2	5.6	2.5	90.4	
28	C7-19	掻器	安山岩	8.0	6.6	1.8	104.2	
29	D6-17	石核？	安山岩	4.8	9.7	2.6	116.6	
30	B5-1	石核	安山岩	6.8	8.9	4.5	300.9	
31	E9-4	剝片	黒曜石	6.9	3.1	1.6	26.2	打点部折れ
32	B5	剝片	安山岩	5.7	2.9	1.0	15.2	
33	D8-11	剝片	安山岩	7.5	3.9	1.3	36.9	
34	D7-9	剝片	安山岩	6.7	4.5	1.1	32.1	
35	B5	剝片	安山岩	4.1	5.0	1.2	21.3	図版No.6と同一母岩
36	B6-3	剝片	安山岩	5.1	7.4	1.8	56.8	
37	C6-20	剝片	安山岩	5.4	4.9	2.1	50.9	
38	D5-1	凹石	玄武岩	10.1	6.4	5.8	415.2	
39	B6-7	凹石	安山岩	7.4	6.7	5.2	260.3	
40	—	凹石	安山岩	7.8	8.2	5.9	368.5	1/2欠損
41	C5-5	凹石	安山岩	6.8	6.1	4.8	213.1	
42	B5-20B	凹・磨石	安山岩	8.0	7.1	6.4	362.6	1/2欠損、折れ面磨石として使用
43	C6-37	凹・磨石	安山岩	8.7	6.7	6.0	390.4	
44	B5-5	凹・磨石	安山岩	10.8	6.6	4.7	380.6	凹み表裏に3ヵ所ずつ、石敲型
45	C5-34	凹・磨石	安山岩	14.6	6.7	6.7	718.7	断面6角形
46	D6-31	磨石	石英斑岩	19.6	5.4	6.3	885.9	敲摺石
47	D7-5	磨石	安山岩	16.5	7.7	6.5	1036.2	敲摺石
48	B5-42	磨石	砂岩	18.2	9.9	7.3	1490.0	敲摺石
49	C5-35	磨石	砂岩	13.2	5.8	4.6	466.2	敲摺石
50	E9-2	磨石	砂岩	15.6	6.0	5.5	708.1	敲摺石
51	—	磨石	砂岩	15.6	7.8	5.9	867.3	敲摺石
52	B5-30	磨石	砂岩	14.0	4.0	2.4	172.0	砥石？
53	C6-35	磨石	安山岩	10.0	6.7	4.8	316.9	1/4欠損
54	C7-26	磨石	安山岩	9.5	5.4	6.0	487.8	
55	D7-4	磨石	安山岩	8.3	7.7	5.1	435.1	
56	E8-1	磨石	安山岩	10.2	9.5	3.8	538.7	
57	B5-16	磨石	安山岩	9.0	9.2	6.5	630.2	
58	B7-1	磨石	花崗斑岩	7.9	11.4	5.4	362.0	1/2欠損
59	C7-24	磨石	安山岩	7.3	6.4	4.8	299.6	
60	C6-36	磨石	安山岩	11.0	7.1	4.3	445.0	
61	O6-30	磨・敲石	安山岩	9.5	9.8	4.6	607.9	
62	B5-3	磨石	安山岩	8.8	8.2	4.9	530.3	
63	B5-20A	石皿	安山岩	19.8	16.2	6.3	2500.0	溝状条線有。板状。
64	B5-33	石皿	安山岩	27.5	16.4	8.0	5200.0	板状
65	S6-39	石皿	安山岩	26.6	26.6	6.9	7550.0	
66	C5-37	石皿	安山岩	36.8	35.3	6.2	7500.0	
67	C6-39	石皿	安山岩	34.8	27.9	5.5	7500.0	

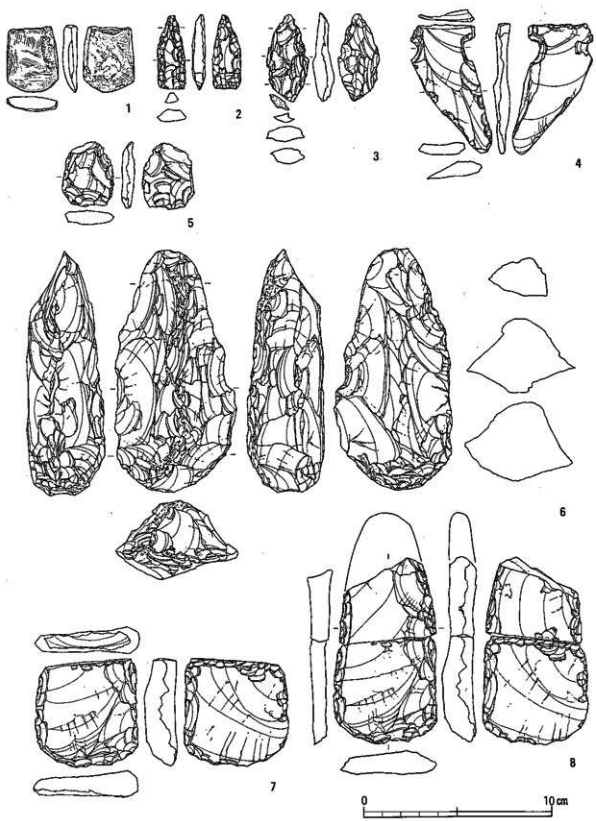


図7　縄文時代石器実測図1　1:2

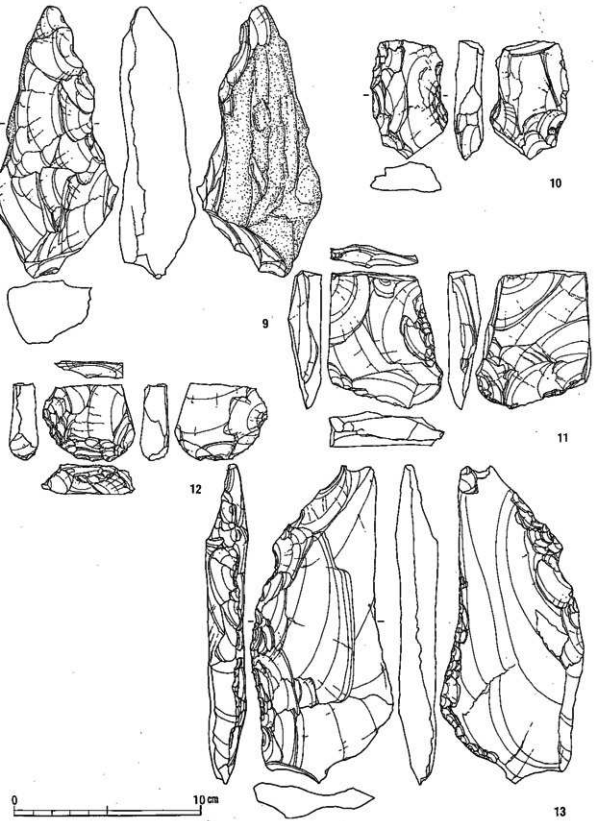


図8　縄文時代石器実測図2　1:2

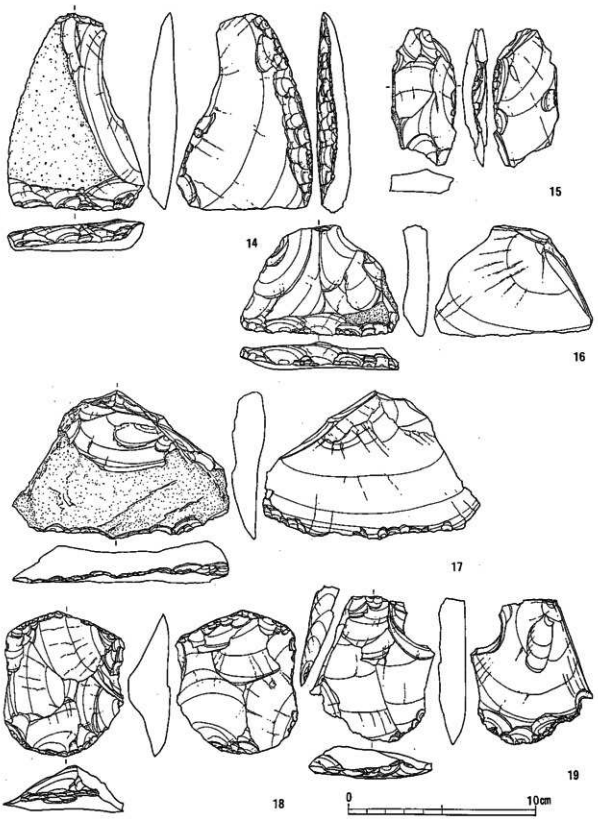


図9　縄文時代石器実測図3　1:2

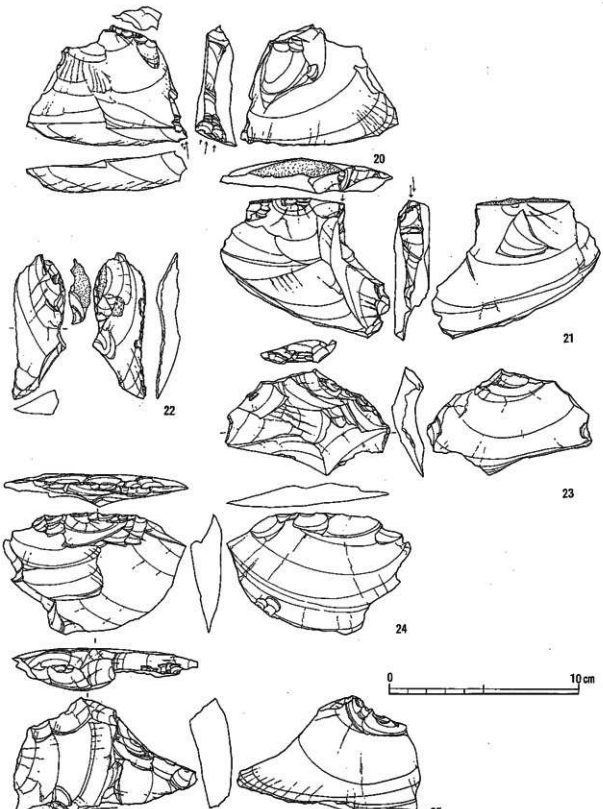


図10　縄文時代石器実測図4　1:2

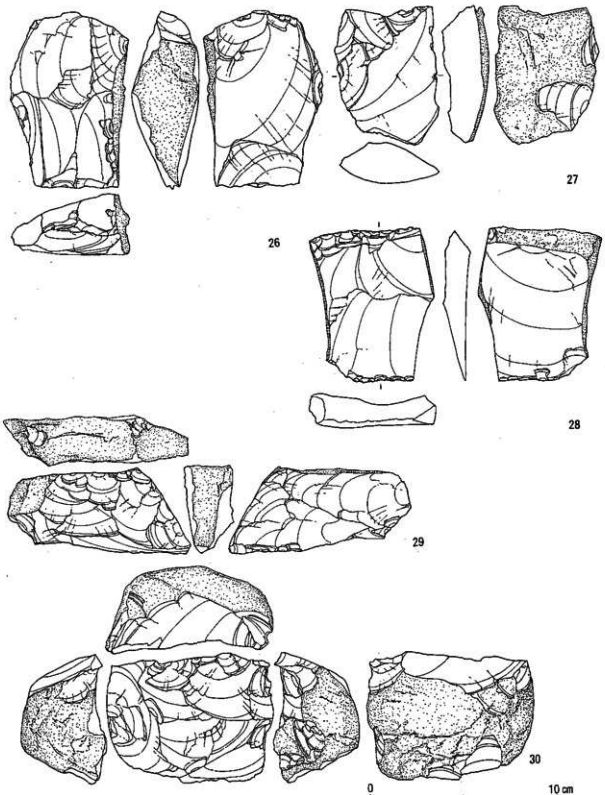


図11　縄文時代石器実測図5　1:2

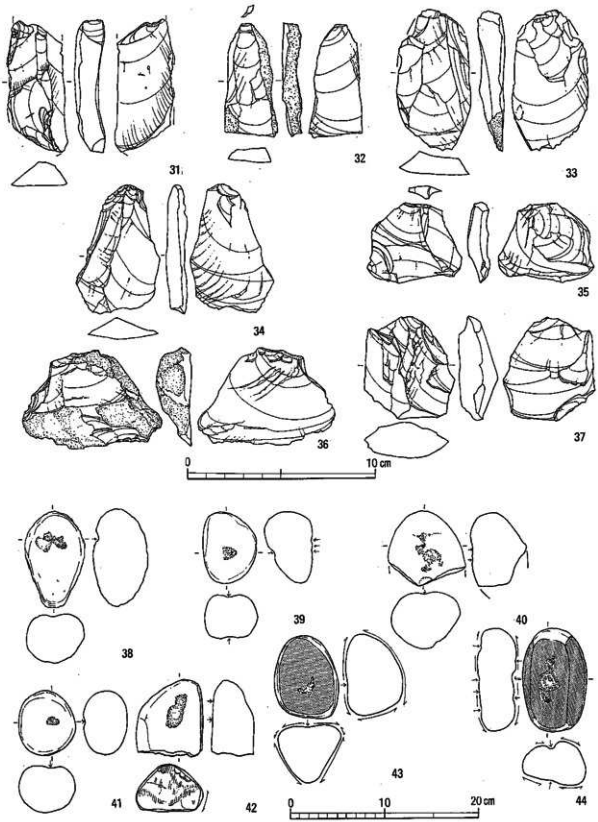


図12　縄文時代石器実測図6　31～37 1:2　38～44 1:4

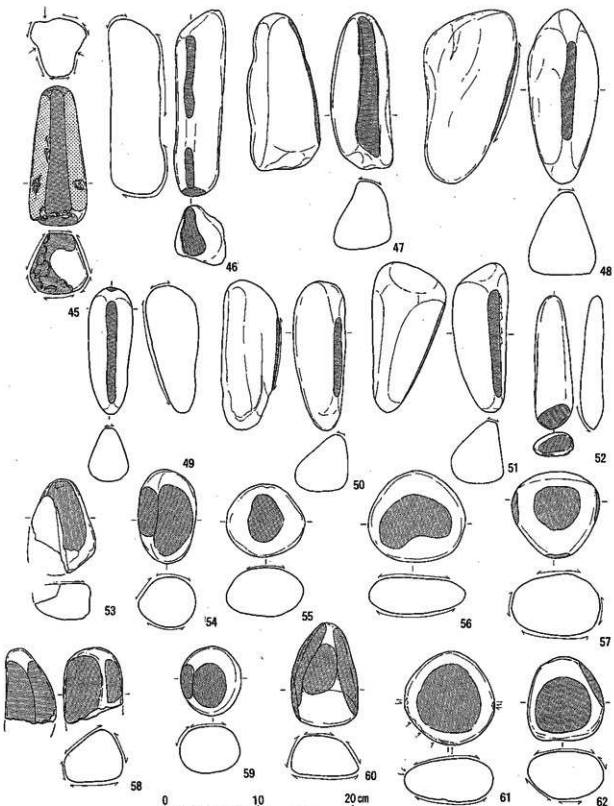


図13　縄文時代石器実測図7　1:4

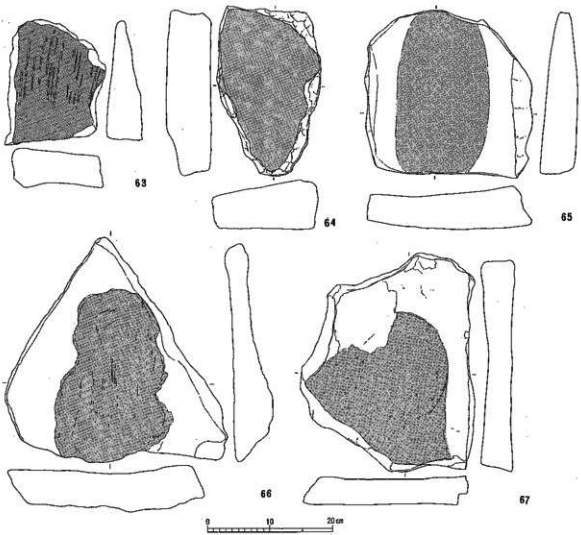


図14　縄文時代石器実測図８　1:6

第3章　結　　語

従来、鳴沢頭遺跡として扱われていた範囲は、中堤深奥部より湧出する水流によって形成された谷地状地形をはさんだ両岸にまたがるきわめて広い部分であった。今回、鳴沢頭Ⅰ・Ⅱ遺跡に分離した理由は出土土器の様相に大きな相違を認めたからとしているが、本来的にいうと谷地を挟んで存在するだけでも少なくともA・B地点として峻別する必要があるといえよう。そういう意味では、今回の分離は当然といえる。

今回出土した土器は、縄文草創期、早期、前期、中期と幅広い年代にわたっているが、特徴的なのは草創期の土器である。従来、飯山地方の草創期の土器は、小佐原・三枚原・北竜湖等にみられるように主として草創期末の表裏縄文土器であった。それが今回、新潟県室谷洞窟や山形県日向洞窟出土の押圧縄文に類似した土器が出土した。この種の土器については、今後更に資料の集積と研究を進めてゆかねばならないであろう。

第Ⅱ類土器については、草創期の様相をもちながらこれといったきめ手もなく時期不詳とせざるを得なかった。今後、類例の増加が、この種の土器に年代時位置をあたえてくれるだろう。

押型文土器は、温井台地の各地で出土している。本遺跡でも7点ほど出土した。飯山地方の押型文土器の出土状況は、遺構内からまとまって発見されることはなく、本遺跡のように散発的である。従って、押型文土器の文化内容に迫れないのが実情である。

早期では、押型文土器のほかに貝殻腹縁文土器、条痕文土器が出土した。これらの土器については、当地方では出土例が少なく貴重な資料といえよう。また、東北地方前期前半の土器と関係を有する土器も出土しており、縄文前期土器研究の上に重要な示唆をあたえてくれた。

出土土器は、年代的にも幅があり、それぞれが当地方の縄文土器研究にとって欠かすことのできない貴重な資料である。ただ残念なことは、遺跡のもつ特殊性故に量的にいたって少ないことと、遺構内出土の土器でないことである。

第４編　カササギ野池遺跡

第1章　遺跡の概要

1　遺跡の概要

カササギ野池遺跡は、温井から桑名川へ下る道から大原グランドで分岐して下る道の北側、「大谷地」と「カササギ谷地」(和水池)の南に広がる遺跡である。温井の北条幸作氏が発見された遺跡で、氏の著書『考古学上から見たわが郷土』によれば、谷地の周囲の畑から石鏃・糸切り底の土器が採集されたと記されている。その後の分布調査でも縄文土器と思われる破片が採集されている。

今回の調査は和水池の南の丘陵上で、調査の結果、縄文時代草創期の有舌尖頭器、爪形文土器、前期縄文土器・石器、平安時代の土器などが出土した。ここも当初遺跡の可能性は低いと考えていた所であったが、予想以上の貴重な遺物が出土し、重要な遺跡となった。

2　調査方法

(1) 調査地点（図1）

調査地点は南北に延びる尾根の南の基部にあたり、約50m四方の平坦面をなしている。西南は急斜の丘

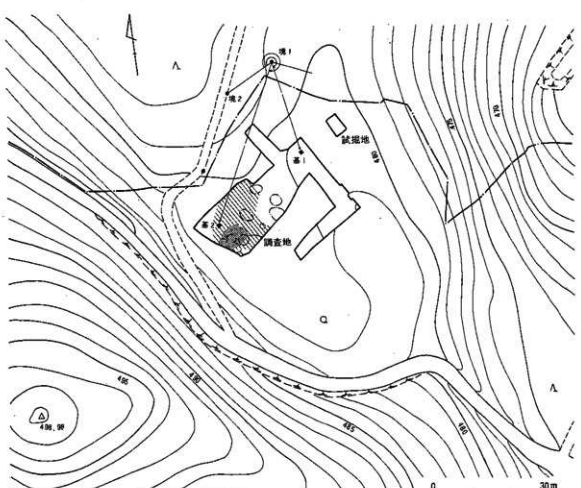


図1　調査地周辺地形　1:1000

陵にさえぎられる。平坦面の西南部は、東南から西北へ開く小さな谷地となっている。この谷地は東南つまり奥の方が標高が低く、大雨等があれば自然の水溜りが出来るであろう。

調査地はこの平坦部の東北側で現況は山林であったが、ある時期に畑地として利用された痕跡が残っていた。

(2) 調査区の設定（図２）

調査区内の地区割りについては５ｍのグリット法とし、表土除去後に調査地に合わせて5ｍ方眼を組み、東南からＡ・Ｂ・Ｃ……、東北から１・２・３……と呼称した。そしてＧ・Ｆ区間ラインと１・２区間ラインの交点と、Ｇ・Ｆ区間ラインと７・８区間ラインの交点をそれぞれ基準１・２とし、工事用座標の出ている開発範囲境界杭から方向と距離を測定した。基準に用いた境界杭は調査地北の２点で図１中境１にトランシットを据え、境２を視準として基１・基２の角度を測った。測定値は以下のとおり。

境１と基１の距離　25.10ｍ　　∠境２・境１・基１　285°44′10″

境１と基２の距離　45.50ｍ　　∠境２・境１・基２　323°20′50″

レベルは工事用ベンチマーク（Ｌ＝487.514ｍ）を基準とした。

(3) 調査方法

調査方法は、まず重機による表土除去を幅４ｍ程行い、ジョレン等で遺構・遺物の確認をした後、遺物の出土した所を中心に重機で調査地を拡張、遺構・遺物の検出を行った。遺構・遺物の検出は黒色土層の下層から掘り始め、黄色粘質土層（地山）まで掘り下げた。また、旧石器の有無の確認のため黄色粘質土を約１ｍ幅で深さ30cmの試掘杭を入れて掘り下げた。

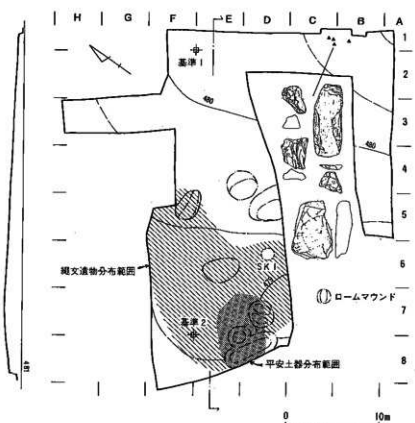


図２　調査地全体図　1:400

遺物のとり上げは、原則として1点ずつ地点と高さを測ってとり上げた。とり上げ時の注記は便宜的に調査地東北部を北、同西南部を西として、西1(N1)、北1(K1)と番号をふった。

図面の作成は、全体図と遺物分布図と兼ねて60分の1平板図を作成し、遺物の出土状況に応じて微細図を作成した。写真は白黒とカラースライドを35mmフィルムで適宜撮影した。

3 層　序(図4)

調査地内の層序は、尾根稜線部では表土直下が黄色粘質土であり、調査地南西部の谷地では上から暗灰褐色土(表土約0.3m)、黒色土(約0.3~0.4m)、暗黄灰色土(約0.2~0.3m)、暗灰色土(約0.3m)、黄色粘質土(地山)となる。飯山地方の遺跡の多くは黒色土の下が黄色粘質土層で両者の間に漸移層があるのが普通だが、当遺跡では漸移層に相当するのが暗灰色土層で、その上にさらに暗黄灰色土層がある。地山の黄色粘質土は上層がソフトで約20cm厚、その下にやや硬い層があり、その下に赤色・青色粒を含む黄褐色粘質土層がある。

遺物は、平安時代の土器が黒色土の下層で出土し、有舌尖頭器・縄文土器は暗黄灰色土から出土している。

第2章　遺　物

1　遺物出土状況（図3・図4）

(1)　縄文時代

縄文時代の遺物は調査地東北隅のB・C1区と、調査地南西部の谷地D～F5～8区で出土している。

B・C1区では磨製石斧などの石器が数点、黄色粘質土の上面から出土している（図2）。

D～F5～8区では、土器・石器が散在的に出土している。土器は前期縄文土器がF6区を中心に分布しているほかに、石英粒を多量に含む無文土器がD6区に5片まとまって出土している。爪形文土器は小片がSK1と呼称した土器だまりから数片が出土している。

SK1（図3）はD6区にあって、前期の深鉢（図6－44）の破片が集中していた所で、明確な掘り込み等は確認できなかったが便宜的にSK1と呼称しておいた。出土した深鉢の破片は同一個体と考えられるが、一個体分には足りない。爪形文土器はこのSK1から小片が数点出土しているが、集中しておらず、混入品の可能性が高い。また、1点のみ縄文土器（図8－18）片が最下から出土している。このSK1が検出されたのは縄文土器包含層である暗黄灰色土を掘り下げている途中であり、暗黄灰色土中に土器が集中していた。

また、縄文施文の土器のうちでも薄手で古相を呈するもの（図5　5～9）は有舌尖頭器の近くから3点が出土している。

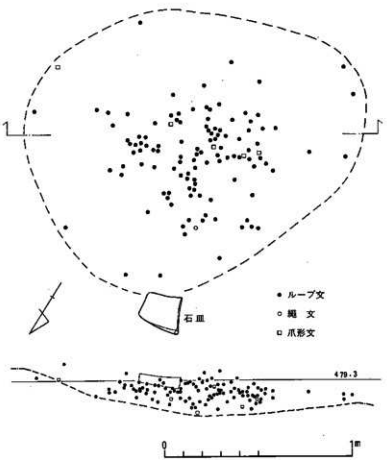


図3　SK1遺物分布図　1:20

石器は、有舌尖頭器が遺物出土地中央Ｅ７区で２点出土。石匙・鏃・凹石・磨石は前期縄文土器の集中するＦ６区の近くから出土している感がある。またＦ６区東南隅に黒曜石のチップが集中している所があった。

これらの縄文時代の遺物は黒色土の下層である暗黄灰色土層から出土しているが、有舌尖頭器も前期の土器も出土層位は同じである。

(2) 平安時代（図９）

平安時代の遺物は、Ｄ・Ｅ７・８区で土師器の甕が黒色土下層から出土している。甕は数個体あると考えられるが、出土量は少ない。出土層はほぼ一定しており、上下10cm以内である。また出土層の所々に炭の集中が所が認められた。炭は小粒で約0.5ｍ範囲内にかたまって、数か所あったが写真撮影のみで図化していない。

２　縄文時代の土器

第１類から第５類まで縄文時代の土器である。

第１類　爪形文？（図５　１～４）

１　色調は暗黄褐色、内面茶褐色。胎土は砂粒を含んでおりやや脆い。器厚は6～8㎜で底部近い破片と思われる。文様は爪形文の大きさが6×1㎜で、ほぼ等間隔に左から右へ施され、それが破片全体に数段施文されている。

２　赤黄褐色の色調で、胎土は小石や細かな砂粒子を多く含み、やや脆い。内面は指頭痕を残す。底部付近の破片と思われ、やや屈曲しており、薄い平底か丸底の器形ではないかと思われる。文様は爪形文で右から左に施文しており、それが数段施文されている。

３・４　同一個体である。色調は暗茶褐色。胎土は長石のような白色粒子を多く含み、やや脆い。器厚は５㎜で薄い。内面は丁寧に整形されているが、外面の無文部は白色粒子が表面に出てきており、ざらざらした感じである。文様は口縁直下に一列左から右へ施文されている。３・４の文様は、爪形が三日月様に湾曲せず、直線的なものであり、ややギザギザしている。爪形文という名称には疑問を感じるが、薄い石片の様なもので施文したものと思われる。

第１類土器は、４片とも小破片であり、時期判定は困難である。この４片は前期前半のループ文土器と同じ遺構内より出土している。遺構内の土器は、この４片と、２と同一個体と思われる表面が摩滅した２片[注2]と、繊維の混入した縄文の１片を除けばすべて同一個体のループ文である。ループ文は繊維が混入しているが、第１群の土器は繊維の混入がなく、器厚も5～6㎜と薄い。ループと第１群土器は非常に異質である。前期前半土器群の遺構の覆土に、草創期の爪形文土器が混入していた可能性も考えられよう。[執2]

第２類　薄手縄文（図５　５～９）

５－８　厚さ5～6㎜の薄手の内外面灰黒色の土器である。胎土は粒子が細かく、白い細かな長石の様な粒子が多く含まれている。焼成は良く、堅い。文様は６・８は０段多条の単節縄文で、５は０段多条の単節羽状縄文で、７は単節縄文である。

９　厚さ6～8㎜の薄手である。裏面に指頭痕があるために、厚みが一定でない。胎土は白色の長石と思われる粗い粒子が非常に多く、色調は内外面が灰黒色で、断面が白灰褐色の堅めの土器である。文様は０段多条の単節縄文である。

第２類の土器は堅い薄手の黒色の土器群である。鳴沢頭Ⅱ遺跡の薄手縄文の土器と類似点を持つ。小破片であるので土器全体の文様や器形が明確にならず、今後の類例を待ちたい。

第３類　繊維混入縄文（図５　10～32）

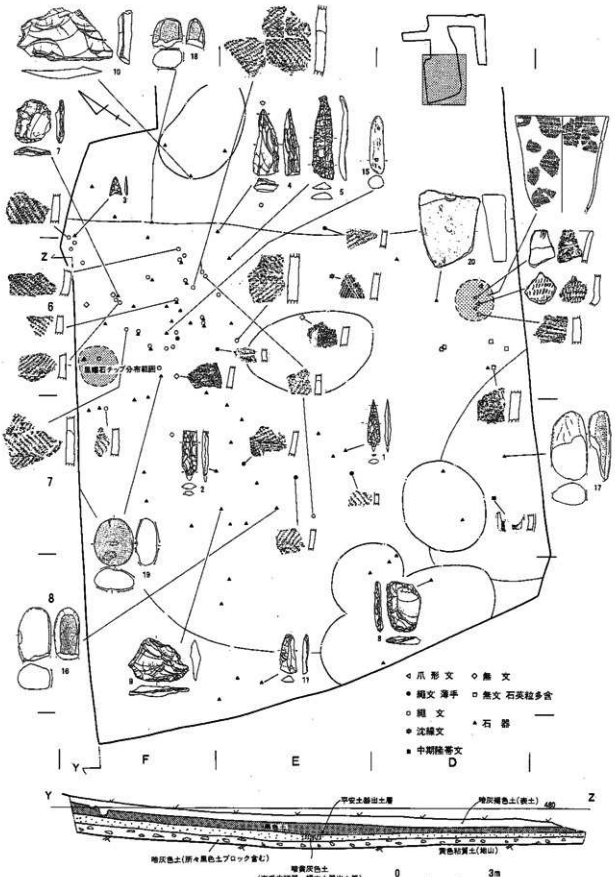


図4　主要部遺物分布図　1:120

10・14・19・21　色調が灰褐色～黒褐色で、胎土は長石のような白色の粒子が多く含まれている。表面は少し摩滅している。少々薄手の土器である。文様は単節縄文である。類似しているが同一個体ではない。

11　7㎜の器厚で、繊維の混入量が多く、脆い。文様は摩滅しているが、単節縄文と思われる。色調は暗茶褐色で、断面が黒色である。

12　7～8㎜の器厚である。色調は外面赤褐色、内面暗褐色、断面黒色である。非常に脆く、文様が摩滅している。単節縄文と思われる。

13・17　色調は暗褐色。胎土は砂粒子が多い。文様の縄文の部分は摩滅している。単節縄文と思われる。内面は丁寧に整形されている。

15　色調赤褐色。長石や雲母を含む薄手の破片である。繊維量は少ない。文様の縄文は摩滅している。単節縄文と思われる。

16　色調黄褐色。小石を含む胎土である。文様は単節縄文である。.

18　色調は茶褐色。胎土は砂粒子が多く含まれている。繊維量は多い。文様は表面が摩滅している。０段多条単節縄文のようにも思われるが、縄文末端部がまちまちで、自縄自巻の押圧縄文のようにもみえる。回転縄文か押圧縄文であるのか不明である。内面は良く整形されている。ＳＫ１の底面より出土している。

20　色調は暗黄褐色。胎土は小石と砂粒子を多く含む。断面は灰黒色で繊維が多い。文様の縄文は摩滅している。単節縄文と思われる。内面は丁寧に整形されている。

22　色調は内外面とも黒灰色。焼成は堅くしまっている。胎土は長石と思われる白い粒子が多く含まれている。文様は単節の羽状縄文である。

23～27　色調は外面が赤褐色～茶褐色、内面から断面までが黒褐色。胎土に茶色のパミスのような粒子混入しており、粗い砂粒子が多く、繊維の量も多い。23・26・27の内面は丁寧に整形されているが、24・25の内面は砂粒子が表面にみえる感じで整形されている。縄文の文様は摩滅しており擦りがはっきりせず、明確ではないが、胎土等からほぼ同一の個体のように思われる。文様は単節縄文と思われる。

28・29　同一の個体である。色調は黄褐色。胎土は繊維が多く、細かな砂粒子が含まれている。29など摩滅が激しく、はっきりしないが、単節の羽状縄文と思われる。

30　色調は赤茶褐色。断面黒色。繊維が多く含まれている。文様は単節の羽状縄文である。

31　色調は灰茶褐色。断面黒色。胎土は小石や粗い砂粒子が含まれている。文様は菱形になるような単節の羽状縄文である。

32　色調は赤茶褐色。断面黒色。胎土は非常に繊維が含まれており、脆く、外面の文様はほとんど摩滅しており、縄文の条が微かに解る程度である。羽状の縄文と思われる。

第３類は繊維を含む縄文土器であり、前期前半の関山式～黒浜式併行期の土器と思われる。18に関しては、縄文が回転なのか押圧なのかはっきりせず、時期不詳である。

第４類　無　文（図５　33－41）

33　6㎜の薄い器厚である。繊維が混入されており非常に脆い。胎土細かな長石が多い。色調は暗茶褐色。断面黒色である。

34　6㎜の薄い無文である。胎土は緻密な砂粒子で雲母も多い。焼成は非常に良く、色調は外面茶褐色、内面黒色である。内面は非常に丁寧に整形されている。

35　白黄褐色の無文土器。胎土は白色の長石のような粒子が多い。焼成は良好である。

36～41　色調は赤褐色。胎土は金雲母を多く含む砂粒子を多く混入させており、非常に脆い。同一個体である。

第４類の無文土器は時期不詳である。

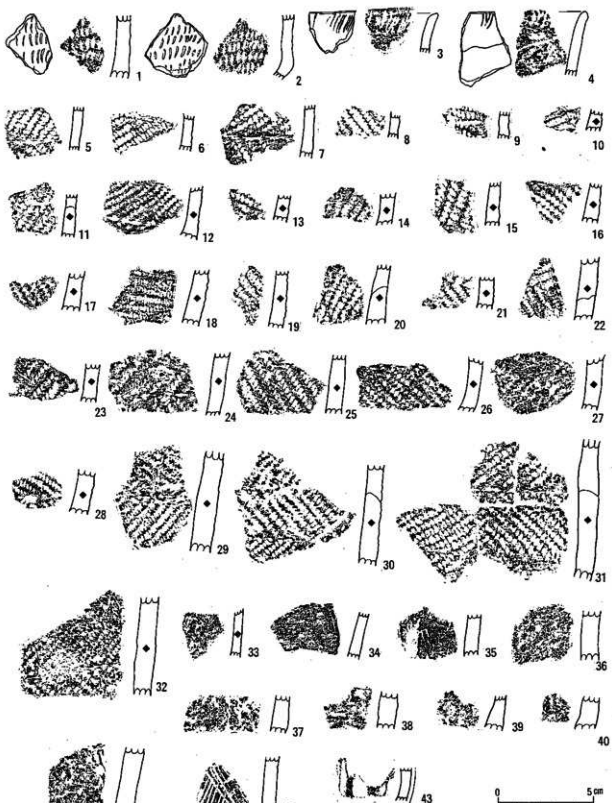


図5　縄文時代土器実測図1　1:2　　◆は繊維混入

第5類　ループ文（図6　44）

44　色調黄褐色。胎土は多く繊維を含み小石混じりで砂粒子が多く、非常に脆い。底部はないが、口径27.8㎝の口縁部がやや開き加減で胴部下がやや膨らみを持つ、深鉢と思われる。地文にループ文を口縁部より底部付近まで充填させ、その後、口縁部直下に3～4条の角押し文を横位施文している。

第5類のループ文土器は、縄文前期前半の関山式期併行の土器と思われる。

第6類　その他の土器（図5　42・43）

42　色調は黄褐色。胎土は砂粒子を多く含み、焼成のやや良好な破片である。文様は、半截竹管による平行沈線文で施文している。小さな破片のため、文様や器形の詳細は不明であるが、前期後半の深鉢胴部破片と思われる。

43　色調は黄茶褐色。胎土は砂粒子を多く含む。焼成良好な破片である。2本の隆帯が平行に縦位に張り付けられその間に太い沈線が施されている。中期の深鉢胴部の破片と思われる。

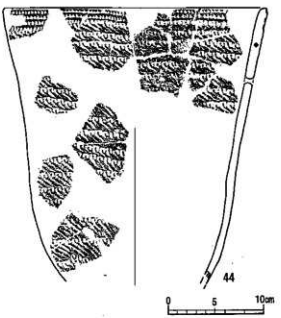


図6　縄文時代土器実測図2　1：4

注1　谷口康裕氏に実見していただき草創期の爪形文とするには疑問があるとのご教示をいただいている。

注2　外面が剥がれており文様が解らない破片であるが、胎土など2に類似しており、器形がやはり屈曲している。

3　縄文時代の石器（図7・8）

当遺跡の石器は縄文時代の石器と思われる。

1・2　安山岩製の有舌尖頭器である。2点とも暗黄灰色土層より出土している。1は先端と基部を僅か欠損した長さ5㎝程の石器である。基部が若干幅広な形状で返しは少ない。剥離が整っており、縁辺が少々鋸状になっている。2は先端部が約半分欠損しており、基部も僅かに欠損した細身形態の有舌尖頭器である。1に比べ剥離が大まかであるが形状は整っている。

1は幅が4.8㎜で細身であり、返しがある形態は、長野県仲町遺跡第2土坑（埼玉考古学会　1986）の有舌尖頭器に類似するものと思われる。仲町遺跡は爪形文土器など縄文時代草創期の土器群を出土している遺跡である。1・2の有舌尖頭器も仲町遺跡とほぼ同時期の所産と思われる。

3　安山岩製の凹器の石鏃である。ほぼ二等辺三角形の形状を呈している。主要剥離面を残し、縁辺の小剥離のみで形を調整している。

はっきりした石鏃の時期は解らないが、繊維土器の近辺から出土しており前期の石鏃の可能性がある。

4　肉厚な剥片を利用し、両側縁に剥離を加え、先端部の尖った石器に仕上げている尖頭状の石器である。基部は欠損している。一側縁の剥離は表裏より施されている。その部分が掻器の刃部として調整された可能性もあり、先端部を錐として利用した可能性もある。

5　硬質頁岩製の縦形石匙である。縦長の剥片を利用している。正面の剥離は非常に整った押圧剥離で調整している。正面左側縁より右側縁の方の押圧剥離が短いという片寄りがみられる。裏面は、主要剥離

面をほとんど残し、その側縁部には小剥離痕がみられる。両側辺は直線的であり、図の下部縁辺は傾斜している。摘みの部分は両側縁に抉りをいれ、方形の摘みにしている。東北地方で出土する“松原型”縦形石匙（秦　1991）と類似する。石材も硬質の良質な頁岩であり、早期末より前期前半の東北地方よりの搬入品と思われる。

6　安山岩製の磨製石斧である。1・2の有舌尖頭器より東方向へ30m離れた地点の暗黄灰色土土層より出土した。安山岩製で風化している。両側面と頭部に剥離面を残しているが全体的によく磨かれている。刃部は直線的で、やや片刃である。頭部はやや曲がっている。

丸鑿の局部磨製石斧より、刃部角度がやや緩やかであり、刃部が直線的である。

6の磨製石斧は原礫面を利用して、その周縁部に剥離を加え、刃部や側縁部を磨いたものではないかと思われる。丸鑿石斧の草創期前半期より後出期の磨製石斧ではないかと思われる。

7　横広の剥片の周縁に小さな剥離を施した掻器である。図の上部から右側縁にかけての剥離は裏面より施し、右側縁から右下部にかけては正面より剥離している。左下部は裏面より、左側縁は正面より小剥離が施されている。

8　横広剥片を用いている。図の左側縁に正面より細かく剥離し、その側縁から下部にかけて、細かく規則的に裏面より剥離を施している。側縁部を刃部とする掻器と思われる。その側縁部が若干摩耗している。

9　横広剥片の打面部を取り除き、図の下部縁辺に細かな規則的な剥離を施した掻器と思われる。

10　横広剥片の一側縁に小剥離を正面より施した掻器である。もう一方の側縁にも狭い範囲に少し抉りを持つ小剥離がみられる。

11　縦長剥片の打面部の回りの側縁に調整剥離を施した剥片である。剥片端部が欠損している。

12　打面部に小剥離を施した横広な薄い剥片である。

13　正面に礫面を残す分厚な剥片である。剥片端部に剥離痕がみられる。

14　分厚な剥片である。

15　細長い楕円の礫を利用した敲打器である。剥片に小剥離を加える際に剥片の縁辺を固めの石に押し当てると、ギザギザした細い傷が生じる。そのような痕跡がこの石器の一部にみられる。

16～18　磨石の欠損品である。16は楕円形の礫の一側縁を使用している。17は楕円形の礫の二側縁を使用した磨石である。18は石鹸形で、ほぼ全面を磨石として使用している。

19　磨石と凹石を兼ねた円形の石器である。磨面と凹面は両面に認められ、凹部は表裏一ずつである。

20　板状の石皿である。使用による凹面がなく、板状破砕礫を利用している。

21　厚い方形の礫を半截し、板状にした面を使用面としている石皿の欠損品である。

4　平安時代の土器（図10）

平安時代の土器として甕が数個体ある。

1は今回出土品の中では長い口縁部をもつもので1片のみ出土。内外面ともハケ調整され、外面はハケののちナデ。口径20.8cm。

2～4は同一個体と考えている。短く外方にやや屈曲して開く口縁部と長胴の体部をもち、平底である。細かいハケ調整が全面に施されている。口径18.8cm。破片は多い。

5・6は同一個体と考えている。口縁部の形態は2とよく似ている。体部は砲弾形で丸底と思われる。口縁部内外面は細かいハケ、体部外面はタタキの後ヘラケズリ。体部内面下半には同心円文のあて具痕が残り、上半はハケ。口径19.6cm。破片は多い。

7は口縁端部がやや外に肥厚するやや小形のもので、口径13.2cm。内外面ともにハケ調整される。1片のみ。

これらの甕は昨年度発掘したトトノ池南遺跡で出土しているものとよく似ているので同様の10世紀代を中心とした年代と考えている。

表1 石器計測表

図版No.	遺物No.	石器名	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	N147	有舌尖頭器	安山岩	4.8	1.4	0.6	3.1	先端と基部を僅かに欠損
2	N68	有舌尖頭器	安山岩	4.7	1.6	0.7	6.3	先端1/3と基部僅かに欠損
3	N106	石鏃	安山岩	2.0	1.3	0.3	0.5	
4	N97	尖頭状石器	安山岩	6.9	7.7	1.7	30.7	基部欠損
5	N98	石匙	硬質頁岩	8.7	2.4	0.8	13.6	縦型。松原型。
6	K2	磨製石斧	安山岩	15.2	6.0	3.3	512.6	丸鑿型？
7	N114	掻器	安山岩	4.5	3.9	0.9	14.7	
8	N2	掻器	安山岩	5.3	3.6	0.7	18.5	刃部摩耗
9	N66	掻器	安山岩	4.6	6.4	1.2	25.1	
10	N86	二次調整剝離のある石器	安山岩	5.6	10.4	1.4	71.7	
11	N172	二次調整剝離のある石器	黒曜石	4.1	1.7	0.7	3.5	
12	K1	二次調整剝離のある石器	安山岩	4.5	4.8	1.0	17.1	
13	K7	剝片	安山岩	6.0	5.4	3.1	84.6	
14	K3	剝片	安山岩	6.7	5.6	3.0	85.7	
15	N74	敲打痕のある石器	砂岩	12.2	3.3	7.8	117.8	
16	N53	磨石	安山岩	11.3	7.0	5.3	656.1	1/6欠損
17	N153	磨石	安山岩	14.4	7.9	4.7	527.9	1/4欠損
18	N103	磨石	安山岩	6.2	6.2	4.0	178.4	石鹸型。1/2欠損
19	N136	凹・磨石	安山岩	9.9	8.3	4.4	442.8	
20	SK1	石皿	安山岩	24.1	20.0	7.6	5200.0	板状
21	K4	石皿	安山岩	25.7	17.2	7.9	4500.0	

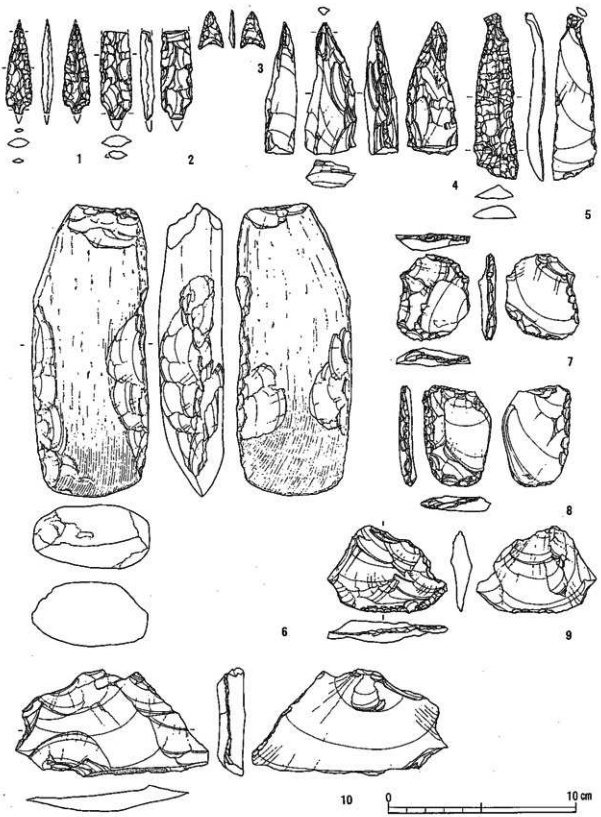


図7　縄文時代石器実測図1　1:2

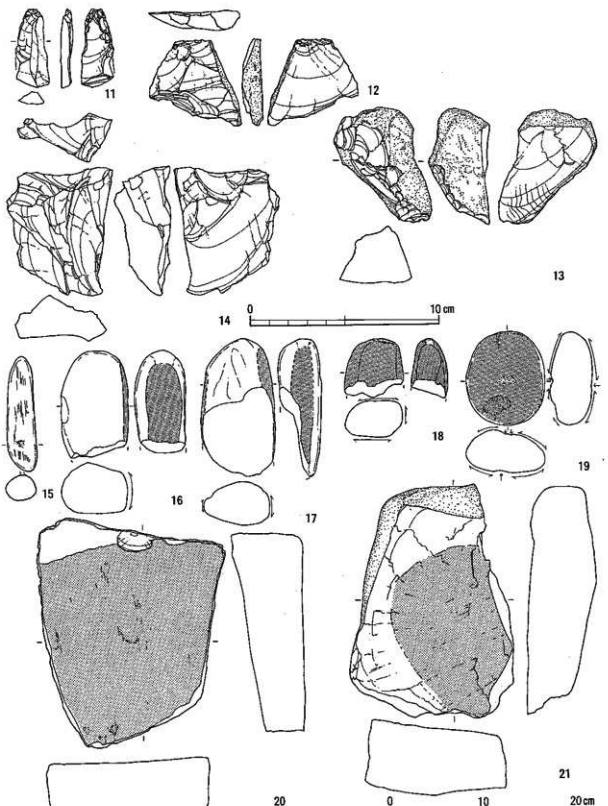


図8　縄文時代石器実測図2　11～14 1:2　15～21 1:4

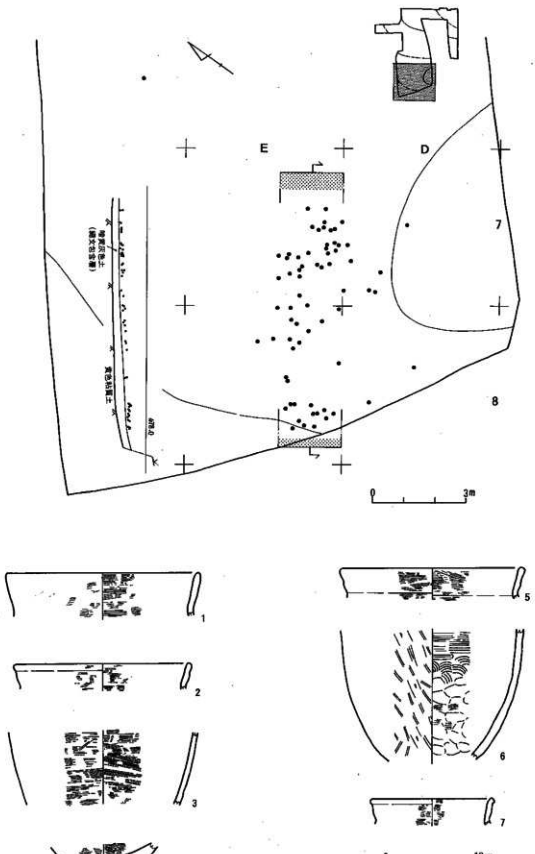


図9　平安時代土器分布図　1:120

第3章　結　語

遺跡は、鍋倉山の溶岩流によって形成された「鍋倉山第五溶岩台地」上にある。この種の地形の特徴は、微高地とそれにともなう凹地が随所に存在することである。そして、凹地には湧水があり、微高地上あるいは湧水の近辺に必ずといってよいほど遺跡がある。本遺跡も「カササギの谷地」と呼称されている低湿地南方の微高地上にある。

低湿地周辺の畑から石鏃、土師器破片が採集されており、縄文時代、平安時代の遺跡としてごく一部の人達に知られているのみであった。従って、今回の調査でも縄文時代前期か平安時代の遺物・遺構が主体であろうと考えていた。有舌尖頭器や爪形文土器を中心とする縄文草創期の遺物が出土するなど夢想だにしなかったのである。ただ爪形文土器については、縄文前期の遺構内で縄文前期土器とともに出土しており、当初誰れもが気付かなかったのである。それが整理中において注目され、俄然注目を集めたのである。ただ出土した爪形文土器は、数量的にも数片であり、しかも小破片であって軽々しく縄文草創期の爪形文土器であると断定しかねる面をもっていることも事実である。しかしながら、今迄飯山地方の縄文草創期の土器は、表裏縄文土器だけであり有舌尖頭器の出土とともに出土した爪形文土器は私達に縄文草創期研究への熱意を大きく駆りたてたこともまた否定できない事実である。本遺跡出土の爪形文土器が果して、縄文草創期の土器であるか否かは、今後の類例の増加と研究の進展にまつところが多い。いずれにしても鳴沢頭Ⅱ遺跡における室谷洞穴出土土器の類似土器とともに飯山地方の縄文草創期の究明に大きな課題を私達にあたえたことは否定できない事実である。

縄文前期について触れるならば、東北地方との関連を示す縦形石匙の出土が重要であろう。この種の石器は北竜湖遺跡からも出土しており、鳴沢頭Ⅱ遺跡出土の東北地方との関連を有する縄文前期前半の土器とともに当地方の縄文早期末から縄文前期前半の研究にとってきわめて貴重な資料といえよう。

第5編　休場遺跡

第1章　遺跡の概要

1　遺跡の概要

休場遺跡はカササギ野池遺跡から一段下った所にある。古く休場谷地といわれて今は水田となっている湿地の南～東に広がる遺跡である。この遺跡も温井の北条幸作氏が発見した遺跡で、打製石斧が採集されている。

今回の発掘調査は遺跡の西南部にあたり、おとし穴と考えられている土坑2基、縄文時代早期と前期の遺物が両掌に一杯程度出土している。

2　調査方法

(1) 調査地点（図1）

今回の調査対象地は西から東へゆるやかに傾斜する丘陵斜面である。斜面は東へゆくに従って傾斜がゆるくなり小さな谷地を経てやや広い頂部平坦面をもつ尾根へと続く。北は水田に面している。調査は丘陵斜面に2か所の試掘を行い、最も平坦な斜面下端に調査区を設定した。また当初開発範囲に含まれていなかったが、道路予定地が調査地の東にあるのでそこも1か所試掘を行い遺跡の有無を確かめた。

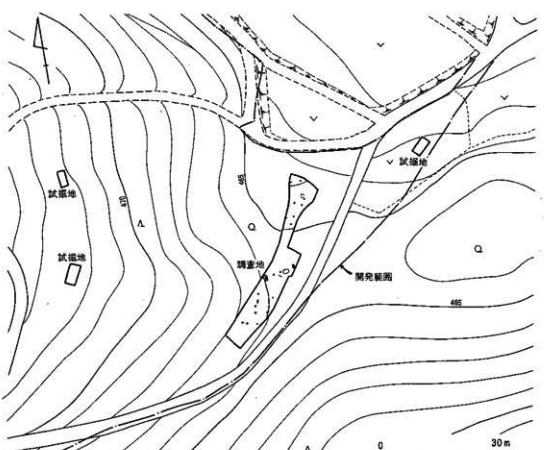


図1　調査地区周辺地形　1:1000

(2) 調査区の設定（図２）

調査区内の地区割りについては５ｍのグリッド法とし、農地開発用工事メッシュを基準に５ｍ方眼を組み東から西へＡ・Ｂ・Ｃ……、北から南へ１・２・３……と呼称した。

基準１・２・３ともに６工区工事用メッシュの35ライン（Ｘ＝－5640）上で、基準１は17ライン（Ｙ＝106380）との、基準２は16ライン（Ｙ＝106360）との、基準３は15ライン（Ｙ＝106340）との交点である。

レベルは工事用ベンチマークを基準とした。

(3) 調査方法

調査方法は、まず重機による表土除去を行った。この際黒色土の中間まで重機で除去した。その後、ジョレン・移植ゴテ等で慎重に地山面まで遺構・遺物の検出を行った。また旧石器の有無を確認するため地山を一部断ち割った。遺物のとり上げは原則として１点ずつ番号をつけて地点と高さを測ってとり上げた。図面の作成は遺物分布図と全体図をかねて100分の１平板図を作成、遺構は20分の１実測図を作成した。写真撮影は白黒とカラースライドを35㎜フィルムで適宜撮影した。

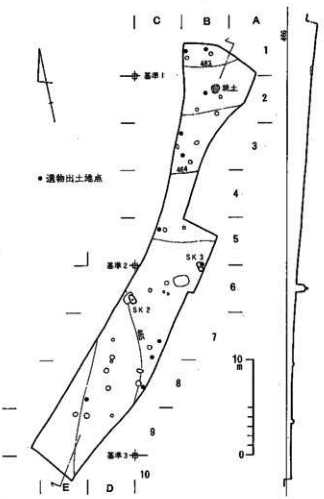


図２　調査地全体図　1:400

３　層　序

調査地は南から北へゆるやかに傾斜しており、北へゆくに従って深くなる。地表から地山面までの深さは南端で約0.7ｍ、北端で約1.1ｍである。基本的な層序は上層から暗灰色土(表土0.15～0.2ｍ)、黒色土(0.5～0.8ｍ)、黒色土・黄色粘質土混土(漸移層0.1～0.2ｍ)、黄色粘質土（地山）となる。黒色土の中間にやや赤味をおびた層がはさまる。遺構検出面は漸移層の上面で、遺物は黒色土の下層および漸移層から出土している。

第2章　遺構と遺物

1　遺　　構（図3）

遺構は動物のおとし穴と考えられている土坑2基がある。他は人為的かどうか疑問が残るあやふやな穴である。

SK2　D6区にある。0.9m×0.4mの隅丸長方形プランで、深さ1.0m。坑底中央に1か所小穴がある。埋土は自然堆積の様相であった。出土遺物はない。

SK3　B6区にある。0.9×0.4mの隅丸長方形プランで、深さ1.1m。坑底中央に1か所小穴があるが浅い。埋土は自然堆積の様相であった。縄文時代早期末の土器が上面から出土している（図4　1～6）。

小結　この2基は約8mの間隔で主軸方向を同じくして並んでいる。規模・形態ともに両者はよく似ている。飯山地方の他の遺跡例と比べると規模はやや小形の部類である。今回の調査で検出したのは2基であるが、ちょうど尾根線上に並んでおり、調査地外にさらに多くの土坑があるものと考えられる。

焼土　調査地北端B2区で焼土が検出されている。焼土は約0.6mの円形の範囲にあって5cm厚さでレンズ状に堆積していた。層位は地山上約0.2m、黒色土下層にあたる。焼土のほかに炭・灰等の出土はない。

2　遺　　物

A　出土状況（図4・5）

出土遺物には土器と石器があるが、出土量はごく少ない。

土器はSK3の上面から縄文時代早期末葉のものが6片（図4　1～6）出土している他、前期縄文施文の土器が、調査地内の10か所から1～数片ずつ出土している（図4　7～14ほか）。

石器は重機による掘削中に1点（図5　1）B3区から磨石とフレイク（図5　2・3）が、磨石片がB1区と、B3区から出土している。

遺物出土層位は黒色土下層から漸移層にかけての層位である。

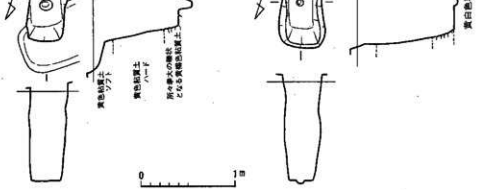


図3　土坑実測図　1:40

B 土　器

第1類から第3類まで縄文時代の土器である。

第1類　表裏条痕文土器（図4　1～7）

a種　1～6

1・2　色調は暗茶褐色。胎土は繊維を多く含み、小石を含む砂粒子が多い。1と2は外面に条痕文を粗く施し細い棒の先で無造作に刺突している。1の口縁部内面は横位に条痕文を丁寧に施し、口唇部に薄い石片のようなもので刻み目を施している。2の内面は無造作な条痕文が施されている。

3・4　色調は内面暗茶褐色、外面黄茶褐色である。胎土は繊維を多く含み、小石を含む砂粒子が多い。内面の条痕は整形のための条痕文と思われ無造作に施されている。外面は横位に条痕文が施されている。

5・6　色調は暗茶褐色。胎土は多くの繊維を含み、小石を含んだ砂粒子が多い。文様は内外面に条痕文が施されている。

b種　7

7　色調は赤茶褐色。胎土は繊維が多く含まれ、大きめの小石や粗い砂粒子が多く含まれている。文様は表裏とも粗い条痕文である。

第1類a種の土器は、土坑の上面から発見された一群である。ほぼ同一個体と思われる。この土器は表裏条痕文で、口縁部付近に刺突文を施し、屈曲部を胴部に設けている。この様な特徴から早期後半の茅山下層式併行の土器（宮下健司b　1986）と思われる。b種も同時期の土器と思われる。

第2類　縄　　文（図4　8～14）

a種　撚りの太い縄文（8～12）

8～12　同一個体と思われる。色調は赤褐色。粗い砂粒子を非常に多量に含んでいる。内面は大変丁寧に整形されている。外面は太い0段多条の単節縄文で施文されている。方向の違う撚りが使われているようである。8は同じ方向の撚りの縄文が結束して回転されている。

第2類a種の土器は前期前半の関山式併行期の土器と思われる。

b種　その他縄文（13・14）

13　色調は暗茶褐色で、胎土は粗い砂粒子を多量に含む、ボロボロと脆い破片である。内面は丁寧に整形されている。外面は縄文を施した部分がみられる。

14　胎土に繊維を含み、脆い。色調は内面に黒色の付着物があり暗茶色で、外面は暗茶褐色である。湾曲した破片で胴下半部と思われる。文様は縄文を横位に回転したものである。

第2類b種は前期前半の縄文ではないかと思われる。

C 石　器（図5　1～5）

1　打点部の欠損している縦長剥片である。その剥片端部に数回の剥離がみられる。

2　横広剥片の打点部を数回の剥離により取り除いた石器である。

3　短軸断面が方形で、長軸断面が三角形状の磨石である。磨面は平坦な一面とその脇の両側縁部分である。

4・5　磨石である。4は磨石の一部である。平坦面が磨石面である。5は偏平な小形の磨石である。全面が磨石面とみられる。

石器の出土量が大変少なく、3は縄文時代の磨石と思われるが、他の石器に関しては時期不明である。

表1　石　器　計　測　表

図版No.	遺物No.	石　器　名	石　質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重　量 (g)	備　　考
1	—	二次調整剥離のある石器	安山岩	11.5	4.9	1.7	66.2	

2	4	二次調整剥離のある石器	安山岩	3.6	4.5	1.1	15.8	
3	4	磨石	安山岩	15.0	7.0	8.3	933.7	
4	5	磨石	チャート	4.0	2.7	0.6	8.7	7/8欠損
5	1	磨石	チャート	5.2	3.4	0.8	23.3	

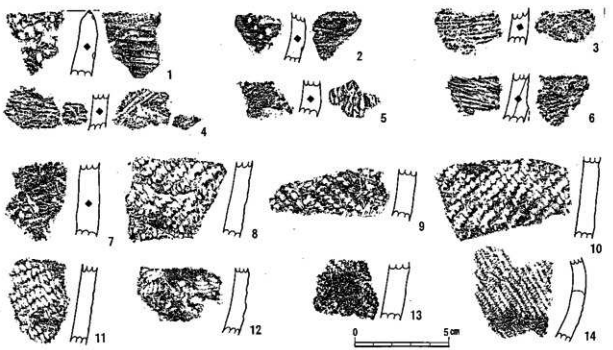


図4　縄文時代土器実測図　1：2

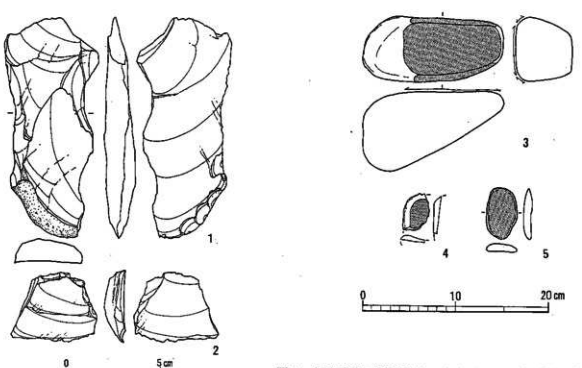


図5　縄文時代石器実測図　1～2 1：2　3～5 1：4

第3章　結　　語

休場遺跡は、市川谷道に沿った低湿地帯に存在する。桑名川方面より急坂を登りきりやや下り坂となった地点にあたる。旅人が急坂を登りきり、「ほっ」と一休みして汗をぬぐう所からつけられた地名であろう。この遺跡も低湿地帯の周辺にあり、人と水とのかかわり合いを示す遺跡である。

調査の結果、茅山式併行土器片、関山式併行土器片が出土して、縄文早期後半、同前期前半の遺跡であることが判明した。ただ、出土量はきわめて僅少で、遺跡の中心地ではないと思われる。恐らく、調査地以外の場所に中心地が存在するものと考えてよいであろう。

第６編　下境大原遺跡

第１章　遺跡の概要

１　遺跡の概要

下境大原遺跡は温井から下境へ下る道の途中、中堤よりやや下った所から西へ分かれて上境へぬける道を少し入った所にある。遺跡は北から南へ延びる小尾根上にあり、小尾根頂部は先端（南）へゆくに従って高くまた広くなる平坦面をもつ。小尾根の西には北から南へ開く谷がある。この谷の奥には湧水があり、谷は水田としてかつて利用されていた。

当遺跡は市教委が昭和60(1985)年に行った分布調査で発見された遺跡で、当時畑であった尾根頂部で土器が採集されている。

今回の発掘で、動物のおとし穴と考えられている土坑を初め多くの土坑が検出され、縄文時代草創期の表裏縄文土器・石器群、同早期・前期の土器がごく少量出土している。

２　調査方法

(1)　調査地点（図１）

今回の発掘調査地は、尾根上の平坦部の西半分である。尾根の東斜面は西斜面に比べて急であり遺跡の可能性がうすいと判断した。尾根頂部から南にかけての所は遺跡が予想されたが、大木が多くありまた新しいゴミ穴等があったため調査を断念した。しかし今考えると「おとし穴」の分布を知る上でも尾根全面の発掘が必要であったと痛感している。

(2)　調査区の設定（図２）

調査区内の地区割りについては５ｍのグリット法とし、農地開発工事用基準杭を基準として調査地に合わせて方眼を組んだ。

基準とした工事用杭は、基準１がＸ軸27ラインとＹ軸15ラインの交点杭、基準２がＸ軸26ラインとＹ軸15ラインの交点杭で、その中間に基準３を設け、基準３を中心に基準１から40°北へ振ったラインを中心軸として方眼を組んだ。地区の呼称は南から北へ１・２・３……、東から西へＡ・Ｂ・Ｃ……とした。

レベルは工事用ベンチマークを基準とした。

(3)　調査方法

調査方法は、まず重機による表土除去を行った。その後、ジョレン・移植ゴテ等で慎重に地山面まで、遺構・遺物の検出を行った。また旧石器の有無を確認するため地山を一部断ち割った。

遺物の取り上げは原則として１点ずつグリット毎に番号をつけて地点と高さを測った。

図面の作成は遺構図と遺物分布図をあわせて40分の１平板図を作成、遺構に応じて個々の微細図を作成した。写真は白黒とカラースライドを35㎜フィルムで適宜撮影した。

３　層　序

調査地内の層序は、10区以北では表土（耕作土、0.15～0.2ｍ）直下が黄色粘質土層（地山）である。また７区以南の丘頂部でも表土直下が地山で礫層が所々顔をのぞかせている。Ｄ・Ｅ２～５区はやや沢地形で、表土下に黒色土が約0.1～0.2ｍの厚さであった。地山は土坑壁面でみると、上から黄色粘質土ソフト（約0.4～0.5ｍ）、黄色粘質土ハード（約0.3ｍ）、所々礫状となる黄褐色粘質土（約0.5ｍ）、岩盤ないし細礫となる。

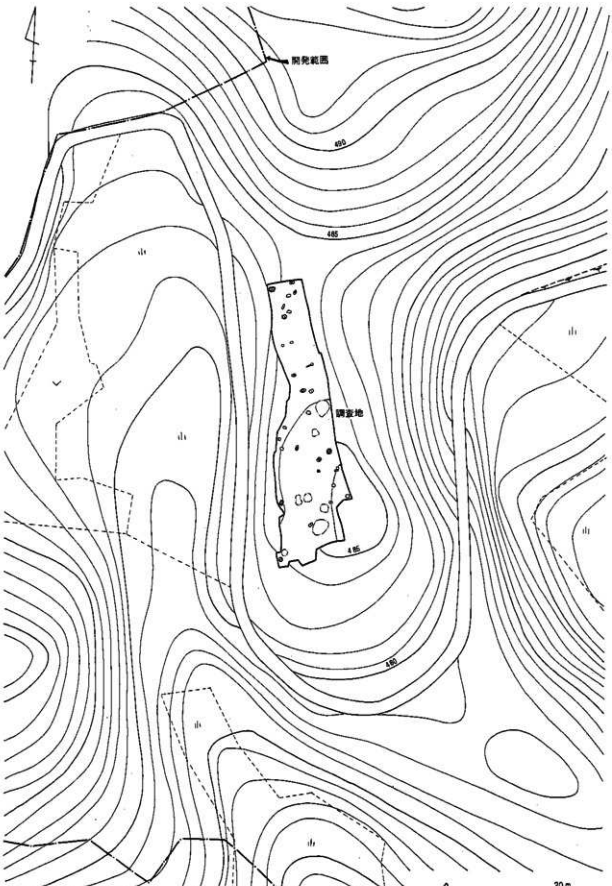


図1　調査地周辺地形　1:1000

第2章　遺　構

遺構は土坑が29基ある。これらの土坑は形態などからⅠ～Ⅴの5類に分けられる。

A　Ⅰ類土坑（図3・4）

隅丸長方形プランで、坑底に小穴を1か所もつ土坑である。

SK1　C4区にあり、主軸は等高線に直交する。1.05m×0.65mの隅丸長方形プランで深さ0.8m。坑底中央の小穴は細く深い。埋土は自然堆積の様相である。出土遺物はない。

SK13　E5区にあり、主軸は等高線に平行する。2～3段に掘り込まれており、上段は不整な楕円形プランで、1.25m×1.0m。下段は1.05m×0.55mの隅丸長方形プランである。深さ1.05m。坑底の小穴はやや北に片寄っている。埋土は自然堆積の様相を呈している。出土遺物はない。

SK14　D3区にあり、主軸は等高線に斜行する。2段に掘り込まれており、上段は1.35m×1.1mの不整な楕円形プランで、下段は1.05m×0.65mの隅丸長方形プランである。深さ1.05m。坑底の小穴はやや東北に片寄る。埋土は自然堆積の様相である。出土遺物はない。

SK17　F1区にあり、主軸は等高線に直交する。2段に掘り込まれており、上段は1.1m×1.0mの楕円形プランで、下段は1.05×0.55mの隅丸長方形プランである。深さ0.8m。坑底中央の小穴は他と比べて浅い。

SK5　B5区にあり、主軸は等高線と直交する。SK16と重複しているが切り合い関係は不明。南壁がやや2段になっているが全体としては、1.05m×0.65mの隅丸長方形プランで、深さ0.9m。坑底中央に小穴がある。出土遺物はない。

SK30　D15区にあり、主軸は等高線と平行する。1.2m×0.55mの隅丸長方形プランで

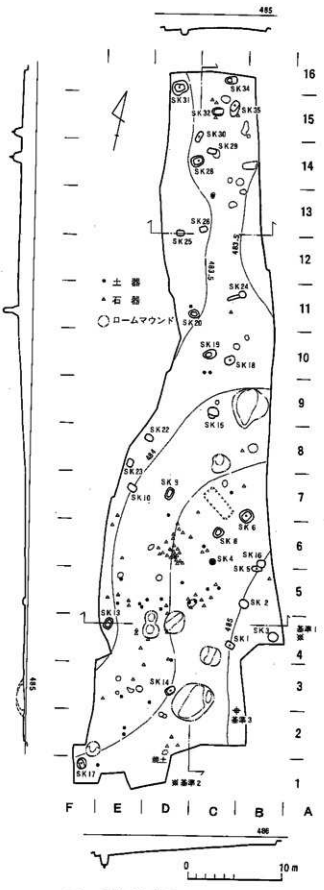


図2　調査地全体図　1:400

深さ0.9m。坑底中央に小穴がある。埋土は自然堆積の様相である。出土遺物はない。

SK35 C14区にあり、主軸は等高線に平行する。南接して浅いくぼみがあるが、当土坑に付属するのかはわからない。1.15m×0.8mの隅丸長方形プランで、深さ1.0m。坑底の小穴はやや北に片寄る。埋土は自然堆積の様相である。出土遺物はない。

SK6 B7区にあり、主軸は等高線に平行する。2段に掘り込まれており、幅広である。上段は1.4m×1.4mの不整な円形プランで、下段は0.9m×0.8mの隅丸方形プランである。深さ0.9m。坑底中央に小穴がある。埋土は自然堆積の様相である。出土遺物はない。

SK18 C10区にあり、主軸は等高線に平行する。1.2m×1.0mの隅丸長方形プランで、深さ0.85m。坑底中央の小穴は深い。埋土は自然堆積の様相である。出土遺物はない。

SK28 D14区にあり、主軸は等高線に直交する。2段に掘り込まれており、上段は1.4m×1.2mの楕円形プランで、下段は1.05m×0.8mの隅丸長方形プランである。深さ0.95m。埋土は自然堆積の様相である。出土遺物はない。

SK31 D16区にあり、主軸は等高線に直交する。2段に掘り込まれており、上段は1.7m×1.4mの不整な楕円形プランで、下段は底面に突出する地山の石のためか一角がへこんだ隅丸長方形プランで、1.0m×0.8m。深さ0.95m。坑底の小穴は地山の石をさけて穿たれている。埋土は自然堆積の様相で、最上層に赤味をおびた黒色土がある。出土遺物はない。

B II類土坑（図5・6）

楕円形プランで、底すぼまりに深く掘り込まれている土坑である。

SK2 B5区にあり、主軸は等高線に直交する。0.95m×0.85mの楕円形プランで、深さ1.5m。埋土は自然堆積の様相である。深さ約0.6mの所から早期中半期の貝殻腹縁文土器と条痕文土器および磨石が出土している。

SK16 B6区にありSK5と重複している。3段に掘り込まれており、上段は0.8m×0.7mの隅丸長方形プラン、中段は0.6m四方の隅丸方形プラン、下段は直径0.5mの円形プランである。深さ1.4m。出土遺物はない。

SK8 C6区にあり、主軸は等高線に平行する。2段に掘り込まれており、上段は1.1m×0.85mの楕円形プラン、下段は0.75m×0.5mの隅丸長方形プランである。深さ1.8m。出土遺物はない。

SK8 D7区にあり、主軸は等高線に平行する。2段に掘り込まれており、上段は1.0m×0.8mの隅丸長方形プラン、下段は0.75×0.45mの隅丸長方形プランである。深さ1.55m。埋土は自然堆積の様相である。出土遺物はない。

SK19 C10区にあり、主軸は等高線に斜行する。3段に掘り込まれており、中段の壁は深くえぐれている。上段は1.4m×0.9mの楕円形プラン、中段は0.75m×0.5mの楕円形プラン、下段は0.65m×0.4mの隅丸長方形プランである。深さ1.9m。埋土は自然堆積の様相である。出土遺物はない。

SK15 C9区にあり、主軸は等高線に斜行する。新しい土坑と重複し切られている。1.15m×0.9mの楕円形プランで、深さ1.3m。埋土は自然堆積の様相である。出土遺物はない。

SK20 D11区にあり、主軸は等高線に直交する。1.2m×0.8mの楕円形プランで、深さ1.4m。中程より下の壁面に地山の石が突出する。埋土は自然堆積の様相である。出土遺物はない。

SK29 C14区にあり、主軸は等高線に直交する。東接して浅いくぼみがあるが、当土坑に付属するかどうかはわからない。0.95×9.6mの隅丸長方形プランで、深さ1.75m。中程より下の壁面は所々えぐれている。出土遺物はない。

SK32　C15区にあり、主軸は等高線に直交する。2段に掘り込まれ、東壁は地山の石が壁となっている。上段は1.2m×0.9mの楕円形プラン、下段は1.1m×0.7mの隅丸長方形プランである。深さ1.55m。埋土は自然堆積の様相である。最上層の黒色土から炭が出土している。

SK34　C16区にあり、主軸は等高線に直交する。2段に掘り込まれており、下段は西に片寄って掘られている。上段は1.2m×0.8mの長楕円形プランで、下段は0.6m×0.4mの半楕円形プランである。深さ1.8m。

C　Ⅲ類土坑（図6）

溝状の細長い土坑である。1基のみ検出。

SK24　B11区にあり、主軸は等高線に直交する。長径2.0m、短径0.35m、深さ0.8mを測る。東端に赤味をおびた黒色土が中心にあるレンズ状の落ち込みが重複している。埋土は黒色土。構断面形は下にゆくほどすぼまり細くなる。出土遺物はない。

D　Ⅳ類土坑（図6）

集石土坑である。

SK4　C6区にある。直径0.55mの円形プランのレンズ状の落ち込みの中に、拳大から乳児頭大の石が入っている土坑である。深さ0.1m。石は赤色味をおびているが、焼かれたためなのかもともと赤いのかは判断しがたい。埋土中に炭・焼土等は認められない。確認面は黄色粘質土（地山）である。出土遺物はない。

E　Ⅴ類土坑（図7）

円形土坑である。

SK3　B4区にある。直径約1.0mの円形プランの土坑で深さ0.7m。南壁に地山の石が突出している。埋土は自然堆積の様相を呈している。出土遺物はない。

F　Ⅵ類土坑（図7）

隅丸方形プランの小形土坑である。D・E7・8区とC・D13区にのみある。

SK10　E7区にあり、主軸は等高線に直交する。1.1m×0.7mの隅丸方形プランで、深さ0.7m。坑底は礫状となる地山で凹凸がはげしい。埋土は自然堆積の様相である。出土遺物はない。

SK22　E8区にあり、主軸は等高線に直交する。0.85m×0.65mの隅丸方形プランで、深さ0.85m。やや斜行して袋状に掘り込まれている。出土遺物はない。

SK23　E8区にあり、主軸は等高線に平行する。0.9m×0.6mの隅丸長方形プランで、深さ0.45m。やや斜行して掘り込まれている。出土遺物はない。

SK25　D13区にあり、主軸は等高線に直交する0.8m×0.55mの隅丸長方形プランで、深さ0.6m。埋土は自然堆積の様相である。出土遺物はない。

SK26　D13区にあり、主軸は等高線に直交する。0.8m×0.65mの楕円形プランだが底面のプランは隅丸長方形である。深さ0.65m。埋土は自然堆積の様相である。出土遺物はない。

G　小　括

本遺跡検出の土坑についての考察は別の機会にゆずることとして、ここでは類型毎の特徴を指摘してお

く。

Ⅰ類は11基あり、隅丸長方形プランで坑底中央に小穴をもつという形態で共通する。規模も２段に掘り込まれているものも下段に注目すると、長径が0.9m～1.1mの中におさまり、１段のものとほぼ等しい。深さも0.9m内外でほぼ一定している。Ⅰ類はほぼ同規模ということができる。

ただし幅をみるとSK6・18・28・31が広く、Ⅰ類を細分しようとすれば、広いものをb、その他をaとすることができる。

分布をみると、他の遺跡例では主軸を平行して弧線を描いて数基ないし十数基が並ぶ例が多いが、当遺跡の調査範囲内では、２基が並ぶ程度である。発掘範囲の狭さを考えても少ない。尾根幅が狭いという要因もあろう。似たものが並ぶ傾向もある。SK1とSK5は１段で坑底の小穴が中央である。SK13とSK14は２段で坑底の小穴がやや北に片寄る。SK28とSK31は２段でb類である。このことは並ぶものは同一集団ないし個人によって同時期に掘られたことを示すものと考える。

Ⅰ類土坑の性格については、鳴沢頭Ⅰ遺跡と同様、動物のおとし穴と考えておく。

年代は出土遺物がないので確定しがたいがSK13・31で赤味をおびた黒色土が最上層にあるので、これも鳴沢頭Ⅰ遺跡同様年代を知る一つの手がかりとなろう。

Ⅱ類土坑は10基ある。Ⅰ類より深く、底すぼまりに掘られている。分布をみると、SK2・8・9・(16)、SK15・19・20、SK9・32・34と主軸を平行して弧状に並ぶ様はⅠ類に等しい。並ぶものの形態が似ていることもⅠ類に等しい。このことからⅡ類土坑も動物のおとし穴と考えておく。

Ⅱ類土坑の年代については、SK2から出土した土器（図3　7・14）の年代から縄文時代早期中半には埋没したものと考えられる。

Ⅲ類土坑は溝状土坑で１基のみである。この種の土坑も主軸を平行して数基～数十基が並ぶ例が多いが本例は１基しか検出されていない。調査地は並ぶ方向に長く掘られているので単独の可能性が高い。また長軸が２mであるのは他の例と比べて短い部類である。この土坑も上層に赤味がかった黒色土があるので年代を知る手がかりとなろう。性格については細長い脚の動物を対象としたトラップ（重力ワナ）という考え方に従っておく。

Ⅵ類は５基ある。SK0・22・23と、SK25・26の２群に分かれてあり、群毎に形態・規模がほぼ等しい。平面形とその規模はⅠ類によく似ているが、深さが浅く小穴をもたない。分布も異なっている。年代・性格等は今のところよくわからない。

Ⅳ・Ⅴ類は１基ずつである。Ⅴ類はⅥ類の円形なものと考えることもできる。Ⅳ類は石器群の近くにある。同様な集石土坑が、昨年度調査したトトノ池南遺跡で検出されている。それは、縄文早期押型文土器の分布の近くにあり、本例と異なり石に焼面が良く残り、炭・焼土も出土している。しかし石の規模や配置状態、土坑の形態はよく似ている。

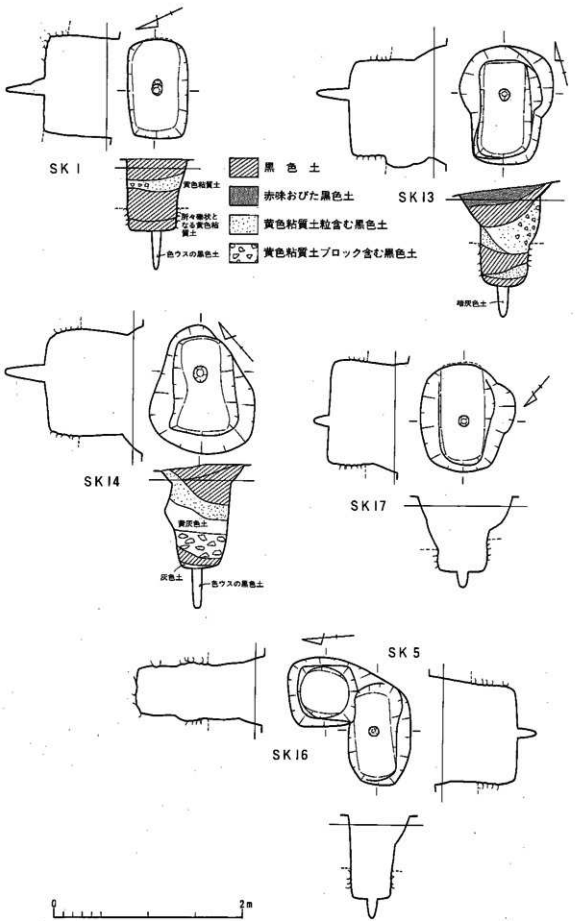


図3　土坑実測図1　1:40

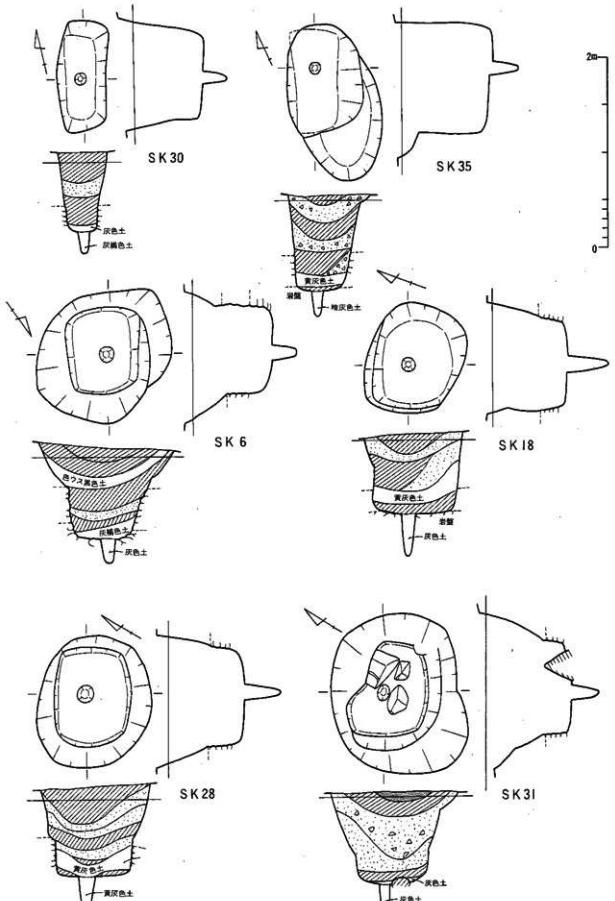


図4　土坑実測図2　1:40

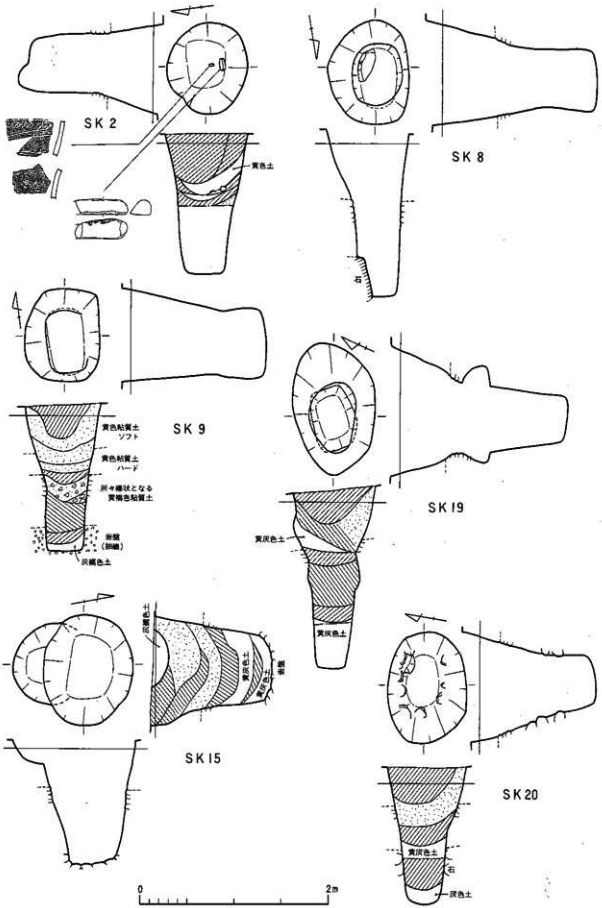
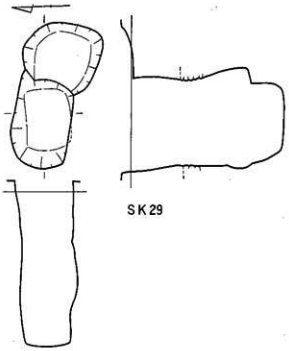
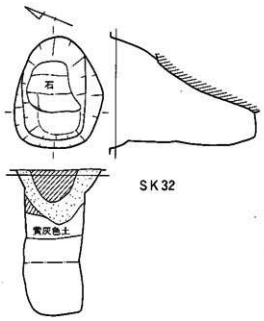
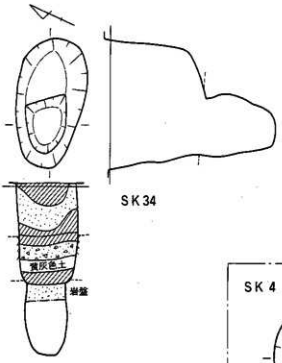
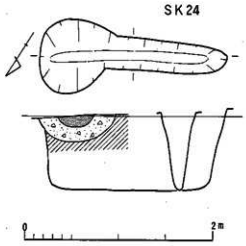


図5　土坑実測図3　1:40









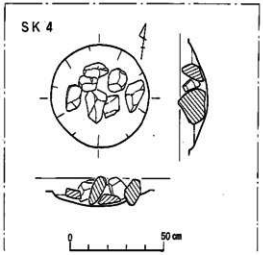


図6　土坑実測図4　1:40

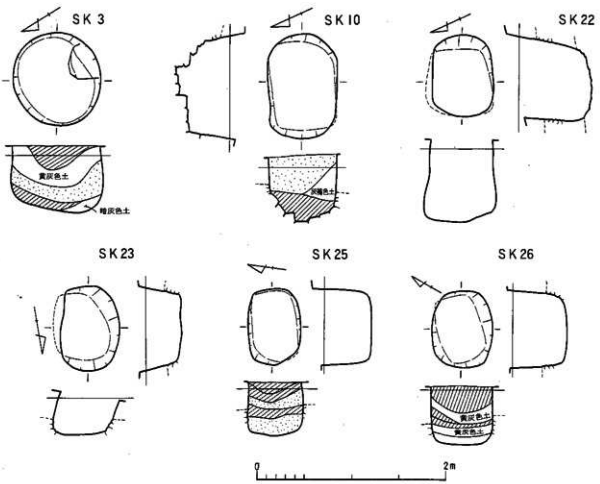


図7　土坑実測図5　1:40

第3章 遺　物

1　遺物出土状況（図8～9）

出土した遺物はすべて縄文時代のものである。出土量はごく少なく、土器が両掌に乗る程度、石器は土器より多くコンテナの底に平らに並ぶ程度である。

土器の分布は散在的である。類毎の集中もみられない。出土層位は黒色土から黄色粘質土で、表裏縄文土器1は黄色粘質土断ち割り中に出土している。

石器はC6区、B5区、D5区に群在する。出土層位は黄色粘質土上面から下5㎝位までである。この石器群については中島が石器製作場の可能性を指摘している。

遺構からの遺物の出土はほとんどないが、SK2から沈細＋貝殻腹縁文土器（図10　7）と条痕文土器（同14）、磨石（図14　25）（図11　7）が出土している。

2　土　器

第1類　表裏縄文（（図10　1・2）

1　口縁部の破片である。色調は暗茶褐色。胎土は長石のような白い粒子が多い。大変脆い。器厚は6㎜で薄い。口縁端部は丸く、やや外反している。口縁部直下の内外面に縄文が施文されている。外面は斜めに、内面は横位回転で施文されている。内面の施文は口縁部直下だけである。

2　口縁部の破片である。色調は茶褐色で大変脆い。器厚は7㎜である。口縁はやや外反している。口唇部、内外面の破片全体に縄文が施してある。内面は口縁直下が横位回転で、その下がやや斜めに回転施文している。外面は横位回転施文している。

表裏縄文は縄文草創期最終末から早期初頭に位置する土器である。飯山市では小佐原遺跡と北竜湖遺跡（長野県史刊行会　1986）で表裏縄文が出土している。この第1類土器は非常にこれらの土器と類似しており、北竜湖のような尖底の表裏縄文の時期の土器と思われる。

第2類　回転押型文（図10　3・4）

3　口縁部の破片である。口縁直下に1粒3×4㎜の楕円文を2.7㎝の帯状に回転させ、その下部に山形文を横位帯状に施文している。文様は丁寧に規則的に施文されているようである。胎土は白い長石のような粒子を多く含む。色調は暗黄褐色。

4　楕円押型文である。色調は黄褐色。内面は非常に丁寧に整形されている。外面の押型文は4×5㎜の楕円で表面が摩滅している。小破片で文様の詳細などはわからない。

第2類は縄文早期前半の回転押型文である。3の土器は押型文が整然としており、やや古手の様相を呈するが、文様の構成が小破片であるために明確でない。3は樋沢期より細久保期初頭（宮下健司　1986）にかけての併行期の土器群と思われる。

第3類　撚糸文（図10　5・6）

5　尖底部付近の破片である。色調は赤褐色。長石のような白い粒子が多い砂粒子が含まれており、脆い。厚さは6㎜である。文様の詳細は破片が小さく明確ではないが、撚糸文と思われる。

6　尖底部付近と思われる破片である。色調は赤褐色。やはり長石のような混合物が多く、脆い。器厚は5㎜で薄い。5と同様破片が小さく明確ではないが、撚糸文と思われる。

第3類の土器は、早期前半の撚糸文の尖底土器と類似している。しかし、破片が脆いことと小さいこと

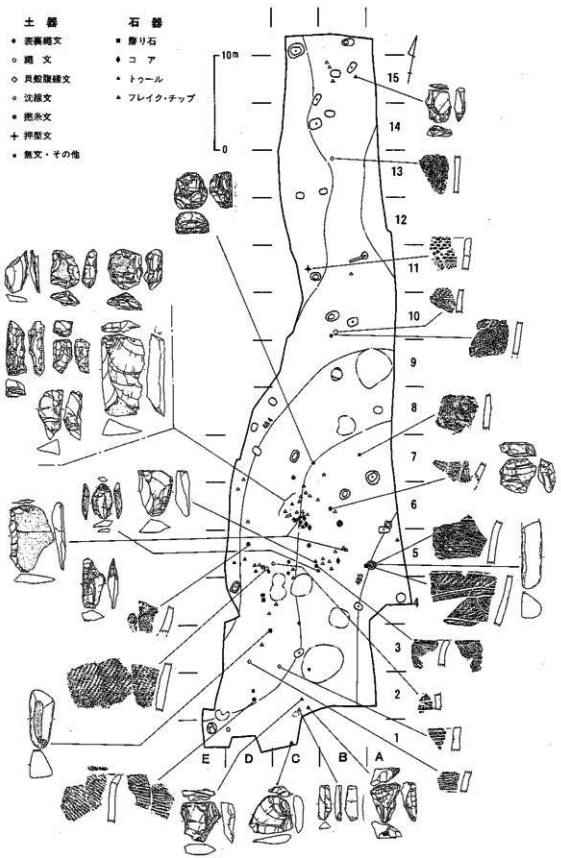


図8 遺物分布図 1:400

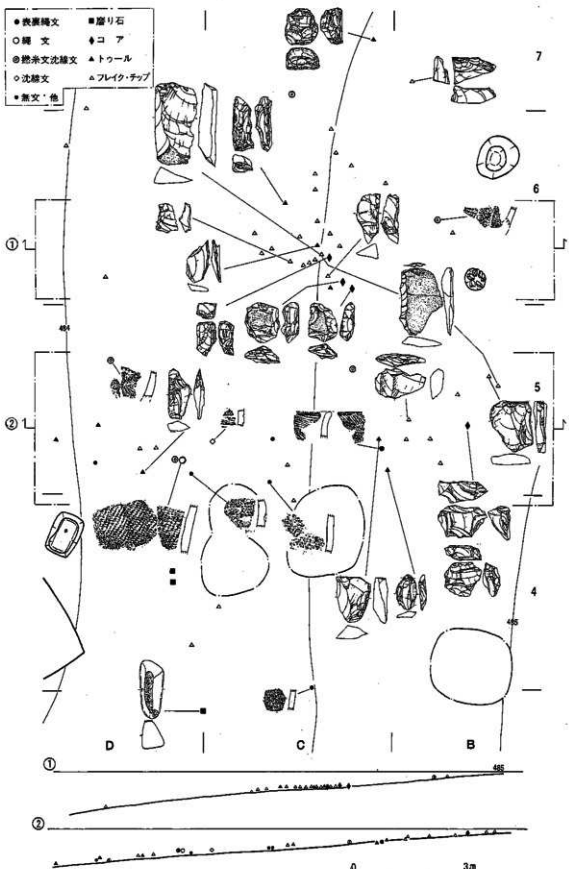


図9　主要部遺物分布図　1:100

で断定できない。

第4類　沈線文（図10　9・15）

9　口縁部である。厚さ8㎜の口縁が平坦な土器である。口縁直下から平行な細い沈線文を深めに数本施している。色調は暗黄褐色で、胎土は緻密な砂粒子を含んでおり、柔らかな土器である。

15　器厚が4－6㎜で薄い。色調は暗黄褐色で、胎土は緻密な砂粒子を含む。焼成は良好であるが、胎土が緻密なので少々柔らかな感じがある。破片の上面に沈線の痕跡がある。その下は篦状工具の整形が行われている。内面も丁寧に整形されている。小さな破片であるが内径のカーブがきつく、尖底土器の胴下半部の破片と思われる。

第4群は早期中半の沈線文土器に比定されるものと思われ、胎土の様子や文様の様子から搬入された土器ではないかと思われる。

第5類　沈線文＋貝殻腹縁文（図10　7・8・10～12・13・16）

7・10～12　同一個体である。色調は白黄褐色で、胎土は細かい砂粒子が含まれており、柔らかい感じのする土器である。条痕文で土器の外面を整形し、そのうえに平行沈線と貝殻腹縁文で施文している。文様は直線の平行沈線文とその沈線文との間に貝殻腹縁をやや斜めにして等間隔に施文している。その貝殻腹縁文の合間に弧状の平行沈線文が2ヵ所みられる。内面は丁寧に整形されている。

8・13・16　同一個体である。色調赤茶褐色～暗赤褐色。胎土は細かい砂粒を含む。厚さは6㎜である。表面に黒色の付着物がある。8の文様は貝殻腹縁文を斜めに等間隔に施文し、その下に細い沈線を横位に引いたものである。13・16は無文部である。

第5類は早期中半の田戸上層併行の土器と思われる。関東あるいは東北地方から搬入された土器であろうか。

第6類　条痕文（図10　14）

14　色調暗黄褐色。胎土は緻密な砂粒子を含む柔らかい感触のある破片である。内面は使用のため表面が剝がれているようである。外面は条痕文で整形した後、表面を磨き条痕を消しているようである。僅かに条痕の痕跡がみられる。器厚は7～8㎜である。

第6類は第5類第4類の土器と胎土が近似しており、第5類の7にも地文に条痕文がみられることなどから、早期中半期併行の搬入土器ではないかと思われる。

第7類　無　文（図10　17～19）

17・18　同一個体である。色調は外面赤褐色、供面暗茶褐色の繊維混入土器である。胎土は粗く脆い。内面に指頭痕も残る。

19　色調は灰黄褐色。表面に黒色の付着物がみられる。胎土は白色の長石の様な粒子が多く含まれている。脆い土器である。指頭痕が内外面にみられる。外面が摩耗しているのではっきりとしないが、細い条痕の様な痕跡がみられる。

17・18は繊維が混入しているので早期後半より前期前半の土器であると思われるが、19は時期不明である。

第8類　縄　文（図10　20）

20　色調は暗茶褐色。断面黒色である。胎土は粗い砂粒子が多く含まれており、焼成も悪く、大変脆い。内面に指頭痕が多くみられる。外面はＬＲの縄文を疎らに施文している。

胎土に繊維が含まれておらず、内面は指頭痕が残されており、時期不詳である。

3　石　器（図11～14）〔アルファベット記号は同一母岩(安山岩)を示す〕

1　素材は横広剝片を用いている。打面部から両側縁にかけ裏面より細かな剝離を施し、楕円形に仕上

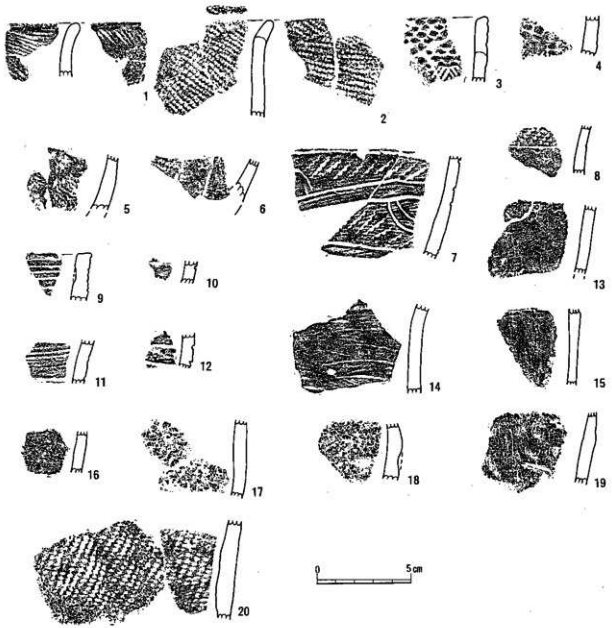


図10　縄文時代土器実測図　1：2

げている。長軸の先端部は、規則的な剝離を施し円みを出している。この部分が掻器としての機能を持つものと思われる。母岩D。この母岩は当遺跡ではこの1点だけである。

2　薄目の剝片の一側縁に調整剝離を加えて掻器と思われる刃部を作出している。剝片の打面部は欠損している。母岩A。

3　板状の残核を素材としている。側縁の一部に鈍角な剝離を加え掻器状の刃部を作出している。基部は折れたものか折られたものか不明である。母岩A。

4　3と同様板状の残核の一部を折り取った石器を利用している。薄い縁辺に表裏より大きめな剝離を2～3回ずつ施している。またその折られた面から平坦に剝離し、鈍角な刃部を作り出している。掻器として用いられたものであろう。母岩A。

5　3・4と同様板状の残核を利用している。縁辺の所々に小剝離を数回加えている。掻器として用いたものであろうか。母岩A。

6　板状な縦長剥片を素材としている。長軸側縁の上端部に小さな樋状剥離を数回加えている。打面と樋状剥離の角度は90度である。長軸側縁部の鈍角な部分に刃こぼれのような小剥離痕が残る。削るような用途にも用いられたようである。母岩A'。

7　断面三角形の部厚な剥片の長軸側縁に規則的な剥離が施されている。右側縁部は裏面より、左側縁部は正面より剥離を施し、長いやや円みを持つ掻器の刃部を作出している。母岩A。

8　横広剥片を素材としている。正面の左側縁は裏面より規則的な小剥離を施し、剥片端部は正面より規則的な小剥離を施している。面縁とも直線的な長い刃部を持つ掻器である。母岩F。

9　分厚な剥片を利用し、平面形が三角形を呈するように縁辺から剥離を施している。残核の様にも思われるが、三角形の頂部に小剥離を施し、丸みを持つ小さな掻器の刃部を作出している。母岩E。

10　石核ではないかと思われる。正面と図の上側縁に礫面を残し、裏面の周縁から大きな剥離を施し、また正面の周縁から剥離して小さな横広な剥片を剥しており円い形態になっている。取られる剥片が小さめであり、残核ではなく、礫器として用いられた可能性もあると思われる。母岩C。

11　側縁に多く礫面を残す打面転位の時にでる部厚な剥片を利用している。長軸の側縁に正面より大きく二度剥離し、その面に裏面より細かな剥離を側縁に沿って数回施し、少し抉りを持つ鈍角な掻器の刃部を作り出している。母岩B。

12　残核であろうか。縦長の剥片を剥した後90度打点を転位させ、その裏面で横広な剥片を剥離している。その残核の一側縁を使用したのではないかと思われる小剥離痕がみられる。母岩A。

13　残核であろうか。礫面を中央部に残すように、その周縁を表裏より剥離している。平面三角形の形態になっている。9の石器と近似しているが、掻器のような小剥離は見受けられない。10の石器とも製作上近似している。取られた剥片が小さく、残核ではなく礫器の様な利器とも考えられる。母岩A。

14　分厚な横広剥片を素材としている残核と思われる。正面の平坦面を残しその周縁を裏面より剥離している。裏面も打面部縁辺に鈍角な剥離がみられる。13同様とられる剥片が小さく、掻器のような利器である可能性もある。母岩A。

15　分厚な板状の剥片を用いている。まず、周囲より幅広な調整剥離を行い、寸詰まりの円錐形状の形態に仕上げる。次に、打面より90度角の刃部角をもつ円形掻器のような周縁を作り出している。その周縁を刃部とする刃部角の急な掻器の可能性がある。母岩A'。

山形県火箱岩洞窟(山形県　1969)の円形掻器と類似している。この火箱岩例は平坦な打面を作り、その回りに45～90度の角度の掻器刃部を作出している。火箱岩以外にもこのような円形掻器は縄文草創期にみられる。この15の円形掻器と思われる石器は縄文草創期に比定できよう。

16　板状の分厚な剥片を素材としている残核であろうか。板状な面に直交する打面を設け、縦長の剥片を取っている。その後一方の長軸側縁に裏面から直角に近い剥離を規則的に施している。残核を利用しその面を刃部角の急な掻器として利用した可能性もある。母岩A。

18・19　打点部分を取り除いた剥片類である。母岩A。18は分厚な横広剥片を用い、19は分厚な縦長剥片を用いている。

17・20～24　剥片類である。17は分厚な板状の剥片で、母岩はAである。20・21は縦長の剥片である。母岩はC。20は打点部が欠損している。22は横広の剥片で、母岩Aである。

23と24は大形の縦長剥片である。母岩はA。23は礫面を多く残している。24は横断面三角形の刃器状の剥片である。

25　断面三角形の長軸側縁を利用した磨石である。一部を欠損している。敲き潰しをしたような剥離痕が磨石面の脇に残っている。

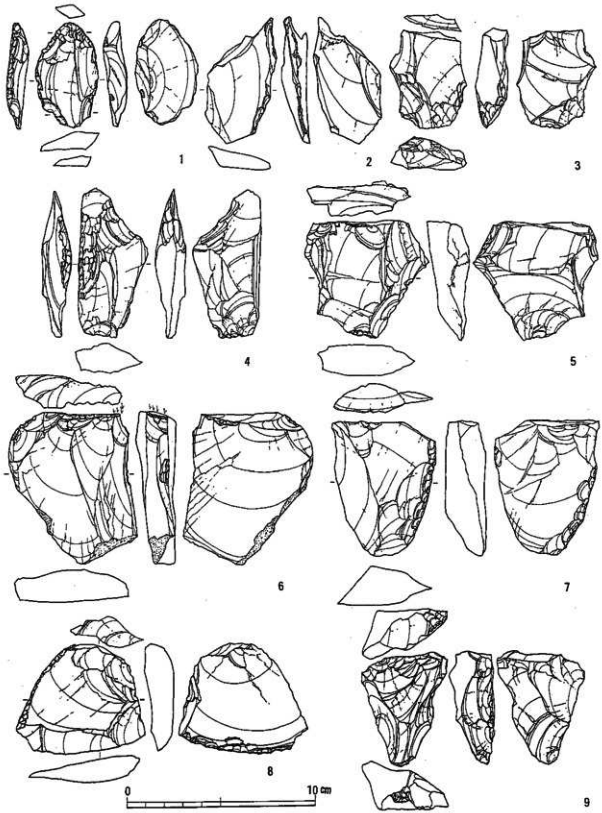


図11　縄文時代石器実測図1　1:2

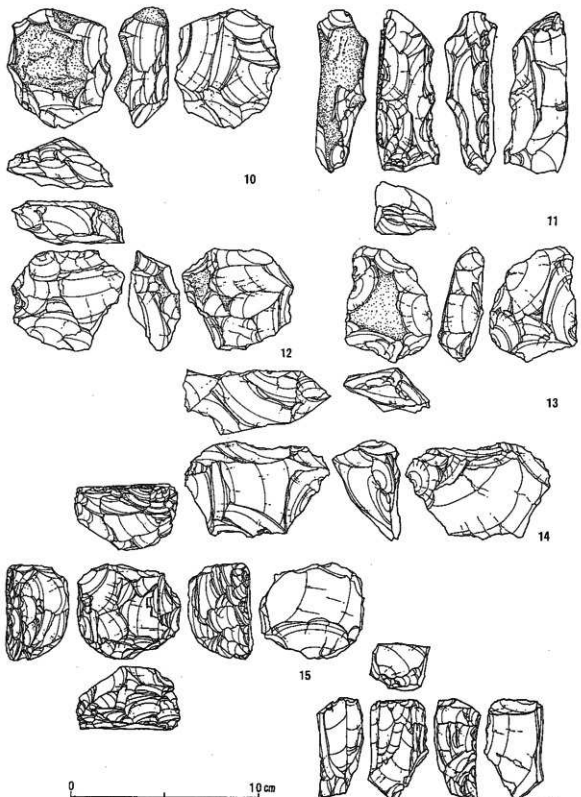


図12　縄文時代石器実測図２　1:2

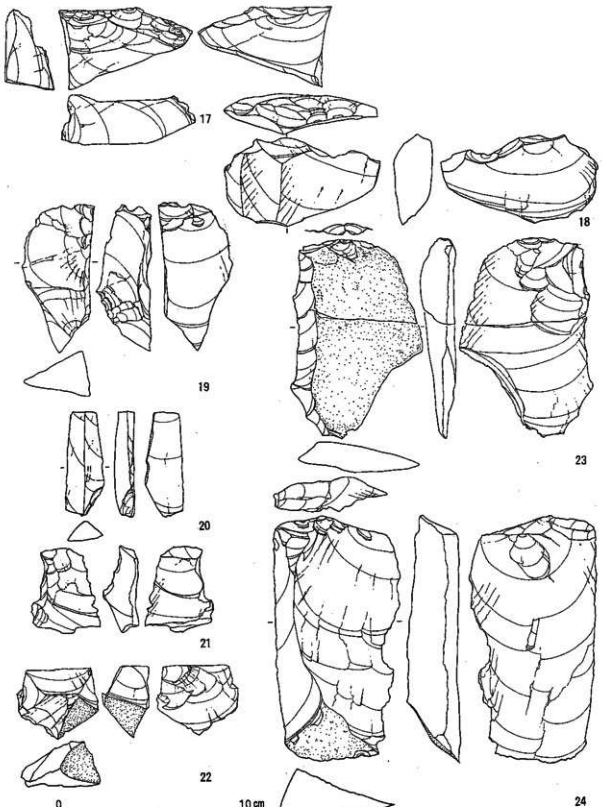


図13　縄文時代石器実測図３　1:2

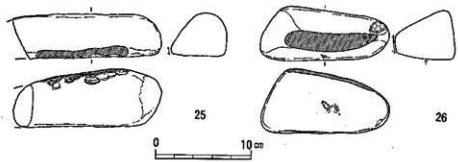


図14　縄文時代石器実測図

表1　石器計測表

図版No.	遺物No.	石器名	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	C5-6	掻器	安山岩	5.5	3.3	1.2	18.6	
2	C6-11	掻器	安山岩	6.6	3.7	1.3	23.7	
3	B15-1	掻器	安山岩	5.2	4.1	1.7	126.5	
4	D5-3	掻器	安山岩	7.8	3.6	1.6	34.8	
5	C2-1	掻器？	安山岩	6.2	6.5	2.3	94.0	
6	B5-1	彫器	安山岩	8.0	6.8	2.1	126.5	
7	C5	掻器	安山岩	7.0	5.5	2.1	88.7	
8	C1-1	掻器	安山岩	5.6	6.9	1.8	56.8	
9	C2-3	掻器	安山岩	5.9	4.6	2.4	48.8	
10	C6-3	石核？	安山岩	6.3	5.5	2.8	78.0	
11	C6-20	掻器	安山岩	8.5	3.4	2.8	85.2	抉り有
12	B5-4	石核	安山岩	5.3	5.9	2.7	91.8	
13	C7-1	石核？	安山岩	6.1	4.5	2.4	58.9	
14	C6-2	石核？	安山岩	5.0	7.6	3.5	117.2	
15	C7-2	円形掻器	安山岩	4.7	5.5	3.4	123.1	
16	C6-9	石核？	安山岩	5.5	3.2	2.4	50.6	
17	B7-1	剝片	安山岩	4.3	7.1	2.6	67.5	板状
18	B5-5	二次調整剝離のある剝片	安山岩	4.7	8.1	1.9	62.8	
19	C6-4	二次調整剝離のある剝片	安山岩	7.8	3.9	2.9	58.0	
20	C2-2	剝片	安山岩	5.5	2.1	1.0	12.3	打点部欠損
21	C6-16	剝片	安山岩	4.6	3.6	1.8	19.7	
22	-	剝片	安山岩	3.8	4.3	2.4	31.4	
23	B5-2+C6-10	剝片	安山岩	10.5	7.1	1.9	112.6	
24	C6-10	剝片	安山岩	13.0	6.7	2.8	222.1	
25	SK2	磨・敲石	石英斑岩	4.6	15.8	6.1	683.6	敲撰石
26	D3-1	凹・磨石	砂岩	5.7	13.5	6.8	675.3	

26　断面三角形の長軸側縁を利用した磨石である。また平坦な面の一部に浅い凹みがみられる。

小　括

当遺跡の石器は、磨石以外の石器はすべて安山岩である。この素材となった安山岩のほとんどは同一の母岩から剥離されたものである。この母岩を母岩Aと呼称する。(注1)

母岩Aからなる石核や剥片を観察すると次のような石器製作工程が推測される。しかし、接合資料ではないため、予察である。

23や24の大形剥片には礫面が残る。この剥片から原石は最低でも子供の頭大ぐらいの大きさであることが推定できる。

この原石からの剥片剥離工程の第1段階では、原石の外皮を大きくとり、剥片剥離の為の打面がつくられたと推測される。この時に生じた剥片が23・24である。次に、この打面を用いて、原石を分厚な板状の剥片に分割（剥離）する。5・12・14・16・17～19の剥片はその際に分割された剥片ではないかと考える。

分割された剥片は、その形状により、掻器等に加工されたり、石核に加工されている。

分割剥片を用いた石核から剥離されている剥片は小剥片が多い。接合はしなかったものの、母岩Aの石核と小剥片は小範囲に分布している。小剥片の大きさは、長さ2.2～4.6cm、幅2.3～4.5cmの範囲のものである。剥片剥離の過程で生じる石器の素材には成り得ない剥片と思われる。この場で石器の製作が行われたと推測できようか。

しかし、剥片の形状を観察すると推測した石器の製作過程で当然生じると考える剥片の一部が欠落する。23や24の外面の大きな剥片は2点しかなく、ある程度完成した石器が多い。これら石器の調整剥片が石器の量に比べて少ない。同一母岩の石器がある程度完成された石器として遺跡内に持ち込まれたように思われる。そして持ち込まれた石核から剥片を剥離し、その中の良品のみを再び持ち去られたのではないかと思われる様相が、当遺跡の石器より窺える。

当遺跡では、時期のメルクマールとなる石器が15以外はない。しかし、分厚な板状の剥片から掻器等の利器を製作していること、分厚な剥片の周縁から剥離を加えていた石核であるという製作技術がみられること、剥片石器の石材が安山岩であること等、ほとんどの石器が一定の時期であることが理解できる。15の母岩は母岩Aと視覚的に差異を感じるものの、近似していると思われる。製作技術面でも分厚な剥片を利用している点も類似している。母岩Aの石器は15の石器とほぼ同時期と考えることができよう。

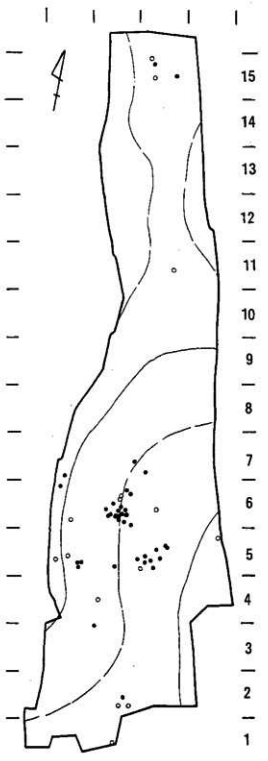


図15　安山岩の母岩分布
● A母岩　○その他の母岩

注1　当遺跡の石器は、25・26を除きすべて、安山岩である。安山岩の母岩Aと母岩A'に非常に類似するが視覚的にわずかに異なる。

第4章　結　　語

谷奥に湧水をもった谷地を臨む小尾根上に、遺跡は存在する。1985年の市教育委員会の分布調査で発見された遺跡である。この地は、かつては畑地として耕作されていた。尾根上部分は、融雪期や降雨による土壌の流出の故であろうか耕作土・黒色土の堆積はほとんど認められないといっても過言でない。従って仮に遺構があったとしても浅い場合は、畑の耕作中に完全に破壊されてしまう筈である。この遺跡の最大の特徴は、何といっても土坑の多さである。全部で29の土坑が発見されている。土坑は形態から5種類に分類される。この内、落とし穴と考えられるのは1類と2類の土坑である。他の土坑については、その性格が明確でない。

落とし穴と考えられる土坑は鳴沢頭Ⅰ遺跡でも発見されている。この種の土坑が、動物捕獲を目的としたものであるとすれば、広くブナ林に覆われた温井台地に住む中小動物を追って、縄文草創期・早期の人びとが動物捕獲のシーズンに来住したといえるのではなかろうか。本遺跡出土石器に、意外に掻器が多いのがその一つの証拠といえないであろうか。そうであるとすれば、一年のうち限定されたシーズンだけの来住であり、堅固な定住的住居を造作する必要はなく、鳴沢頭Ⅰ遺跡の項で若干触れたようにごく簡単で仮泊的住居でよいであろう。時代は違うけれども、信越国境の秋山にみられるマタギの洞穴内の生活用具は、鍋・椀等ごく簡単な食器類のみである。

本遺跡出土土器は、表裏縄文土器・押型文土器・撚糸文土器・貝殻腹縁文土器・条痕文土器等である。量的にはいたって少ない。

第2～6編　遺物の項 参考・引用文献

相原淳一　1990　「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年―仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に―」『考古学雑誌』76－1

飯山市教育委員会　1991　『国営飯山農地開発関係遺跡調査報告Ⅰ』　飯山市教育委員会

石岡憲男　1986　「施文原体の変遷・円筒土器」『季刊考古学』第17号　雄山閣

市村勝己　1986　「縄文前期の土器」『長野県史』考古資料編全1巻(4)

大塚達朗　「草創期土器」『縄文土器大観』1

神奈川考古同人会　1983　「(シンポジウム'83)縄文時代早期末・前期初頭の諸問題」『神奈川考古』第17号

神奈川考古同人会　1984　「シンポジウム縄文時代早期末・前期初頭の諸問題　記録・論考集」『神奈川考古』第18号

可児通宏a　1986　「施文原体の変遷・竹管文土器」『季刊考古学』第17号　雄山閣

可児通宏b　1989　「押型文土器」『縄文土器大観』1　講談社

講談社　1989　『縄文土器大観』1　草創期・早期・前期

小林康男　1986　「縄文時代の道具」『長野県史』考古資料編全1巻(4)

埼玉県考古学会　1986　「―埼玉考古学会30周年記念―シンポジウム資料」『埼玉考古』

埼玉県考古学会　1988　「シンポジウム縄文草創期―爪形文土器と多縄文土器をめぐる諸問題記録集」『埼玉考古』第24号

埼玉県考古学会　1990　「シンポジウム 大木・有尾、そして黒浜―前期中葉土器群にみる系統と交流の実態―」『埼玉考古　別冊3』

小学館　1982　『縄文土器大成』1―早・前期―

鈴木道之介　1981　『図録石器の基礎知識』Ⅲ　縄文時代　柏書房

鈴木道之助　1991　『図録石器入門事典　縄文』　柏書房

中島　宏　1991　「室谷下層式土器についての一考察」Ⅰ　『利根川』12

長野県史刊行会　1986　『長野県史』考古資料編全1巻(4)

新潟県　1983　『新潟県史』資料編Ⅰ　原始・古代1、考古編

秦　昭繁　1991　「特殊な剥離技法をもつ東日本の石匙―松原型石匙の分布と製作時期について―」『考古学雑誌』76－4

宮下健司a　1986　「縄文草創期の土器」『長野県史』考古資料編全1巻(4)

宮下健司b　1986　「縄文早期の土器」『長野県史』考古資料編全1巻(4)

宮下健司c　1986　「縄文時代の道具」『長野県史』考古資料編全1巻(4)

山形県　1969　『山形県史』資料11篇　考古資料

山内清男　『日本先史土器の縄紋』　先史考古学会

あとがき

国営飯山農地開発事業に伴う温井台地の発掘調査は、1990(平成２)年６月の新堤遺跡から始まり、1991(平成３)年10月、下境大原遺跡の調査をもって終了した。この間、トトノ池南遺跡、鳴沢頭Ⅰ・同Ⅱ遺跡、カササギ野池遺跡、休場遺跡と調査は続き、２年間で７遺跡の調査が行われた。調査面積は全体で約12000㎡の広大なものとなった。

温井台地上に遺跡が存在することは、栗岩英治・藤森栄一・北条幸作氏等の資料紹介や報文で古くから知られていたが、特に注目を集めるにいたったのは、北条幸作氏がオリハンザで採集した資料の中にマイクロリスが存在し、樋口昇一・麻生優両氏が「信濃史料」に紹介してからである。

温井台地上の遺跡が本格的に発掘調査の対象になったのは案外に遅く、1984(昭和59)年の長者清水遺跡の発掘からであった。換言すれば開発の波がこの岡山上段にも波及しはじめたことと機を一にしているといえるであろう。

長者清水遺跡の発掘は温井台地の圃場整備事業の一環として行われた。私達はこの調査を通じて岡山の人々と知り合い、共に岡山の将来を考えるとともに、岡山の歴史を知るべく調査に全力を傾けたのである。調査の結果長者清水遺跡は中世の館跡であり、中世以降温井が飯山地方の歴史の中に重要な位置を占めていることを改めて知ったのである。特に珠洲系陶器の出土量の多さは、私達が想像していた以上に北陸方面と奥信濃との経済的・文化的交流が活発であったことを証明してくれた。そして遠く能登半島産の陶器を輸入しえる経済的・社会的地位をもつ豪族層が温井台地に成長しつつあったことを初めて知ったのである。

また、長者清水遺跡をはじめ、今回の国営農地開発事業に伴う発掘調査は、温井台地の本格的な開発が古代末期平安時代に始まったことを私達に教えてくれた。

トトノ池南遺跡から出土した陶硯や墨書された陶器や土師器の存在は、当地に中央の先進文化を受け入れるだけの素地が形成されていたことを物語ってあまりあるものである。そしてそれ以上に当地が古代・中世を通じて越後へ通じる交通の要衝であったことを物語っている。

温井から休場遺跡の周辺を通り上桑名川へ下る出川の付近に、中世小穴関があったとされている。そして温井から関田山脈を越える関田峠は、上杉謙信が飯山へ出るための重要な軍用道路であったといわれている。

いずれにしても当地は中世から近世にかけての信越交通の重要な場所であった。そしてその開発は平安時代中半期にすでに行われていたのである。トトノ池南遺跡・新堤遺跡・カササギ野池遺跡などの平安時代の遺跡がそれを物語っている。

今回の一連の調査を通じて最も私達に深い感銘と、縄文時代の研究の情熱をかきたててくれたのは、鳴沢頭Ⅱ遺跡の新潟県室谷洞窟下層式に類似した土器、及びカササギ野池遺跡の有舌尖頭器・爪形文土器の出土であった。飯山地方の縄文草創期の研究は小佐原遺跡をもって出発点とすることに異論はないが、それをさかのぼる資料は今までのところ発見されないできた。今この岡山地区の両遺跡の石器・土器の発見をもって縄文草創期究明の新たなる歩みが再びはじまったといえるだろう。

旧石器文化についても大きな成果があった。新堤・トトノ池南遺跡出土の旧石器は、飯山地方最古の一群に含まれるものであった。そして思いがけない所からの出土は、私達の予想を越えてこの岡山の台地上が旧石器時代遺跡の宝庫であったことを教えてくれたと同時に、旧石器の調査がいかに慎重に行われなければならないかということを再確認させてくれた。

動物捕獲のための落とし穴と推定される土坑が、鳴沢頭Ⅰ・下境大原遺跡をはじめ多くの遺跡で確認された。関田山麓の広大な森は豊かな動物の棲処であり、格好の狩り場であったことを思わせる。これら土坑が一定の規則性をもって並列する様はまさに壮観であり、その形態や深さは実際に調査した私達に掘り込み技術の高さと労苦を実感させてくれた。これらの土坑が多く湧水地の周辺で検出された意義も大きい。湧水地は動物にとっても貴重な水のみ場であり、そこに集まる動物を捕獲対象としていることをうかがわせている。調査されたのは広大な岡山台地のごく一部にすぎない。遺物を伴わないこの種の土坑の有無は分布調査で知ることは不可能である。これらの遺跡に対する周到な予備調査と、発掘方法に再検討が必要であろう。

この種の土坑は近年の大規模な開発に伴う発掘調査によって、飯山地域でも有尾・北原・照丘・小泉・上野・屋株等各所の遺跡で発見されている。そして溝状となるもの、隅丸方形で坑底に小穴をもつもの等いくつかの類型に分かれ、遺跡によって類型のあり方が異なる傾向もうかがえるようだ。多摩丘陵を中心とする関東地方などでも同様の土坑の発掘例が多く報告されており、その性格についての議論も再び活発になっている。市内検出例の精密な分析と研究、より綿密な調査が大きな課題として残されている。

最後に、今回の一連の調査は、岡山地区の人びとの絶大な協力があってはじめてなしとげられたことを銘記したい。願わくば厖大な経費と莫大な労働力を費して行われた調査を無駄にしないよう、国営農地開発が地元住民にとって大きな幸せをもたらすよう願わずにはいられない。何故ならば、私達は後世に生きるために祖先が残した貴重な財産ともいうべき遺跡を破壊しつくしてしまったからである。

ともあれ、私達にとって試練ともいうべき広大な岡山台地の調査は、これで一応終了した。この間ご指導をいただいた県文化課、調査に理解を示された関東農政局飯山開拓建設事業所、物心両面から調査を支えて下さった地元関係機関、あるときは炎天下、あるときは冷雨の中、黙々と調査に協力して頂いた作業員の皆様に対し厚く御礼を申し上げる次第です。

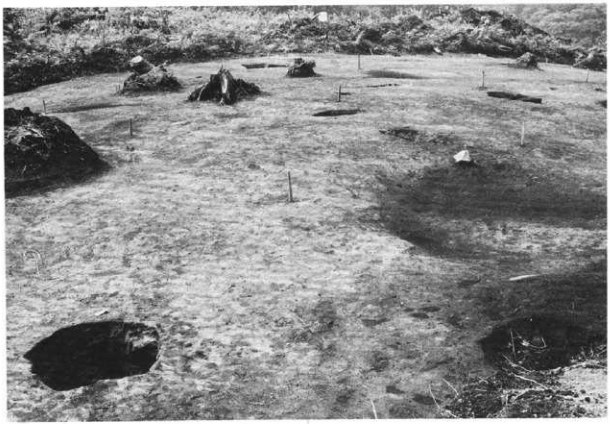
PLATE

▲ 遺跡航空写真

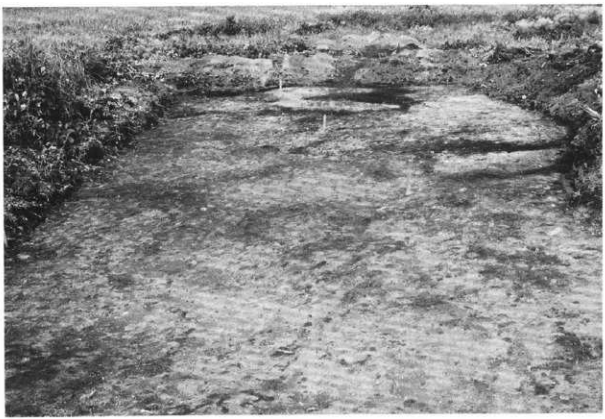
▲▼ A区重機による表土除去作業 (CDE17～6)
(CDE 6～17)

▲ A区調査作業風景（CDE 6～17）

▼ A区完掘状態（CDE17～6）



▲ A区完掘状態 (F 15~Q 15)
▼ (P 15~S 11)

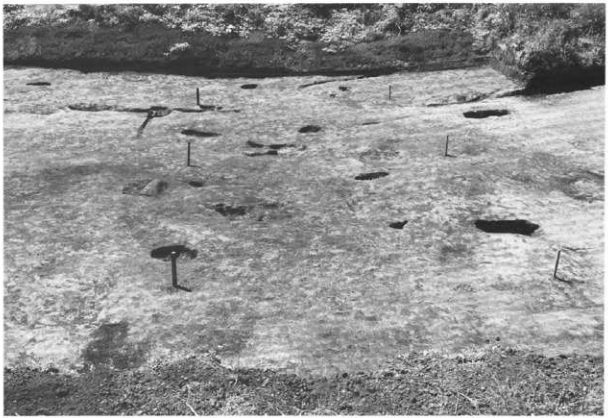


▲ A区おとし穴配列状態（R 10～N 17）

▼ A区完掘状態 （W14～T 19）

▲ A区遺構上面（CDE 13～17）

▼ B区完掘状態（DEF 27～24）

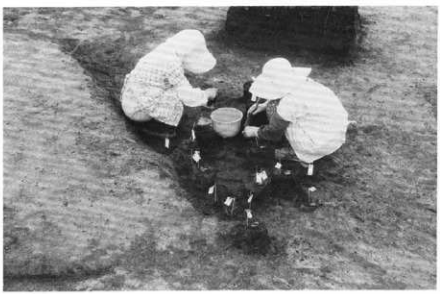


▲ B区完掘状態（H17より14）

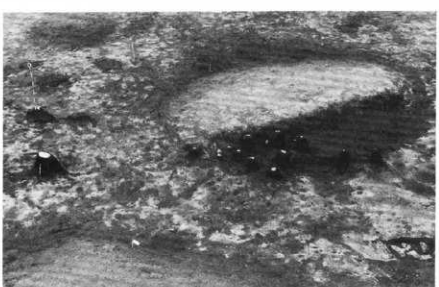
▼ A区土層状態（C14東側ロームマウンド）

▲ 鳴沢頭Ⅱ遺跡より鳴沢頭Ⅰ遺跡を望む

▼ 発掘開始式



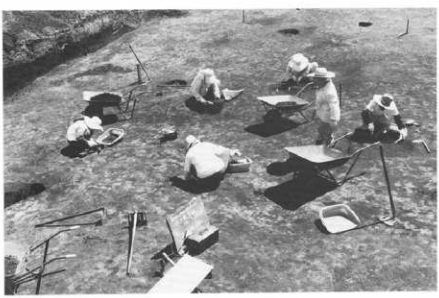
◀ D10ローム マウンド
土器出土状態



◀ D10ローム マウンド
土器出土状態

◀ D10ローム マウンド
土器出土状態

◀ B区調査風景
（DEF 24～27）



◀ B区調査風景
（GHI 25・26）

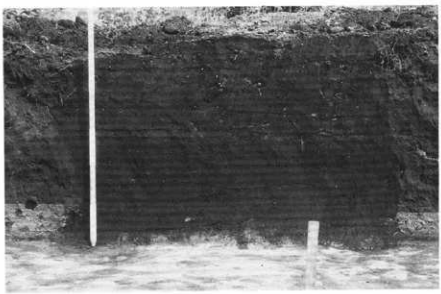
◀ B区縄文土器出土
（GHI 25・26）

◀ B区遺物分布状態

◀ B区GHI 25・26
土器出土状態

◀ B区H25
土器出土状態

◀ A区測量風景
（GHI 15・16）



◀ C 12 東側土層調査

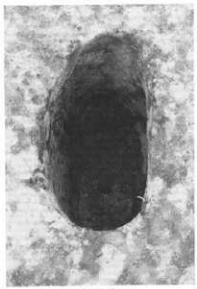
◀ B区地山断ち割り旧石器調査

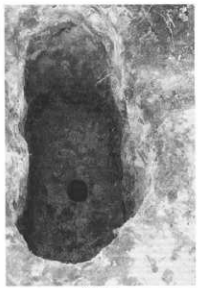
◀ B区石鏃出土状態

◀ B区石器出土状態

◀ B区石匙出土状態

SK 1


SK 4


SK 5

SK 9

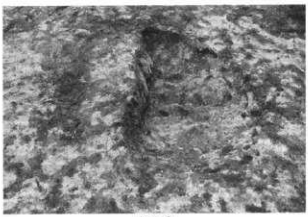
SK 14

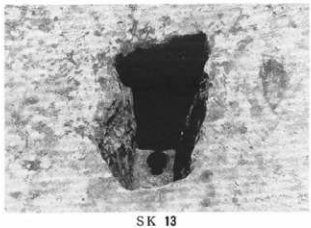
SK 15

SK 19

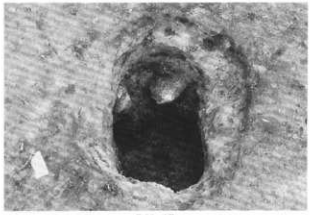
SK 20

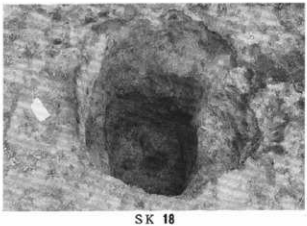
SK 21


SK 6


SK 13

SK 16


SK 17


SK 18

SK 24

SK 25

SK 29